

吉井川下宿遺跡

吉井川下宿遺跡

社会資本総合整備（地域自主戦略（公安））事業
一般国道254号川内工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



社会資本総合整備（地域自主戦略（公安））事業
一般国道254号川内工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群馬県高崎土木事務所
埋蔵文化財調査事業団

2013

群馬県高崎土木事務所
群馬県藤岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

吉井川下宿遺跡

社会資本総合整備（地域自主戦略（公安））事業
一般国道254号川内工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

群馬県高崎土木事務所
群馬県藤岡土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

本書は、国道254号川内交差点改良事業を進めるにあたり、埋蔵文化財保護を目的として発掘調査が行われた高崎市の吉井川下宿遺跡の調査報告書です。

この遺跡の発掘調査は群馬県藤岡土木事務所の委託を受け、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成21年度に実施し、平成24年度に群馬県高崎土木事務所の委託を受けて整理事業を実施しました。この遺跡は高崎市吉井町にあり、国道254号から分岐して高崎市街地へ至る交通の要所である川内交差点に隣接する位置にあります。高崎から富岡・下仁田へ鎚川沿いに西へ進み長野県へ至るルートは古代からの重要な交通路で、遺跡周辺は江戸時代には中山道の脇往還「下仁田道」の吉井宿入口にあたりました。江戸時代には当地の名産品である火打金^{ひうちかね}を生産した鍛冶のあったことも知られています。発掘調査では火打金生産に関わる鍛冶の痕跡の他に「下仁田道」の路面も現れ、地域の江戸時代研究に新たな知見を提供するものとなりました。地域の近世史をひも解く資料として、また郷土理解の教材として活用していただけたら幸いです。

発掘調査から本書刊行に至るまでには、群馬県藤岡土木事務所・高崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、高崎市教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆さまから多大なご協力を賜りました。ここに心から感謝の意を表し、序といたします。

平成25年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 須田 榮一

例 言

- 1 本書は、平成21年度国道254号(川内交差点)地域活力基盤創造交付金事業に伴い発掘調査が実施され、平成24年度社会資本総合整備(地域自主戦略(公安))事業一般国道254号川内工区に伴い整理事業を行った吉井川下宿遺跡の調査報告書である。
- 2 吉井川下宿遺跡は群馬県高崎市吉井町吉井川412-8、412-9、412-10、414-1、414-4、414-5、414-8、414-9番地に所在する。
- 3 事業主体 群馬県西部県民局藤岡土木事務所(調査)
群馬県西部県民局高崎土木事務所(整理)
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間 平成22年(2010年)1月1日～平成22年(2010年)1月31日
(履行期間)平成21年(2009年)12月1日～平成22年(2010年)3月31日
- 6 整理想期間 平成24年(2012年)11月1日～平成25年(2013年)1月31日
(履行期間)平成24年(2012年)11月1日～平成25年(2013年)3月31日
- 7 発掘調査体制は次のとおりである。
発掘調査担当 飯田陽一(上席専門員)
掘削請負 株式会社 シン技術コンサル
地上測量委託 アコン測量設計株式会社
- 8 整理想業体制は次の通りである。
整理担当 大西雅広(上席専門員)
保存処理：関邦一(係長(総括)) 遺物写真撮影：佐藤元彦(係長(総括))
- 9 本書作成の担当者は次のとおりである。
編集 大西雅広
執筆 本文 大西雅広(第Ⅲ章) 左記以外 飯田陽一
遺物観察表 土師器：桜岡正信(上席専門員)、石製品・陶磁器：大西雅広、金属製品：関邦一が担当した。
- 10 発掘調査および報告書作成には、群馬県教育委員会、高崎市教育委員会、吉井郷土資料館、高崎土木事務所、藤岡土木事務所、群馬県立文書館、公益財団法人三井文庫からご指導ご協力を頂いた。
- 11 発掘調査資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 本報告書における座標値は世界測地系IX系による。
- 2 挿図中に示す方位記号は座標上の北を示している。なお、真北方向角は $0^{\circ} 34' 44''$ である。
- 3 本文および一覧表の方位表記については、例としてN-45° Eとあるのは座標北より45度東側に振れていることを示している。
- 4 グリッドおよび座標値の表記方法については本文2頁に記した。
住居の面積は、1/30打ち出し図上で住居壁下端ラインをデジタルプランメーターで3回計測した数値の平均値である。壁溝のない住居では床面積と一致し、壁溝のある住居では床面に壁溝部分を加えた面積となっている。
- 5 遺構番号については、発掘調査時の名称を原則として踏襲した。このため、調査段階での欠番に加え、整理作業段階での読み替えや削除などが重なって欠番を生じている。整理段階で番号を加えた遺構があるが、欠番を埋めずに新たな続き番号を設定した。
- 6 遺構および遺物図の縮率はそれぞれの挿図中のスケールに示した。同一ページ内の遺物実測図で異なる縮率の図が混在する場合は、図中スケールに該当しない遺物番号に縮率を(分数)で加えて表示した。
- 7 住居や土坑・ピット等の計測表「長×短×深」は「長径×短径×床面(確認面)からの深さ」を意味する。
- 8 遺構図の縮率は下記の基準を原則とした。
 竪穴住居・井戸・掘立柱建物 1 : 60 住居カマドの詳細図 1 : 30
 道 1 : 200 断面 1 : 40 道脇のピット列 1 : 50
 鍛冶遺構・ピット・土坑 1 : 40 鍛冶遺構の断面 1 : 20
 方形周溝遺構 1 : 100 同溝断面 1 : 50 溝 1 : 50
- 9 遺物図の縮率は下記の基準を原則とした。遺物写真もおおむね図の縮率に沿うようにした。
 古墳時代の土器 1 : 3、羽口 1 : 4
 陶磁器類 碗皿等小型品 1 : 3、鉢・すり鉢・焙烙等大型品 1 : 4
 石製品 砥石 1 : 2、石造品 1 : 4、金属製品 1 : 2、古銭の拓影のみ 1 : 1
- 10 本文中にある火山噴出物の標記は以下のとおりである。
 As-A : 浅間山A軽石 1783年(天明3年)
 As-B : 浅間山B軽石 1108年(天仁元年)
 Hr-FP : 榛名山二ツ岳軽石 6世紀中頃
 Hr-FA : 榛名山二ツ岳火山灰 6世紀初頭
 As-C : 浅間山C軽石 4世紀初頭
 As-YP : 浅間山板鼻パミス 1.3万年前頃 (遺構埋没土の土層説明の項ではYPと略す)
- 11 遺物観察表は巻末に一括して掲載した。観察表中の略語は以下のとおりである。
 口→口縁上端径 底→底径および陶磁器高台の下端径 頸→頸部外径 胴→胴部最大径 高→器高 長→長さ 厚→厚さ 重→重さ 復元値には()を、残存値には[]をつけて区別した。
 また、胎土観察における砂粒の表現でおおむね2mm未満を細砂粒、2mm以上を粗砂粒とした。色調は『新版標準土色帖』による。

目次

序

例言・凡例

目次

挿図・表・写真図版目次

第Ⅰ章 発掘調査と遺跡の概要

- 1 発掘調査に至る経緯と経過…………… 1
- 2 整理作業の経緯と方法
 (1) 経緯…………… 2
 (2) 方法…………… 2
- 3 遺跡の立地と周辺の遺跡
 (1) 遺跡の立地…………… 3
 (2) 周辺の遺跡…………… 4

第Ⅱ章 調査の内容

- 1 概要…………… 7
- 2 古代の遺構と遺物…………… 9
 (1) 方形周溝遺構…………… 9
 (2) 竪穴住居 1号住…………… 10
 2号住…………… 15
 (3) 土坑(陥穴) 3～7・31号土坑…………… 15
- 3 近世の遺構と遺物…………… 17
 (1) 道…………… 17
 (2) 井戸…………… 23
 (3) ピット列・掘立柱建物・礎石建物…………… 29
 (4) 鍛冶工房…………… 32
 (5) 土坑…………… 35
 (6) 溝…………… 41
 (7) 石垣…………… 42
 (8) 耕作痕…………… 44
 (9) その他の遺物…………… 44
 (10) 鍛冶遺物の観察…………… 48

第Ⅲ章 考察

吉井川下宿遺跡と川内村「中野屋孫三郎」…………… 50

遺物観察表…………… 54

- ・参考文献…………… 62
- ・写真図版
- ・抄録
- ・奥付

挿 図 目 次

第1図	吉井川下宿遺跡の位置	1
第2図	グリッド設定模式図	2
第3図	周辺の地形	3
第4図	周辺の遺跡	5
第5図	古代の遺構配置図	7
第6図	近世の遺構配置図	8
第7図	1号方形周溝遺構	9
第8図	1号方形周溝遺構断面	10
第9図	1号住居	11
第10図	1号住居遺物出土状態およびカマド	12
第11図	1号住居出土遺物(1)	13
第12図	1号住居出土遺物(2)	14
第13図	2号住居	15
第14図	古代の土坑	16
第15図	1号道(上路面)	17
第16図	1号道(新旧の下路面)	18
第17図	1号道断面(1)	19
第18図	1号道断面(2)	20
第19図	1号道下路面のピット列	21
第20図	1号道および側溝出土遺物	22
第21図	1号井戸	23
第22図	1号井戸出土遺物(1)	24
第23図	1号井戸出土遺物(2)	25
第24図	1号井戸出土遺物(3)	26
第25図	1号井戸出土遺物(4)	27
第26図	1号井戸出土遺物(5)	28
第27図	1号ピット列	29
第28図	2号掘立柱建物・3号掘立柱建物	31
第29図	4号礎石建物	32
第30図	鍛冶工房	33
第31図	鍛冶工房出土遺物	34
第32図	近世以降の土坑(1)	35
第33図	近世以降の土坑(2)	36
第34図	近世以降の土坑(3)	37
第35図	近世以降の土坑(4)および出土遺物(1)	38
第36図	近世以降の土坑出土遺物(2)	39
第37図	4号溝・5号溝および出土遺物	41
第38図	石垣	42
第39図	石垣脇出土遺物	43
第40図	畑耕作痕	44
第41図	その他の遺物(1)	45
第42図	その他の遺物(2)	46
第43図	その他の遺物(3)	47
第44図	吉井町都市計画図 前	52
第45図	吉井町耕地図	52
第46図	多胡郡川内村絵図	52
第47図	明治八年七小区物産下調簿	52
第48図	諸国道中商人鑑	52
第49図	江戸・東京の吉井火打金引札 後	53
第50図	吉井火打金引札	53
第51図	吉井火打金の暖簾	53
第52図	高崎市指定史跡 火打鍛冶職中野屋孫三郎一族墓	53
第53図	発掘調査以前の吉井宿東側入り口付近	53

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	6
第2表	土坑一覧(古代)	16
第3表	土坑一覧(近世)	39
第4表	1号井戸出土鍛冶滓の分類	48
第5表	鍛冶遺構ピット内土壌の内訳	49
第6表	磁着物サンプルの内訳	49

写真図版目次

PL-1 遺跡全景

- ① 遺跡東側全景(南西から)
- ② 遺跡西側全景(北西から)

PL-2 方形周溝遺構

- ① 1号方形周溝遺構全景(南西から)
- ② 1号方形周溝遺構東側周溝(北西から)
- ③ 1号方形周溝遺構東側周溝内土坑施設断面(北西から)
- ④ 1号方形周溝遺構北側周溝(南西から)
- ⑤ 1号方形周溝遺構周溝断面(北西から)

PL-3 1号住居(1)

- ① 1号住居全景(西から)
- ② 1号住居上面遺物出土状態(西から)
- ③ 1号住居上面土層断面(南西から)
- ④ 1号住居下面土層断面(南西から)
- ⑤ 1号住居貯蔵穴断面(南から)
- ⑥ 1号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)
- ⑦ 1号住居P1土層断面(南から)
- ⑧ 1号住居P4完掘状態(西から)

PL-4 1号住居(2)・2号住居

- ① 1号住居カマド袖元部(南から)
- ② 1号住居カマド周辺遺物出土状態(東から)
- ③ 1号住居断面(西から)
- ④ 1号住居カマド断面(南から)
- ⑤ 1号住居カマド東脇遺物出土状態(東から)
- ⑥ 2号住居全景(南から)
- ⑦ 2号住居断面(南から)
- ⑧ 2号住居P1断面(北から)

PL-5 古代の土坑・1号道路(1)

- ① 3号土坑全景(南東から)
- ② 4号土坑全景(東から)
- ③ 5号土坑全景(北西から)
- ④ 6号(右)・7号(左)土坑全景(北西から)
- ⑤ 1号道路上面全景(北東から)
- ⑥ 1号道路下面全景(北東から)

PL-6 1号道路(2)

- ① 1号道路全景(西から)
- ② 1号道路南側溝断面(北東から)
- ③ 1号道路南側溝内遺物出土状態(西から)
- ④ 1号道路南側溝遺物出土状態(西から)
- ⑤ 1号道路北側溝と柱列(北東から)
- ⑥ 1号道路北側溝断面(北東から)
- ⑦ 1号道路北側溝断面(北東から)

PL-7 1号道路(3)

- ① 1号道路東側断面(北東から)
- ② 1号道路南側断面(北西から)
- ③ 1号道路下面路面(東から)
- ④ 1号道路下面路面(東から)
- ⑤ 1号道路溝脇掘り込み群(北東から)

PL-8 1号井戸・建物

- ① 1号井戸全景(北東から)
- ② 1号井戸断面(北から)
- ③ 1号井戸遺物出土状態(南東から)
- ④ 1号井戸底面付近断面(北から)
- ⑤ 1号井戸遺物出土状態(北西から)
- ⑥ 1号井戸再建部断面(西から)
- ⑦ 1号礎石建物全景(東から)
- ⑧ 3号掘立柱建物全景(東から)

PL-9 ピット列・建物・ピット

- ① 1号ピットP1全景(北から)

- ② 1号ピットP2全景(北から)

- ③ 1号ピットP4全景(北から)

- ④ 1号ピットP7全景(北から)

- ⑤ 3号掘立柱建物P8全景(南から)

- ⑥ 3号掘立柱建物P9全景(南から)

- ⑦ 3号掘立柱建物P10全景(南から)

- ⑧ 3号掘立柱建物P10断面(東から)

- ⑨ 3号掘立柱建物P11全景(南から)

- ⑩ 3号掘立柱建物P11断面(南から)

- ⑪ 3号掘立柱建物P12全景(南から)

- ⑫ 3号掘立柱建物P13全景(南から)

- ⑬ 2号掘立柱建物P14全景(南西から)

- ⑭ 2号掘立柱建物P15全景(南東から)

- ⑮ 2号掘立柱建物P16全景(南から)

PL-10 鍛冶遺構(1)

- ① 鍛冶遺構群全景(東から)

- ② 1・2号鍛冶確認状態(東から)

- ③ 1号鍛冶全景(北から)

- ④ 1号鍛冶焼土断面(西から)

PL-11 鍛冶遺構(2)

- ① 1号鍛冶ピット上層断面(西から)

- ② 1号鍛冶ピット下層断面(西から)

- ③ 2号鍛冶全景(東から)

- ④ 2号鍛冶焼土断面(東から)

- ⑤ 2号鍛冶ピット断面(西から)

- ⑥ 2号鍛冶ピット全景(北から)

- ⑦ 3号鍛冶焼土断面(南から)

- ⑧ 3号鍛冶ピット断面(南から)

PL-12 近世以降の土坑

- ① 1号土坑全景(北から)

- ② 8号土坑全景(東から)

- ③ 9号土坑全景(西から)

- ④ 土坑集中地点A全景(南から)

- ⑤ 12号土坑全景(西から)

- ⑥ 25号土坑断面(西から)

- ⑦ 土坑集中地点B全景(南から)

- ⑧ 土坑集中地点C全景(西から)

- ⑨ 18号土坑断面(東から)

- ⑩ 19号土坑断面(南から)

- ⑪ 20号土坑断面(北から)

- ⑫ 23号土坑全景(西から)

- ⑬ 24号土坑断面(南から)

- ⑭ 31号土坑全景(南東から)

- ⑮ 33号土坑断面(北から)

PL-13 溝・列石・畑

- ① 5号溝全景(北から)

- ② 5号溝断面(南から)

- ③ 1号列石全景(北西から)

- ④ 北西隅土層(南から)

- ⑤ 畑全景(東から)

PL-14 出土遺物(住居・道)

PL-15 出土遺物(井戸(1))

PL-16 出土遺物(井戸(2))

PL-17 出土遺物(井戸(3)・土坑(1))

PL-18 出土遺物(土坑(2)・溝・石垣・その他(1))

PL-19 出土遺物(その他(2))

PL-20 鍛冶関連遺物

第 I 章 発掘調査と遺跡の概要

1 調査に至る経緯と経過

国道254号線は、東京都文京区本郷で国道17号線から分岐し、途中埼玉県・群馬県を通過し長野県松本市へ至る総距離223.6kmの一般国道である。江戸時代、中山道の脇往還として頻繁に利用された道(下仁田道：姫街道とも呼ばれた)で、現在でも下仁田街道、埼玉県下では川越街道などの呼び名がある。

群馬県内の国道254号線は富岡市から旧多野郡吉井町(現在の高崎市吉井町)間で現道の北側にバイパス建設が実施され、これまでに西側より下仁田バイパス・富岡バイパスが完成している。甘楽吉井バイパスも部分的に開通しているが、本遺跡のある吉井町中心部付近では未完成である。

川内交差点は国道254号線から一般県道71号線(高崎・吉井線)が北側へ分岐して高崎市街地へ向かう三叉路である。この交差点の改良工事は渋滞緩和のための右折車

線建設と歩行者用通路建設を目的としたものである。

工事計画に伴い平成19年2月13日と平成21年8月18日の2回、群馬県教育委員会文化財保護課が試掘トレンチ調査を実施し、天明三年(1783)の浅間山噴火に伴う降下軽石(As-A)で埋め戻された鉄滓混じりの大型遺構や近世の溝等を確認した。付近は江戸時代下仁田道の吉井宿入口にあたる。この宿の火打金は江戸の町へも知れ渡った名産品であったが、この火打金造りを行った鍛冶屋があったと伝えられる地点であった。江戸時代を主な対象とするが周辺は古墳時代以降の包蔵地が存在することから発掘調査が必要と判断された。

平成21年11月27日、群馬県教育委員会文化財保護課の調整を元に群馬県藤岡土木事務所より財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が委託を受け、平成21年12月1日「国道254号線(川内交差点)地域活力基盤創造交付金事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託」の契約を締結した。これにより平成22年1月1日より同年1月31日までの期間



第1図 吉井川下宿遺跡の位置(旧吉井町都市計画図18 1:2500を縮小して使用)

第1章 発掘調査と遺跡の概要

に、調査面積1179㎡の発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は1月4日より(以下すべて1月)資材等の搬入を行い、6日から重機による掘削を開始した。調査区は国道脇の東西に長い地形で、掘削表土の搬出ができないため、東側から表土を剥ぎ一旦西側へ仮置きし次に西側の調査へ移る「打って返し」を行った。

東側ではAs-A下の道跡などがすぐに確認され軽石堆積のない場所でも、この面を目安に表土剥ぎを行った。中央付近では軽石を廃棄した大型の井戸内から鍛冶関連の遺物が多量に出土した。

22日には高所作業車による全景撮影を行い東側から中央部の調査を終了し、西側調査へ移行した。西側からは鍛冶工場の痕跡や古墳時代住居などが確認され発掘作業は30日までかかったが、重機による埋戻し作業を行い、調査を終了した。

2 整理作業の経緯と方法

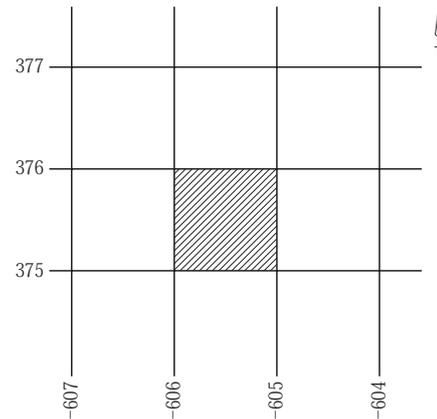
(1) 経緯

吉井川下宿遺跡出土遺物の水洗・注記および調査記録類の基本整理作業等は発掘調査を行った平成21年度中に調査事務所等にて完了し、群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されていた。

整理事業は平成24年度社会資本総合整備(地域自主戦略(公安))事業一般国道254号線川内工区の埋蔵文化財整理業務として群馬県教育委員会文化財保護課の調整を元に平成24年10月31日群馬県高崎土木事務所と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の間で委託契約を締結した。これにより平成24年11月1日から平成25年1月31日までの期間に実施することとなった。

(2) 方法

発掘調査では国家座標に基づいた測量図を作成したが、本報告書では座標値の下3桁を使った表示を行っている。なお、発掘調査時にグリッド設定は行っていないが、整理作業の中で第2図のように1m方眼を用い、方眼の南東隅を座標値交点で読むようにして、グリッドとして遺構の地点標記を行った。



第2図 グリッド設定模式図

例示すると、本文中や一覧表などで「375-605」が示するのは図の斜線部分である。

発掘調査成果である遺構図面・写真類はデジタルデータで整理作業に引き渡し、そのままデジタル編集作業を行った。

遺物は接合作業後実測個体を選別し、復元・撮影・実測作業を行った。一部小破片では撮影を省いた個体がある。土師器14点、陶磁器類103点、羽口17点、石製品11点、金属製品30点、古銭13点を図化した。アナログトレースや採拓後デジタルデータに変換し、遺構図と同様のデジタル版作成を行った。

鉄滓類は洗浄後重量で約70kgの出土があり、井戸出土品61kgを中心に分類・集計作業後、報告書取り上げ個体を選別して写真撮影を行った。鍛冶遺構付随ピット内から取り上げた土壌は約124kgあった。これらをサンプル的に水洗し、微細遺物の抽出、鍛造剥片など磁着物選別・集計等を行ない検討資料とした。

金属製品はクリーニング作業後実測・写真撮影を行い、収納前に保存処理を施した。

(2) 周辺の遺跡

ここでは吉井川下宿遺跡で調査された古墳時代と江戸時代の周辺景観を理解するために、これらの時代を中心とした周辺の歴史的環境について辿ってみたい。アルファベットで示したのは古墳群の範囲である。引用・参考文献は60頁に記した。

【弥生時代以前】旧石器時代の遺跡は上信越自動車道の発掘調査で中位段丘上の黒熊中西遺跡などの調査があった。約27,000年前のAT層下から確認される例である。縄文時代草創期・早期の遺跡はほとんど見つかっていない。集落が現れるのは前期からで、中位段丘上の椿谷戸遺跡(16)や多比良笠掛遺跡(29)などの調査例がある。本遺跡からも縄文時代の可能性のある剥片類の出土があるが、近接した集落は報告されていない。後期以降は再び遺跡が少なくなる。

弥生前期から中期も遺跡は少ないが、神保富士塚遺跡では弥生中期の土坑群が調査され注目されている(註1)。弥生時代後期になると中位段丘上で集落が増加し、折茂東遺跡(18)や多比良追辺野遺跡(34)など古墳時代前期まで継続する集落が多い。また古墳時代後期以降の集落占地と共通することを特徴としている。

【古墳時代】古墳群は鑄川沿いおよび中位段丘上の小河川沿いに後期古墳群が見られる。鑄川沿いでは特に広い下位段丘のある右側に密集している。小河川沿いでは北側から流下して鑄川に合流する大沢川周辺に、神保古墳群(A)や多胡古墳群(B)などこの地域最大の古墳群が展開する。

集落は古墳時代前期中位段丘上で見られるが、後期になって急激に増大する。南側に隣接する藤岡市や西側に隣接する甘楽町で滑石を産出することから滑石製品を製作する工房が古くから注目され、昭和33・34年に調査された入野遺跡(14)は嚙矢となった(註2)。下位段丘での古墳時代後期集落の調査例は少なく、鑄川左岸の川福遺跡(5)などわずかに見られるのみである。古墳群が展開しており集落の存在は不可欠であるが、現在の市街地と重複し調査例が少ないものと思われる。本遺跡の住居もそれら集落内の1棟となるはずである。

【奈良・平安時代】律令期の町域は倭名類聚抄記載の多胡郡にあたる地域である。本遺跡の西側に隣接する甘楽は「から」を語源とする半島からの帰化人の多い地域と古く

から指摘されている。周辺の郡を割譲し多胡郡建郡を記した日本三古碑の一つ多胡碑は本遺跡北側1.5kmの鑄川右岸で本遺跡と同じ段丘面にある。

古墳時代後期に見られた大規模な集落はこの時期にさらに拡大し広範囲にわたって確認される。上信越自動車道にかかわる発掘調査で中位段丘上では矢田遺跡(35)など100棟を超える集落の他、黒熊中西遺跡(32)や神保境遺跡(20)など多数調査されてきたが、近年は下位段丘面でも上河原遺跡(11)や御門遺跡(12)などの集落の広がりが確認されている。

生産遺跡ではヌカリ沢A窯跡(3)など平安時代の須恵器窯跡が調査されている。道六神遺跡(9)では条里地割を留めるとされる溝が調査されている。

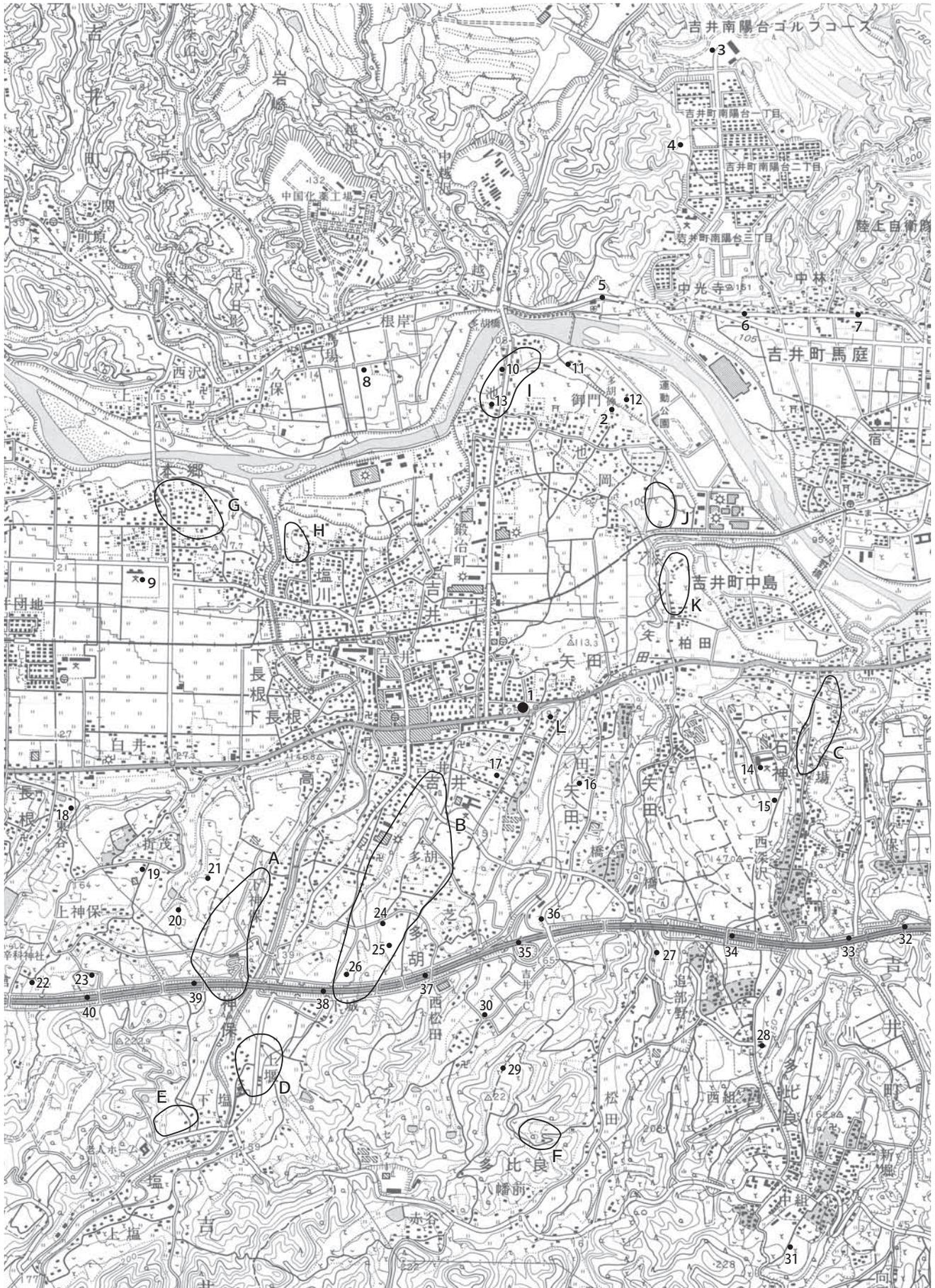
【中世の城館】戦国時代の西上州は北条氏・上杉氏・武田氏の勢力が拮抗する地であった。甘楽の谷は長く小幡氏の支配下であり、武田氏の侵攻による戦乱があった。城柵の多い地域であり、川内の砦(L)は本遺跡に隣接した台地先端部にある。

【江戸時代】信州との国境へ向かう中山道は群馬県西部では碓氷側に沿った安中市周辺を横断しているが、鑄川沿いには中山道の脇往還が通っていた。信州街道・富岡街道・下仁田街道または比較的起伏が少ないことから姫街道と呼ばれ、吉井町は宿場町であった。天明3年の浅間山噴火の際の降下軽石を集めて廃棄した痕跡が井戸で見られるが、畑の一面に寄せた「灰掻き山」と呼ばれる復旧痕が上信越道甘楽パーキングエリアにあたる天引向原遺跡で調査されている。

火打金は本遺跡でも生産されていたと推定される江戸時代吉井宿の名産品であるが、東シメ木遺跡(24)や多胡蛇黒遺跡(37)に出土例がある。

註1 石川日出志「神保富士塚式の提唱と弥生中期土器研究上の意義」『土曜考古』第27号2003

註2 群馬大学学芸学部史学研究室の調査で報告は吉井町教育委員会から刊行された。



第4図 周辺の遺跡(国土地理院1:25000地形図『富岡』『高崎』『上野吉井』『藤岡』を使用)

第 I 章 発掘調査と遺跡の概要

第 1 表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	縄文			弥生		古墳					奈・平		その他	中・近世	遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献
		前	中	後晩	中	後	集落			墓	生産	集落	生産				
							前	中	後								
1	吉井川下宿遺跡								○	○					○	本報告の遺跡。	
2	多胡碑														※	多胡郡建郡を記した日本三古碑の一つ。	
3	ヌカリ沢 A 窯跡														※	8 世紀後半から 9 世紀前半の須恵器窯。	21
4	彦田谷窯跡														※	ヌカリ沢窯と同時期の須恵器窯。	
5	川福遺跡								○						○	須恵器工人の集落か。土錘多量に出土。	5・31
6	中林遺跡														○	8 世紀後半から 9 世紀主体の集落。	39
7	天神下遺跡	●													○		27
8	富岡遺跡	▲	▲												○		11
9	道六神遺跡														○	※ 糸里地割を留める可能性持つ溝。	7
10	釜ヶ淵遺跡														○		
11	上河原遺跡														○	鍋川右岸縁部で多胡碑の北西に近接。	36
12	御門遺跡						○								○	● 地名より多胡郡衙推定地。	23
13	竹腰遺跡	▲					▲	▲							○		12
14	入野遺跡	○				○	○	◎							◎	● 古墳後期滑石製品工房址調査の学史的遺跡。	1・6
15	馬場遺跡					○		○	○						●		24
16	椿谷戸遺跡	○	○												○	▲	9・13・35
17	川内遺跡		▲						○						○	本遺跡南側に隣接する中位段丘上集落遺跡。	4・33
18	折茂東遺跡					○	○	○	○						○		8
19	折茂Ⅲ遺跡	○							○						○	古墳後期～平安集落。暗文土器豊富。	
20	神保境遺跡						○	○	○	○	◎				◎	古墳後期～平安大集落。	22
21	北高原遺跡						○	○	○	○	◎				◎	古墳後期～平安大集落。	22
22	富士塚遺跡														○		
23	宮西遺跡								○						○		
24	東シメ木遺跡									○						※ 多胡古墳群中の円墳 6 基。玉類他遺物豊富。遺構外江戸時代遺物に燧鉄 2 点。	35
25	多胡松原遺跡								○						○	古墳後期～平安集落。	35
26	下条遺跡								○	○						※ 神保下条遺跡に隣接。中世館。	37
27	多比良観音山遺跡												○			As-B 下の水田。	28
28	東沢遺跡								○						○		8
29	多比良笠掛遺跡	●	○												○		32
30	柳田遺跡								○						○		10
31	多比良天神原遺跡	○								○							29
32	黒熊中西遺跡								○				◎	○	※	※ 平安時代寺院址および鍛冶遺構。	15・19
33	多比良平野遺跡														○		20
34	多比良追辺野遺跡	○				○	○	○	○						◎	※ 橈型滓等鍛冶に関わる遺物。	25
35	矢田遺跡	▲	○	▲		○	○	○	◎						◎	○ 古代多胡郡矢田郷中心地に比定される大集落。「八田」刻書石製紡輪出土。	14
36	矢田遺跡		●						○						○	※ 近世の鍛冶関連遺物。	30・34
37	多胡蛇黒遺跡		●						◎						◎	古墳後期～平安大集落。遺構外遺物に燧鉄。	17
38	神保下條遺跡		●				○	○	○						○	豊富な埴輪。As-A 下の水田・畑。	16
39	神保植松遺跡																26
40	神保富士塚遺跡	○	●	●		○		◎							◎	古墳後期～平安大集落。弥生中期土坑群。	18

縄文・弥生の項で●は竪穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるものを表わす。◎は大規模な遺構の確認のあったことを示し、集落であれば竪穴住居では大よそ30軒以上の調査である。※は備考欄に説明を加えている。▲はその他若干の痕跡が見られたことを表わす。参考文献は62頁に記した。

No	古墳群およびその他の遺跡	参考文献
A	神保古墳群	大沢川左岸の63基の後期古墳群。
B	多胡古墳群	大沢川右岸のこの地域最大規模の91基以上の古墳群。
C	祝神古墳群	土合川左岸の後期古墳群。
D	塩 I 古墳群	10基の後期古墳群。塩 II 古墳群と共に塩古墳群と呼ばれる。
E	塩 II 古墳群	12基の後期古墳群。
F	山ノ神古墳群	7 基の後期古墳群。
G	本郷古墳群	鍋川右岸、21基の後期古墳群。
H	北原古墳群	大沢川が鍋川に合流する地点付近の後期古墳群。
I	下池古墳群	鍋川右岸、多胡碑上流側に隣接。
J	高木古墳群	鍋川右岸、多胡碑下流側に隣接。6 基現存。
K	塚原古墳群	付近には少ない前方後円墳を含む後期古墳群。
L	川内の砦	本遺跡南東側に隣接する丘陵先端部に築かれた中世施設。
		2

第Ⅱ章 調査の内容

1 概要

吉井川下宿遺跡で確認された遺構は古墳時代から平安時代にかけての古代と江戸時代以降の2時期を主体としている。時期不明の遺構も含まれるが2項で古代の遺構、3項で近世以降の遺構を扱った。古墳時代中期以前の遺物は縄文時代の可能性のある剥片等の石器が数点出土したのみだった。中世から江戸時代初頭にかけての遺物も確認できていない。

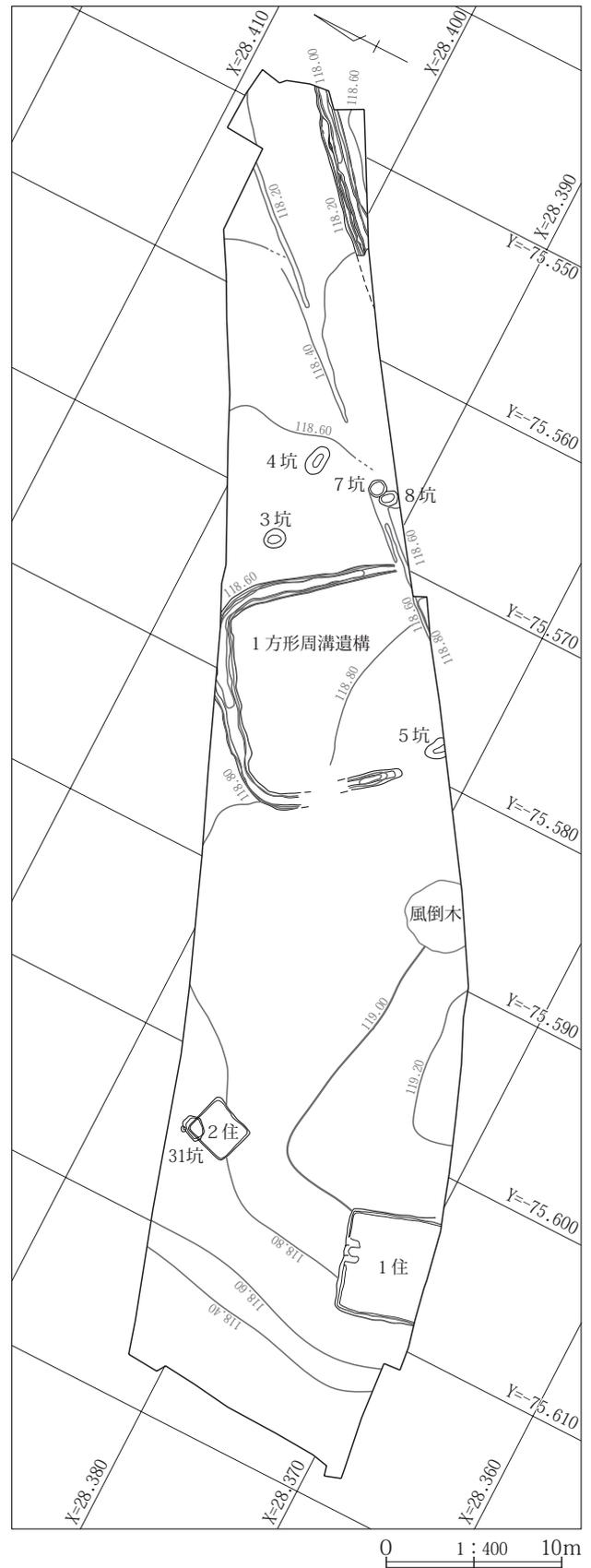
東西に細長い調査区は中央付近に段差があり西側の一部で低くなっている。これは西側が近年に造成のため削平されたものと思われるこの部分の残存状態は悪い。調査面は江戸時代の地表面より掘り込まれているようでAs-Aの一次堆積が確認できる部分はなかった。本文中で調査区東側・西側と呼称する場合はこの段差を挟んだ東西それぞれの調査区域を表している。

古代の遺構には方形周溝遺構、2棟の竪穴住居、5基の土坑がある(第5図)。土坑は調査区東側に偏って分布するようだ。多量の遺物を出土した古墳時代の竪穴住居(1号住居)以外の時期は明瞭でない。土坑は天明三年以前に埋没したものは時期が明確でないものがほとんどで、それらは陥穴状のものや埋没土が黒色土の遺構を古代、それ以外の遺構を近世以降に便宜的に分けた。遺構以外から出土する該期の遺物もきわめて少なかった。

近世以降になると遺構は数・種類とも豊富で道跡・井戸・建物跡・土坑・鍛冶工房跡などを調査し(第6図)、遺構種類ごとにまとめて報告した。調査区東側では一次堆積した天明三(1783)年の降下軽石(As-A)が広範囲に見られるが、調査区西側では西隅の傾斜面で一部確認できるのみである。

調査区東側では降下軽石下を含む2面の道跡が明瞭に表れた。建物や柵となる可能性のあるピット群・土坑などを調査したが、残存状態が良いにもかかわらず全体に遺構数は少なく遺物量も少なかった。

調査区西側は鍛冶工房が推定されていた地点でそれに関連すると思われる焼土(炉跡か)やピット、および井戸を調査しそれに伴う膨大な遺物を出土した。建物内の土



第5図 古代の遺構配置図

第Ⅱ章 調査の内容

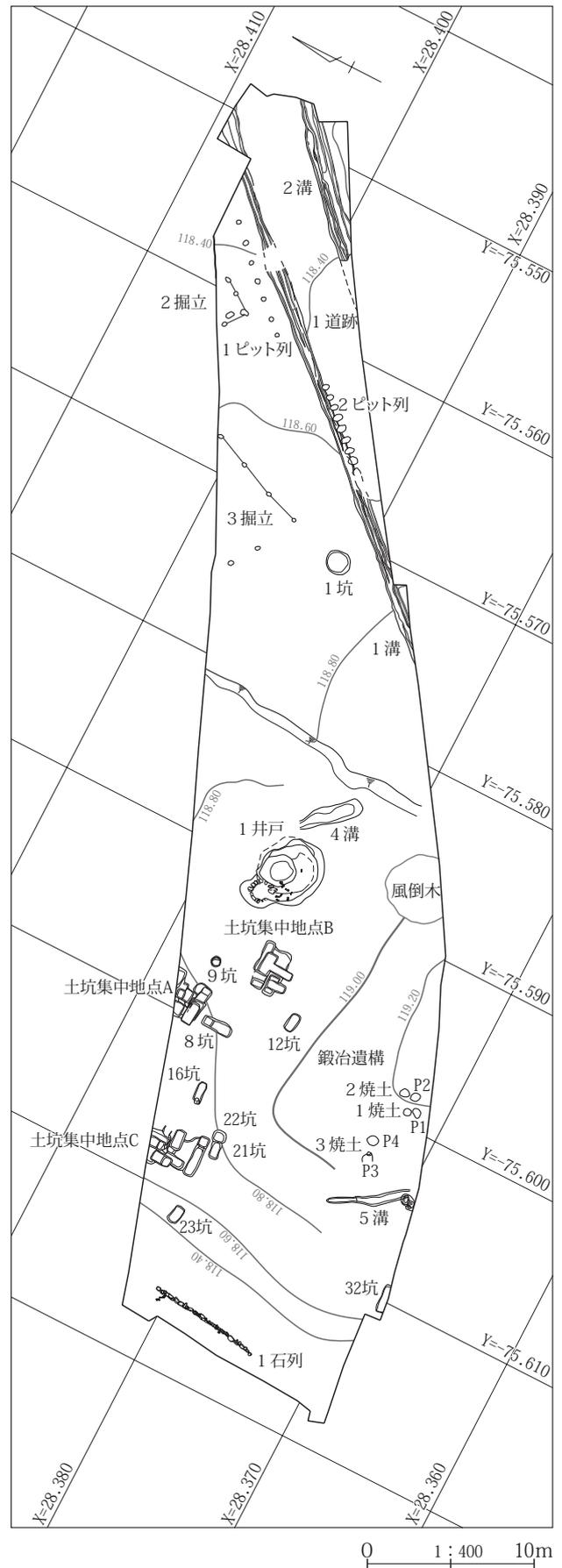
間や礎石を有すはずだが、それらの部分は削平されたようで全く確認できていない。唯一古墳時代の1号住居内に礎石らしい石列の一部を調査した。工房跡は3カ所の焼土を確認し長期間の操業が想定され、明治時代まで操業の痕跡が残っていた。北側に隣接する1号井戸にはAs-Aが陶磁器や多量の鍛冶滓などと伴に復旧のための埋戻し廃棄されており、天明三年前後の鍛冶工房操業がほぼ確認できた。

土坑は陥穴状や埋没土が黒色土主体のものを古代で扱ったが、近世の土坑38基はAs-Aを含むものとそれ以前と想定されるものに二分される。大多数を占める長方形の土坑は集中して分布するうえ軸方向や形状が近似しており、比較的短期間に造られたものと考えられる。

調査区西隅傾斜地にあった人為的に並べられた石列は一次堆積のAs-Aを被覆したようで、時期が想定できる施設の一つである。施設の西側は無名小河川を改修したと思われる流路で、屋敷地の境界を把握できたようだ。

扱いに最も苦慮したのが攪乱で、当初印版のある陶磁器以降の時代の遺物が出土する窪みを攪乱と呼んだが、鍛冶工房跡が近世初頭まで操業していたことが分かったため、明治時代遺物の見られる工房付近の4カ所の窪みは「攪乱1」のように番号を付して示し、出土遺物も区別できるようにした。

遺構以外から出土する遺物は陶磁器の他、金属製品や石製品および鍛冶に関する遺物も豊富で調査区西側からの出土が多かった。



第6図 近世の遺構配置図

2 古代の遺構と遺物

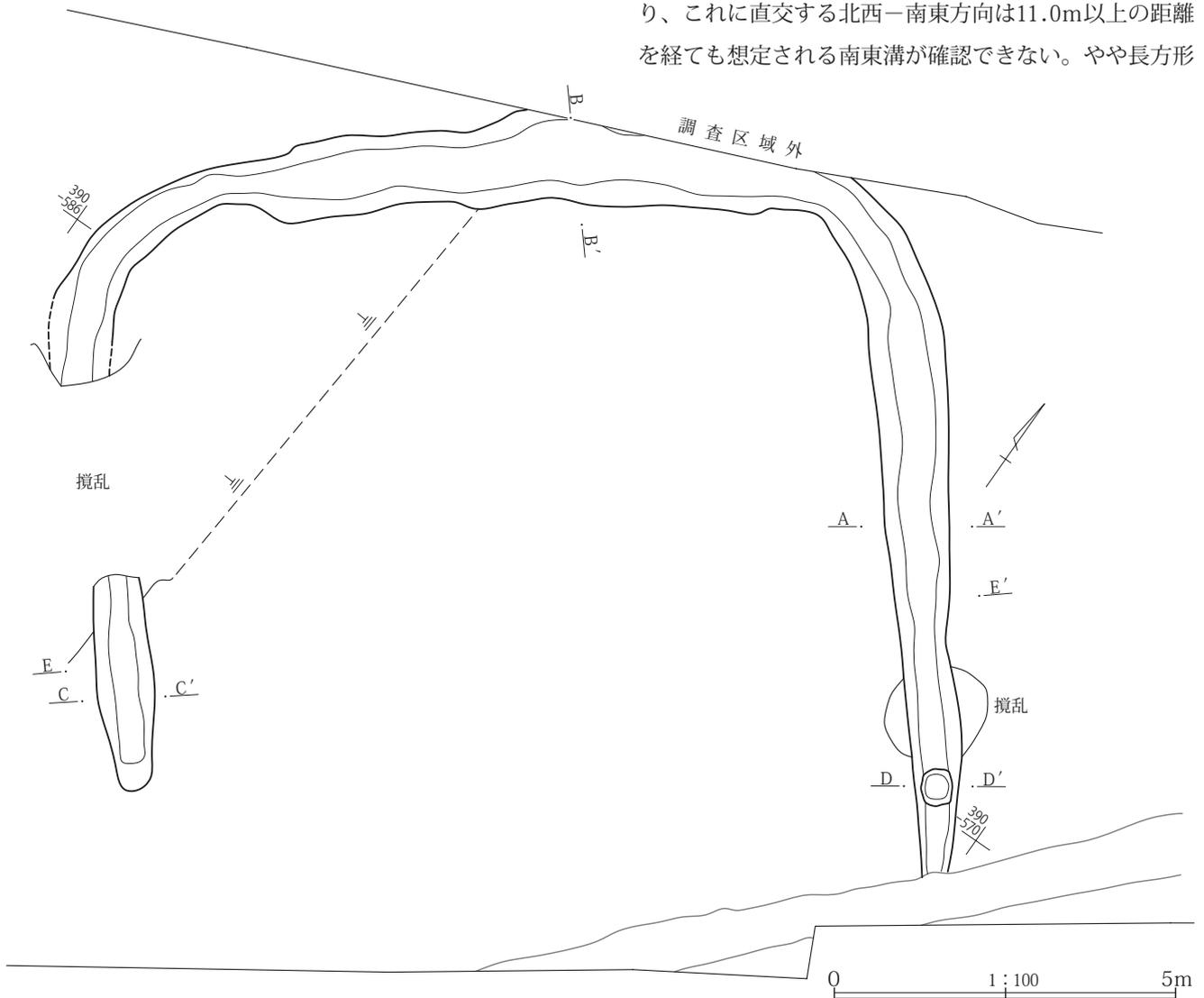
(1) 1号方形周溝遺構 (第7・8図 PL. 2-①~⑤)

江戸時代の道路調査段階で前出する溝が確認でき3号溝と呼称したが、この溝が方形の区画をつくることから方形周溝遺構として扱った。西隅は後世の削平による段差にかかり残存状態は良くない。本文では確認できた2隅を北隅・西隅、同じく3辺を北東溝・北西溝・南西溝と呼称する。

位置 北東溝南隅は389-570で道側溝に切られる。北隅は396-576で調査区境に接する。西隅は389-585で唯一確実なコーナー部分が把握できる。南西溝南隅は383-580で途切れる。

規模形状 溝はいずれもほぼ直線的である。北東溝部分では地山は平坦だが幅110~53cm、深さ55~14cmで南東側へ向かって細く浅くなる。北西溝は北側で幅125cm以上あり底面も広く平坦である。本遺構中最も幅太部分である。西側は段差にかかり上面は削平されていて上幅は計測できないが、下幅では細くなることを確認できる。底面レベルも西へ向かって高くなり、北側と20cmの比高差がある。南西溝も北半で削平面にかかるが残存状態の良い南側でも幅80cmと細い。南隅付近は深さ57cmあり、底面レベルも北西溝と並んで最も深くなっている。南側調査区境に南西溝の延長のような5号土坑を調査している。陥穴状の施設で本周溝遺構には結びつかないが上層に本周溝1層土に類似した埋没土が見られ、この土坑上面に周溝の続きが重複していた可能性がある。

方台部は残存する南西-北東方向で10.8mの距離があり、これに直交する北西-南東方向は11.0m以上の距離を経ても想定される南東溝が確認できない。やや長方形



第7図 1号方形周溝遺構

第Ⅱ章 調査の内容

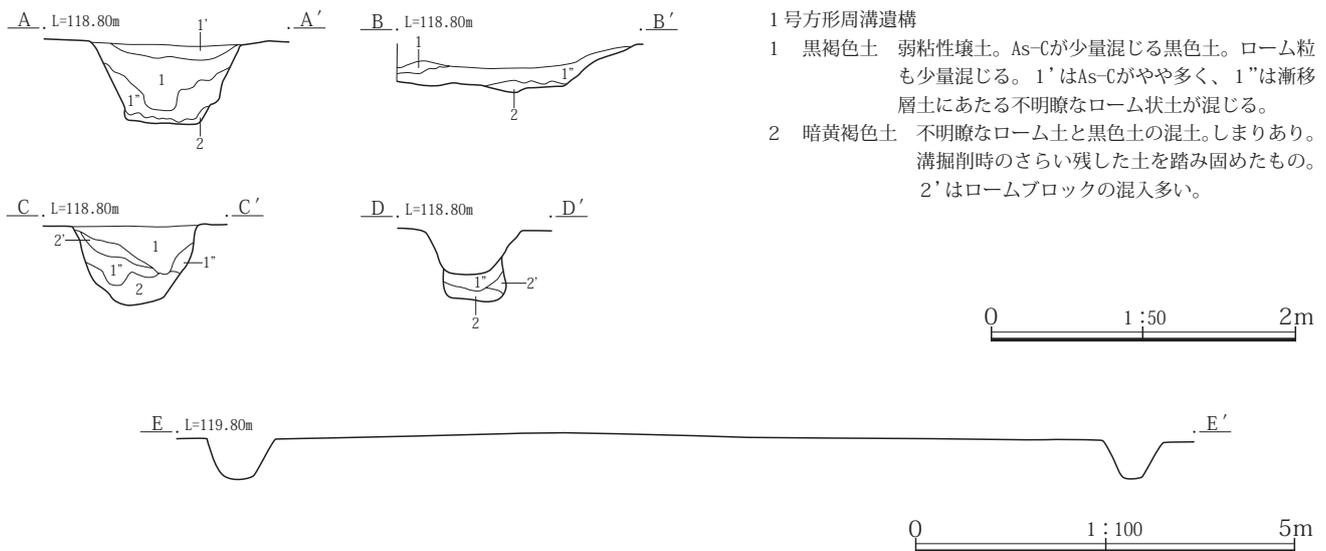
の方台部になる可能性がある。調査段階で盛り土の痕跡は確認できていない。方台部面積は119㎡以上となる。

施設 北東溝南側に溝底に径53×44cmのピット状の窪みを確認している。溝底面からの深さは18cmで底面は平坦である。溝底面に沿った掘り込みで埋没土も溝内と同質であり、方形周溝遺構と同時存在の施設と思われる。

方向 N-39°W(北東溝)

備考 出土遺物が全くなく、主体部も精査したが掘り込

みの痕跡や礫の多い部分など一切確認できていない。加えて本遺跡内では古式土師器等の方形周溝墓が展開する時期の遺物は見られない。この遺構を方形周溝墓とする根拠は十分ではないが、埋没土は古代を想定するAs-C混じりの黒色土で、方形周溝墓または方墳以外の確かな遺構は想定できない。溝の規模などから方形周溝墓を想定するのが妥当と考えた。



第8図 1号方形周溝遺構断面

(2) 竪穴住居

調査区西側で2棟の住居を調査した。1号住居は古墳時代の明瞭な遺構で豊富な遺物を出土したが、平安時代が想定される2号住居は不明瞭な点が多い。

1号住居(第9～12図 PL. 3-①～⑧・4-①～⑤・14 遺物観察表54頁)

鍛冶遺構西側の、上面に1号礎石建物や5号溝がある不明瞭で広い落ち込み部分であった。北側に焼土散布が見られ、竪穴住居を想定して断面観察用ベルトを残して掘り下げた。焼失住居で炭化材の出土が多かった。南側が調査区域外で全容を把握できていない。

位置 368～374-602～609グリッドにある。

規模形状 東西軸長6.2m、南北軸長5.15m以上の規模で、正方形に近いプランが想定される。

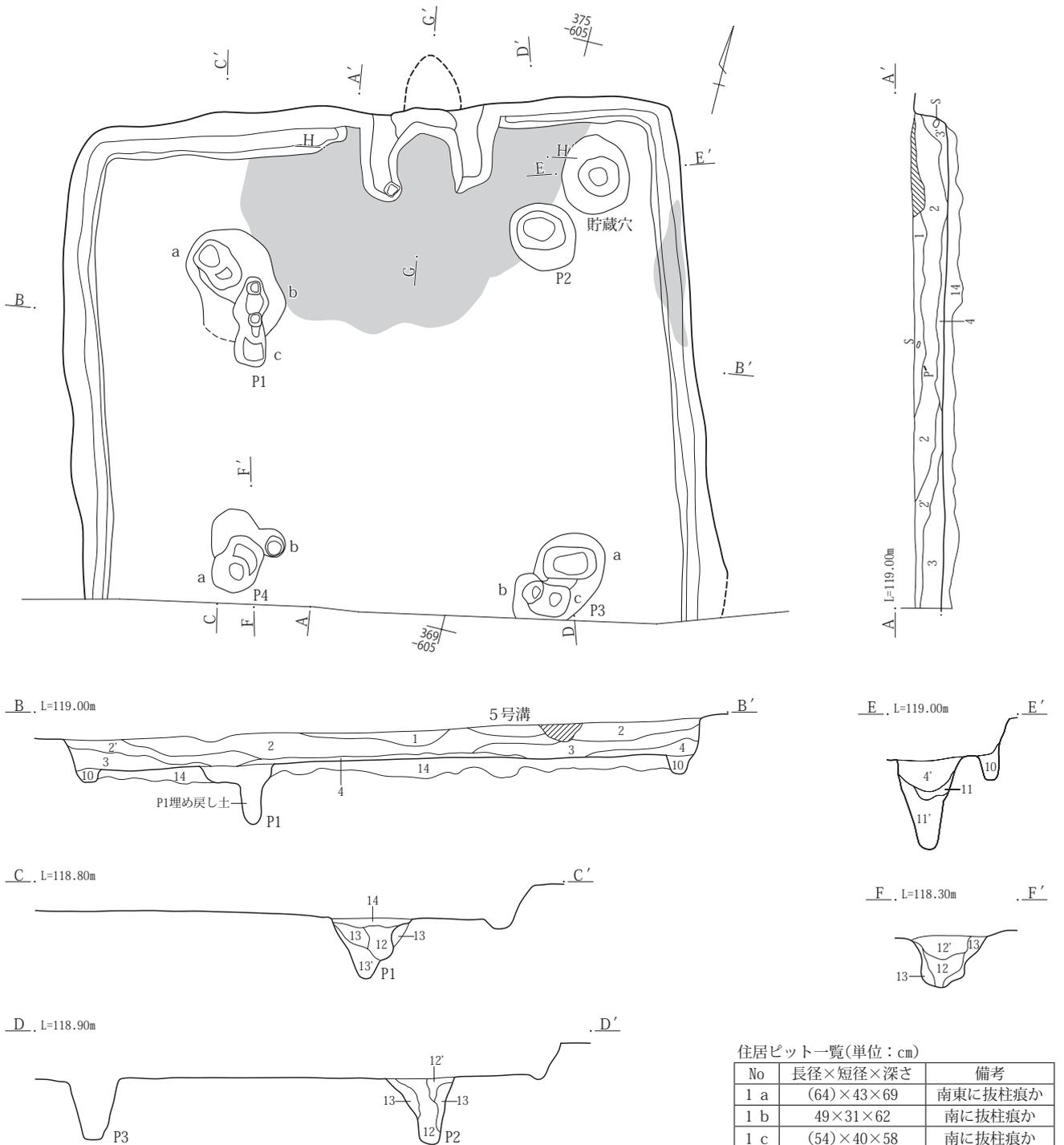
埋没土・壁 壁高は最も深い北辺で47cmを測る。

方位 N-13°W。

面積 残存23.36㎡ 正方形を想定して復元すると29㎡前後である。

床面 東壁下中央部分が高く、北辺両隅周辺が低いなど一様ではないが、全体では地山の傾斜に沿って西側へ低く傾斜していた。住居中央付近床直上を中心に弱く踏み固められた薄い層(4層)が見られる。貼床や生活時の踏み固めではなく、住居廃絶直後の作業の中で踏み固められた面のように見えた。貯蔵穴周辺を除くほぼ全体に深さ8～17cmの掘り方がある。

壁溝 調査できた範囲ではカマド下を除く壁下全体に巡っていた。幅15～23cm、深さ13～21cmの規模で掘り方埋戻し土を再度掘り込んでいる。掘り方より若干窪む程度の深度である。



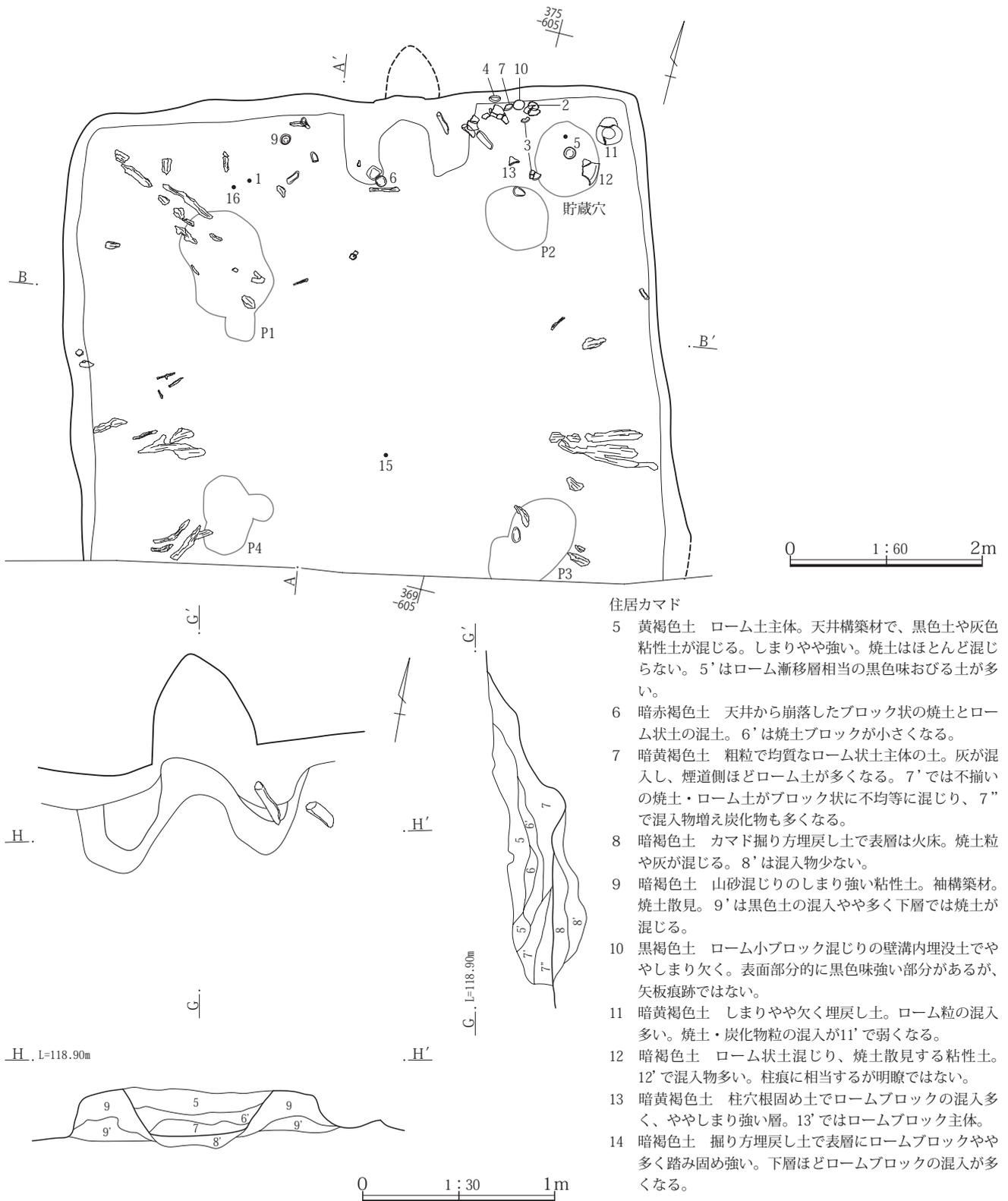
住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	備考
1 a	(64)×43×69	南東に抜柱痕か
1 b	49×31×62	南に抜柱痕か
1 c	(54)×40×58	南に抜柱痕か
2	68×63×71	
3 a	53×42×64	南に抜柱痕か
3 b	(28)×(25)×54	
3 c	(42)×41×61	南に抜柱痕か
4 a	56×45×52	北に抜柱痕か
4 b	(34)×28×31	

1号住居

- 1 暗褐色土 壤土。弱粘性でしまり欠く。
- 2 暗褐色土 土質は1に近い。ローム状土の混入が多くやや黄色味をおびる。YPがブロック状に不均等に少量混じる。炭化物粒散見。As-Cらしい軽石散見。2'は黒色味強く、As-Cがやや明瞭でしまり強くなる。
- 3 暗黄褐色土 壁崩落土の混じる弱粘性土。南側からは不揃いなブロック状のローム土混入あり。3'には焼土多い。
- 4 暗褐色土 炭化物粒の混入多い、ややしまり強い層。4'では黒色土の混入多く、しまりも弱くなる。

第9図 1号住居



第10図 1号住居遺物出土状態およびカマド

貯蔵穴 北東隔壁直下にある。長径79cm、短径67cmの南北にやや長い楕円形気味のプランである。床面からの深さは87cmあり底面は狭い。形状は柱穴的と言える。上面に踏み固めはなく開口施設であるが、埋没土は住居とはやや異なり黒色味の強い土であった。住居廃絶に先行し

て埋め戻されていた可能性がある。

ピット 4 支柱穴(P 1～4)を調査している。P 2 以外は数次の建替えを行っているようで重複が見られた。各ピットは上面に貼床を施し確認は容易ではなかった。柱痕状の窪みを確認できた部分を a とした。ピットの重複

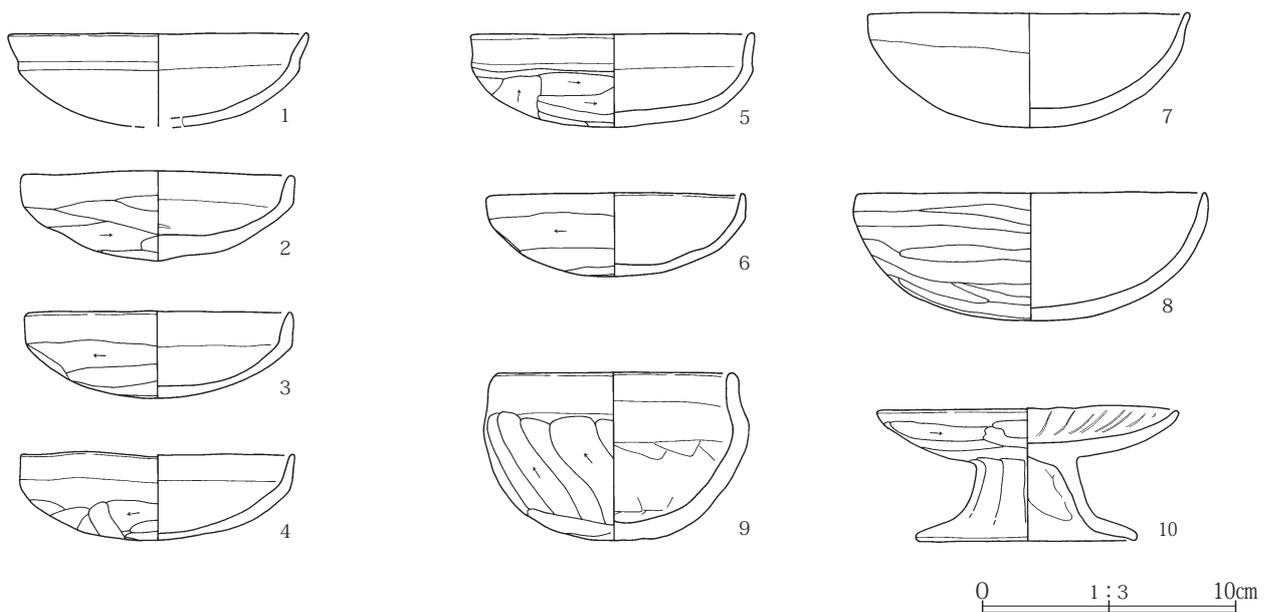
は掘り下げ途中まで気付かず断面観察が万全ではないが、a部分が最終ピットのあった位置と考えたい。各ピットは外側(壁側)へ新しいピットを掘り直しているようで、古い柱を残したまま新しい柱を据えることが可能な重複状況といえる。

カマド 北辺中央やや東寄りにある。燃烧部は住居内にあり、火床は住居床面と同レベルにある。火床下には焼土混じりの埋戻し土が見られる。火床上には天井部の崩落土として多量の被熱した焼土が確認できるが、炭化物粒や灰の堆積はあまり見られない。煙道先端は壁外へ51cm張出している。カマド袖は山砂混じりの粘性土で構築していて良質な粘土は用いていない。カマド前の床面には広く焼土や灰が散って踏み固められていた。カマド西袖先端部分上面に平坦な川原石が見られるが、配置から4号礎石建物(本文30頁)と判断した。

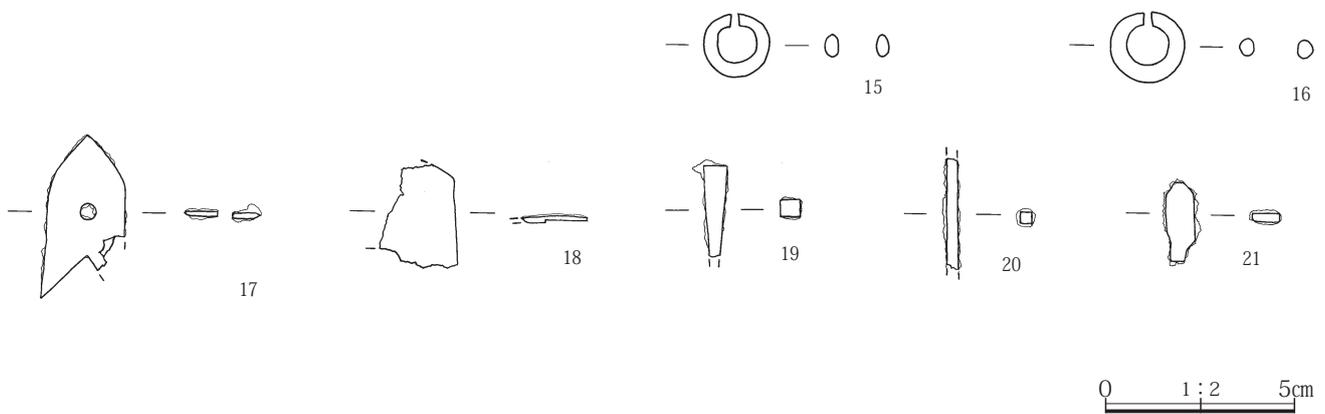
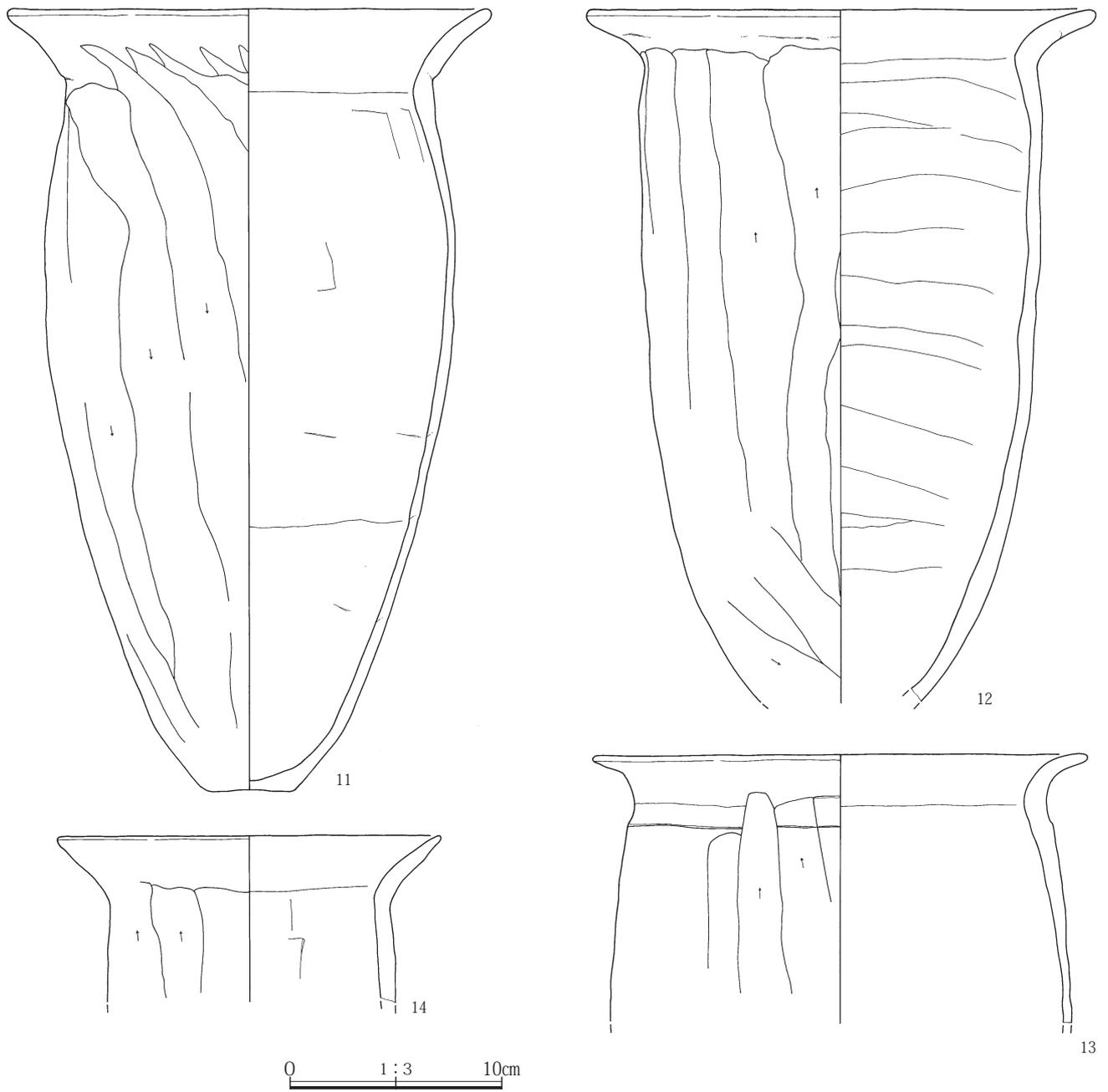
その他 平坦な礫が並んで出土したが、カマド西袖上の礫を加えると建物礎石の一部と考えられる配置になった。調査段階では掘り込みに築かなかったが、後世の建物が地山の緩い住居上部分を掘り込んで礫を据えたと考え、礎石建物として扱った(本文30頁)。炭化材は床面より少し高い位置から出土している。北西隅部分の材は壁側が床上10cm以上、住居中央側は床上5cm前後で中央側が低い状態だった。東壁・西壁際の材は壁側では床から5cm前後の高さで、中央側は床上8cmの高さにあり、ほぼ水平か住居中央側が高くなっていた。

遺物 カマド周辺を中心に出土遺物は豊富で土師器14点と金属製品7点を図示した。床面直上の出土遺物が豊富でカマド西側の杯1・鉢9、カマド西袖先端杯6、カマド東側の壁に密着するように杯2・7、貯蔵穴内とその周辺を中心に広範囲に散乱して甕11・12が出土した。貯蔵穴内から杯3・5が出土しているが、3は北壁際の破片と接合している。杯4・高杯10は床面から20cm以上高い位置だが、北壁に密着するようにして完形で出土した。耳環2点(15・16)は大きさにやや差があり対にならないと思われる。出土位置も離れていて小さい15が住居中央床上11cmの高さであったが、大きい16は北壁寄りの床面ほぼ直上での出土である。鉄鏃17はカマド東脇の出土で、近接して出土した20は同一個体の茎の可能性もある。図示した以外に約360片の土師器があるが、須恵器片の出土は全くなかった。他に縄文時代と思われる剥片1点が出土している。

所見 甕の長胴化が顕著な7世紀代の住居である。床面直上から完形の土器を多数出土し、什器類のセットとして良好な資料である。反面、甕類がカマドから離れて出土しており、カマドで煮炊きする生活の痕跡をそのまま残した住居廃絶ではないと思われる。



第11図 1号住居出土遺物(1)



第12図 1号住居出土遺物(2)

2号住居(第13図 PL.4-⑥~⑧)

土坑を想定して掘り下げを開始したが、東壁下に床面上に薄く焼土が見られ、カマド痕跡の可能性があり住居として扱った。上面には攪乱がきわめて多いが、床面まで達するもの少なかった。

位置 381～385-601～605グリッドにある。

規模形状 長軸長2.8m、短軸長2.45mの南北に長い長方形を呈している。北東隅が東側へ張出すように歪むが、他は丸みの少ない隅と直線的な辺の比較的整美なプランを呈している。

埋没土・壁 上面に攪乱が多いが底面まで達していなかった。埋没土は単層で1号住居のような黒色土の多い土ではない。壁高は15cm前後を測る。

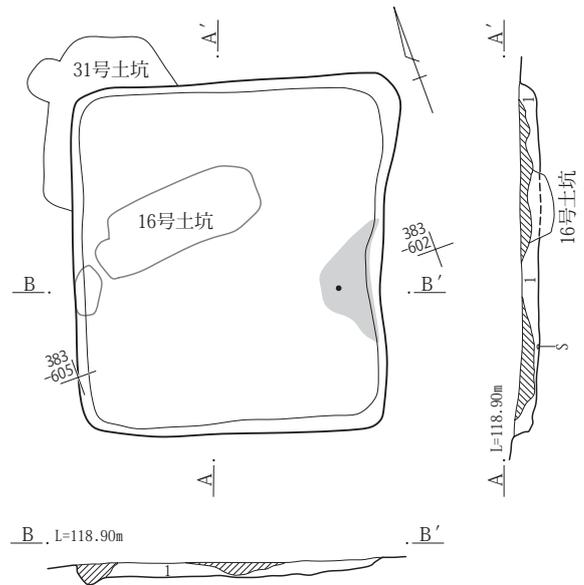
方位 N-20°E(西壁)。 **面積** 5.97㎡

床面 ローム状土面にあり、凹凸の少ない比較的平坦な床面である。焼土はカマド火床上のような顕著なものではなく、床面直上に炭化物粒や灰と共に弱く踏み固められていた。床面全体は地山傾斜に沿って西側へやや低く傾斜し、東西両壁下では5cmの比高差がある。踏み固められているが住居通有の床面の汚れは少なかった。掘り方は認められない。

カマド 東壁中央やや東寄りの焼土散布部分をカマドの痕跡と考えた。顕著な焼土ではないが他の部分と明瞭に区別できる範囲だった。壁際で長さ96cm、壁からの幅40cmの規模がある。火床の掘り込みや袖などの構築材・煙道部張り出しなどは全く確認できない。

その他 近世・近代の16号土坑に前出し、時期不明の31号土坑に後出している。壁溝・ピット等の施設は認められない。

所見 時期を想定する資料を持たない。土師器小片を総量で28片しているが図示できるものはなかった。薄手の奈良時代平安時代前期と思われる甕胴部片が主体で、長方形の遺構形状から平安時代住居の可能性はある。今回の調査範囲から該期の遺構は確認されておらず、遺構外の出土破片も総数50片ほどしか見られない。



2号住居

- 1 暗褐色土 粗粒弱粘性土。ローム小ブロックを不均等に含む。焼土粒散見。ややしまり強い。



第13図 2号住居

(3) 土坑(古代)(第14図 PL.5-①~④)

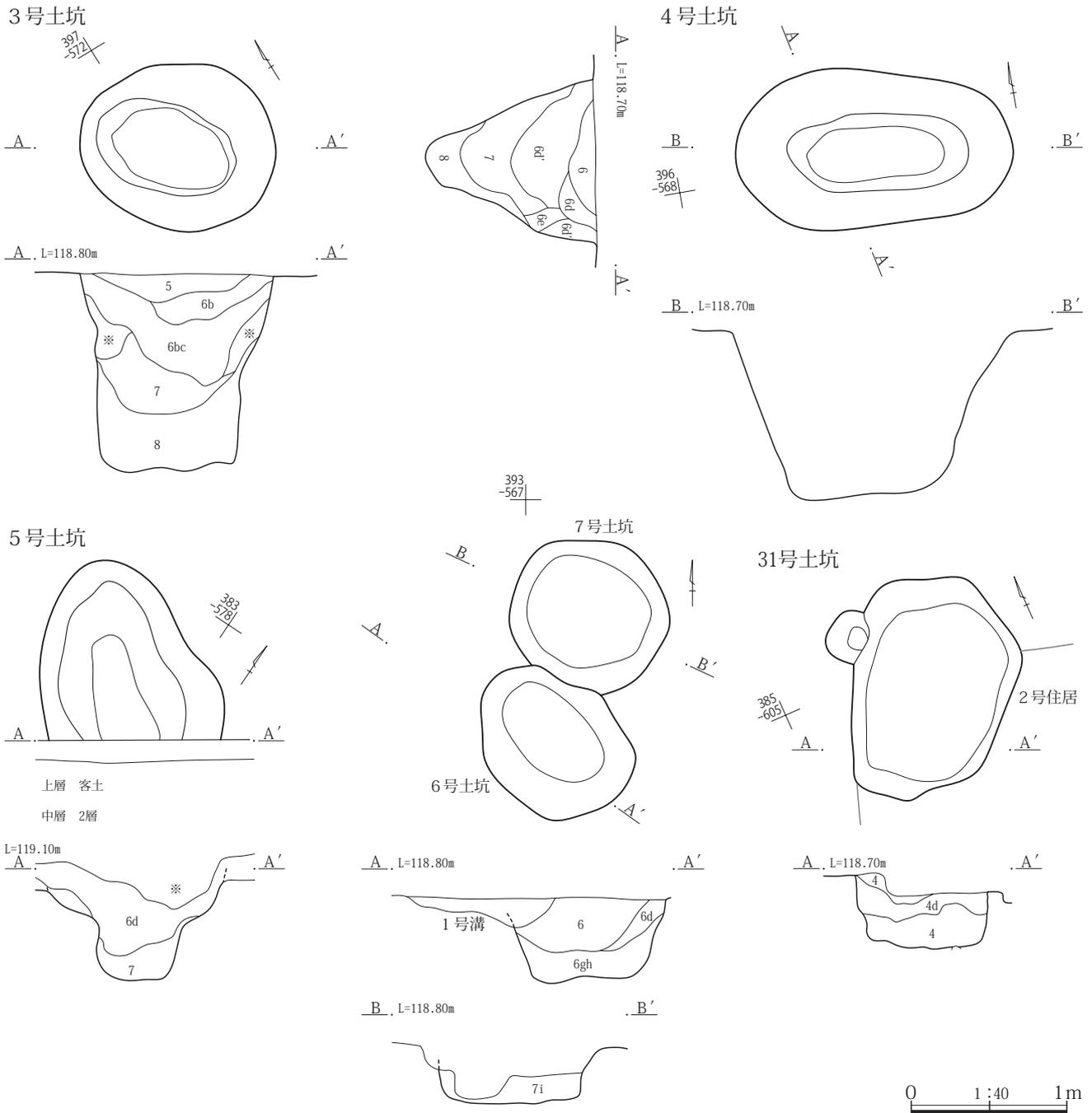
調査区西側で近世以降と想定した土坑を多数確認したが、ここでは調査区東側で多かった陥穴状の土坑など6基を扱った。31号土坑が平安時代の住居を想定した遺構に前出し、他は埋没土が古墳時代竪穴住居同様の黒色味をおびた土であることなどから近世の土坑と分けている。

3・4・6・7号土坑が近接しているのに対し、5号土坑はこの一群から南西側へ15m、31号土坑は西側へ37m離れた位置にある。

いずれも遺物の出土はなく、時期を推定する根拠は欠いている。6・7号土坑は重複しているが、前後を把握する観察を欠いている。3～6号土坑は陥穴状の遺構だが、逆茂木等の施設は確認できない。

個別土坑の図および説明は次頁で一括して記した。なお、土層注記にあたっては近世の土坑と共通記号を用いた。断面図の土層説明については35頁を参照されたい。

第Ⅱ章 調査の内容



第14図 古代の土坑

第2表 土坑一覧表(古代)

No.	挿図	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真	形状	軸方向		
3	第14図 PL.5①	571-395 G 楕円形	125×108×115 N-59°W	自然埋没か ※大粒ロームブロック混入 中層下まで掘り直しの可能性	陥穴に類似。
4	第14図 PL.5②	565-395 G 不整楕円形	178×103×105 N-80°W	表層に近世陶磁器：3片 自然埋没	陥穴状。
5	第14図 PL.5③	577-381 G 不整楕円形	(117)×114×69 N-40°W	※As-Cの可能性のある軽石を含む黒色土	陥穴状。
6	第14図 PL.5④	566-390 G 不整楕円形	109×85×53 N-48°W	自然埋没	陥穴状。方形周溝墓西側周溝の位置にある。道北側溝に前出。
7	第14図 PL.5④	566-391 G 不整形	101×(95)×37 N-64°W		道北側溝に前出。
31	第14図 PL.12④	603-384 G 長方形か	142×104×50 N-27°E	人為的埋戻しの可能性	2号住居に前出。

3 近世の遺構と遺物

(1) 道(第15～20図 PL.5～7・14 遺物観察表55頁)

調査区東側で両側溝を持つAs-Aの一次堆積層下に明瞭な硬化面が直線的に西側へ繋がっていることを把握し道として扱った。この道はAs-A直下の上面と意図的に埋められた下面の2面の路面があり、それぞれ上路面・下路面と呼称する。上下2面の路面があることは側溝掘り下げ時まで把握できなかったため、上路面に伴う側溝は下路面の側溝まで掘り過ぎた個所がある。

東側の断面観察を第17図に、南隅の上面からの断面観察を第18図に詳細図を併せて示した。地点が異なると路面構築土が異なっている。

路面は北側へ低くやや傾斜している。東側では調査範囲南に隣接する国道254号線現道との重複はないが、西側は国道の現路面下へ向かうようで、江戸時代に中山道脇往還であった道跡と判断できた。

上路面

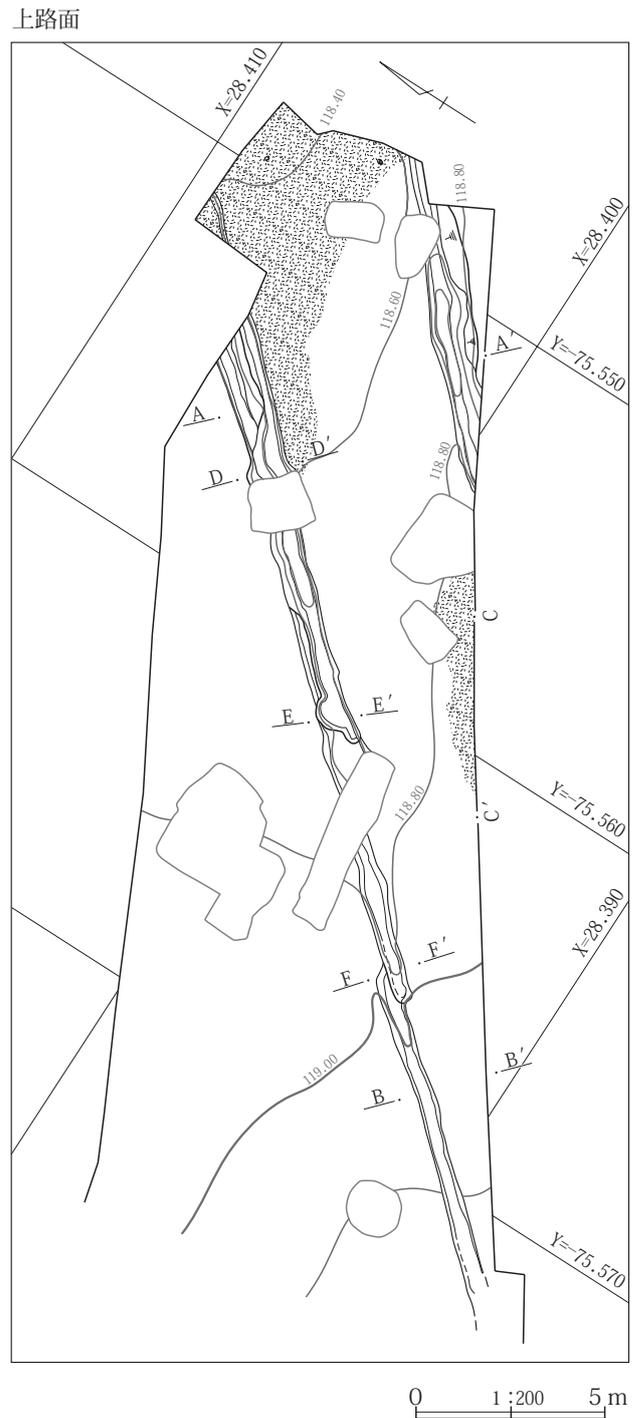
発掘調査は調査区東側から掘削を開始したが、東隅でいきなりAs-Aの一次堆積層とその直下にある顕著な硬化面が表れた。軽石層は東隅で12cmの厚さがあり、最下層には火山灰が見られた(トーンで表示)。この軽石層は道北側では側溝沿いに要作境から9mの範囲で繋がっていた。そして一旦途切れた後、調査範囲南隅で再度厚く堆積した部分が表れた。軽石が途切れた部分には上面からの耕作痕があり(本文44頁)本来は軽石が東側全域を覆っていたものと思われる。

側溝 南北両側溝が確認できる。東側では下路面に伴う側溝を誤って掘り進めてしまった部分があり明瞭な立ち上がりを把握できていないが、両側溝とも北側へ掘り直した痕跡があり50cm前後道が東側へ移動している。掘り直しは部分的に行ったようで掘り込み端部が調査範囲内でもE・F断面付近の2カ所で確認できる。北側溝の西側には重複の痕跡は見えない。この部分の幅42～48cm、深さ6～10cmで底面レベルは傾斜に沿って東側が低くなっている。方向はN-42°Eで直線的である。

道幅 側溝掘り直し後の両側溝芯々間で5.6m、側溝上端で計測した幅で5.0mを測る。

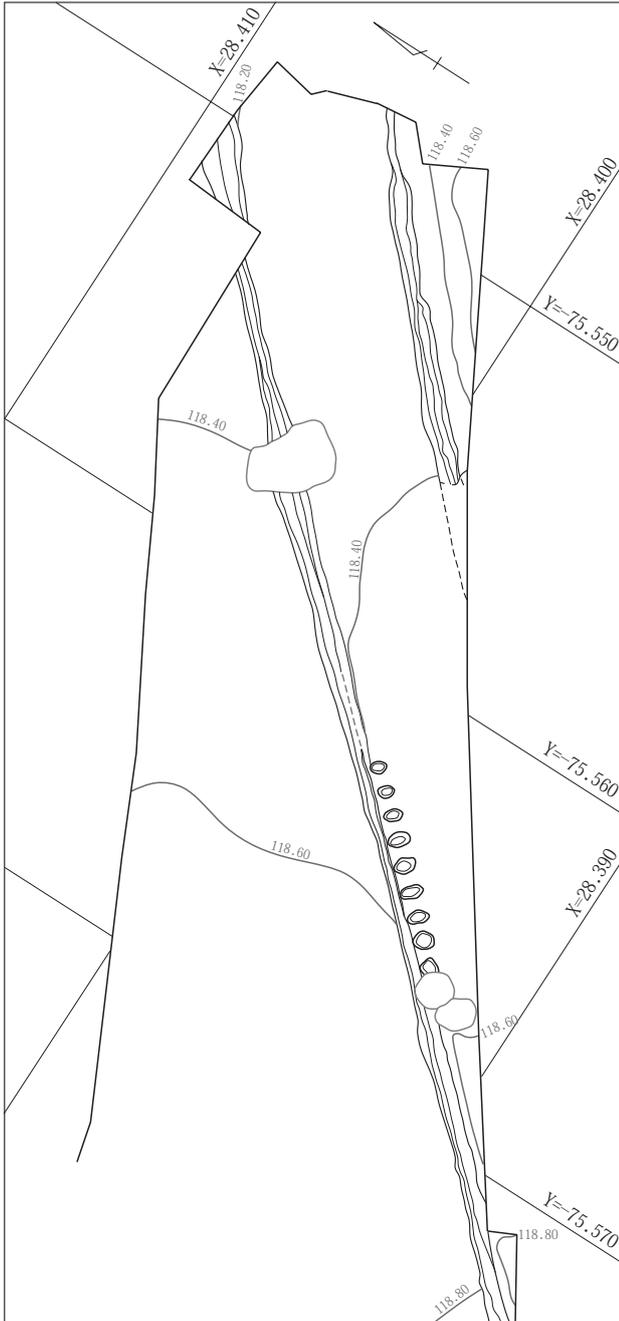
道の傾斜 上路面全体では東側へ低い28/1000で東西両隅付近ではやや傾斜がきつくなっている。

出土遺物 路面直上からの出土遺物はない。

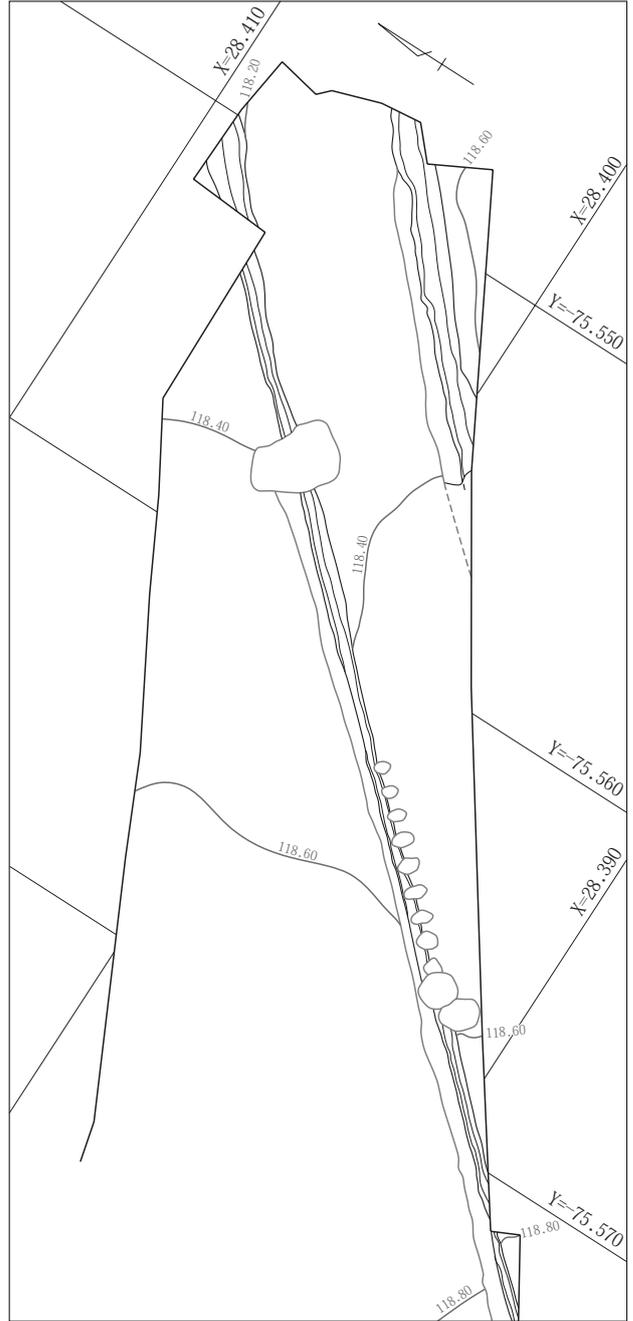


第15図 1号道(上路面)

下路面(新)



下路面(旧)



0 1:200 5m

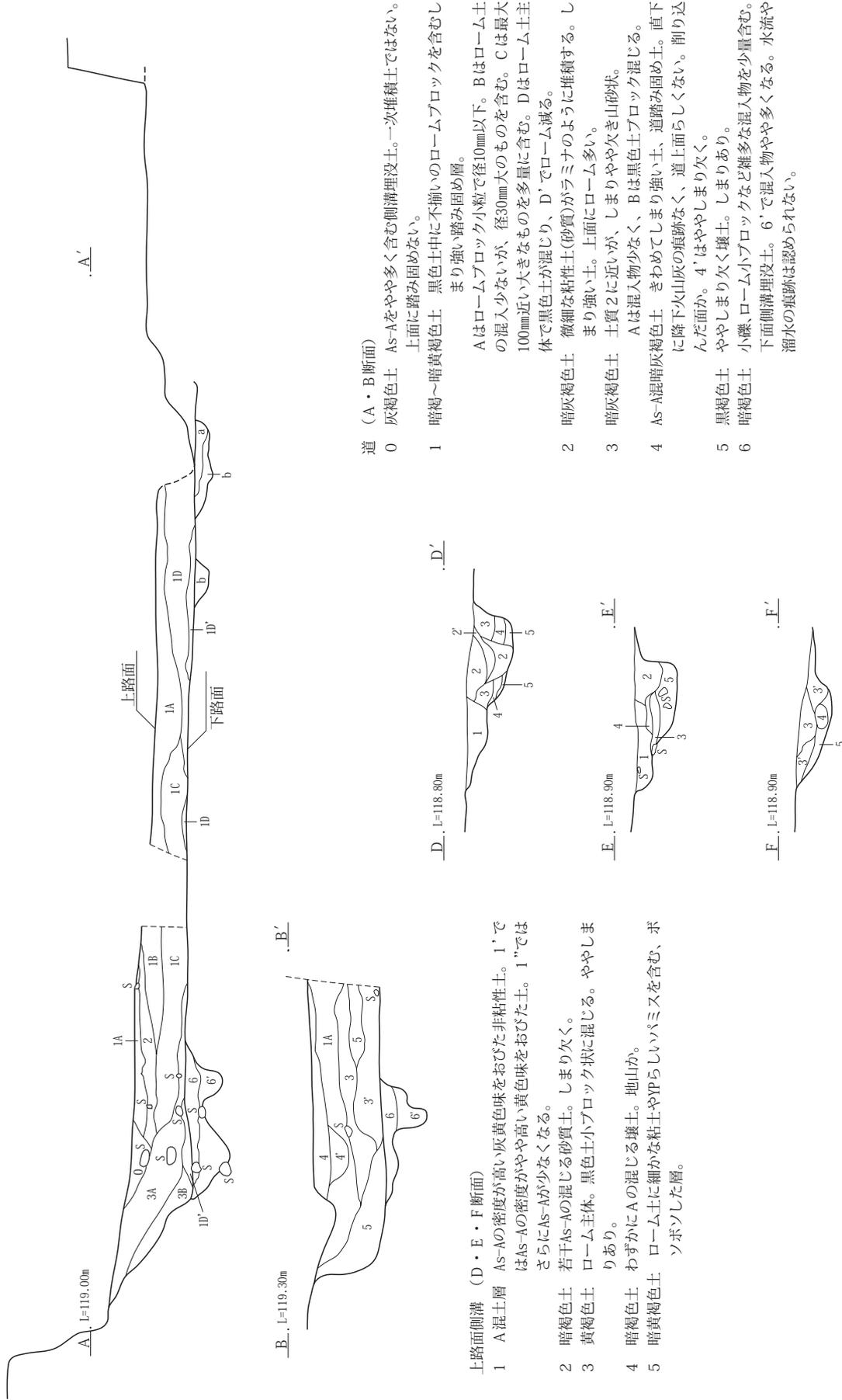
第16図 1号道(新旧の下路面)

下路面

東側を中心に部分的に径2cmほどの礫が敷かれ、上路面以上に硬化が顕著な明瞭な路面であった。規模は上路面と同一で両側溝が見られる。この面の盛土は明確ではない。

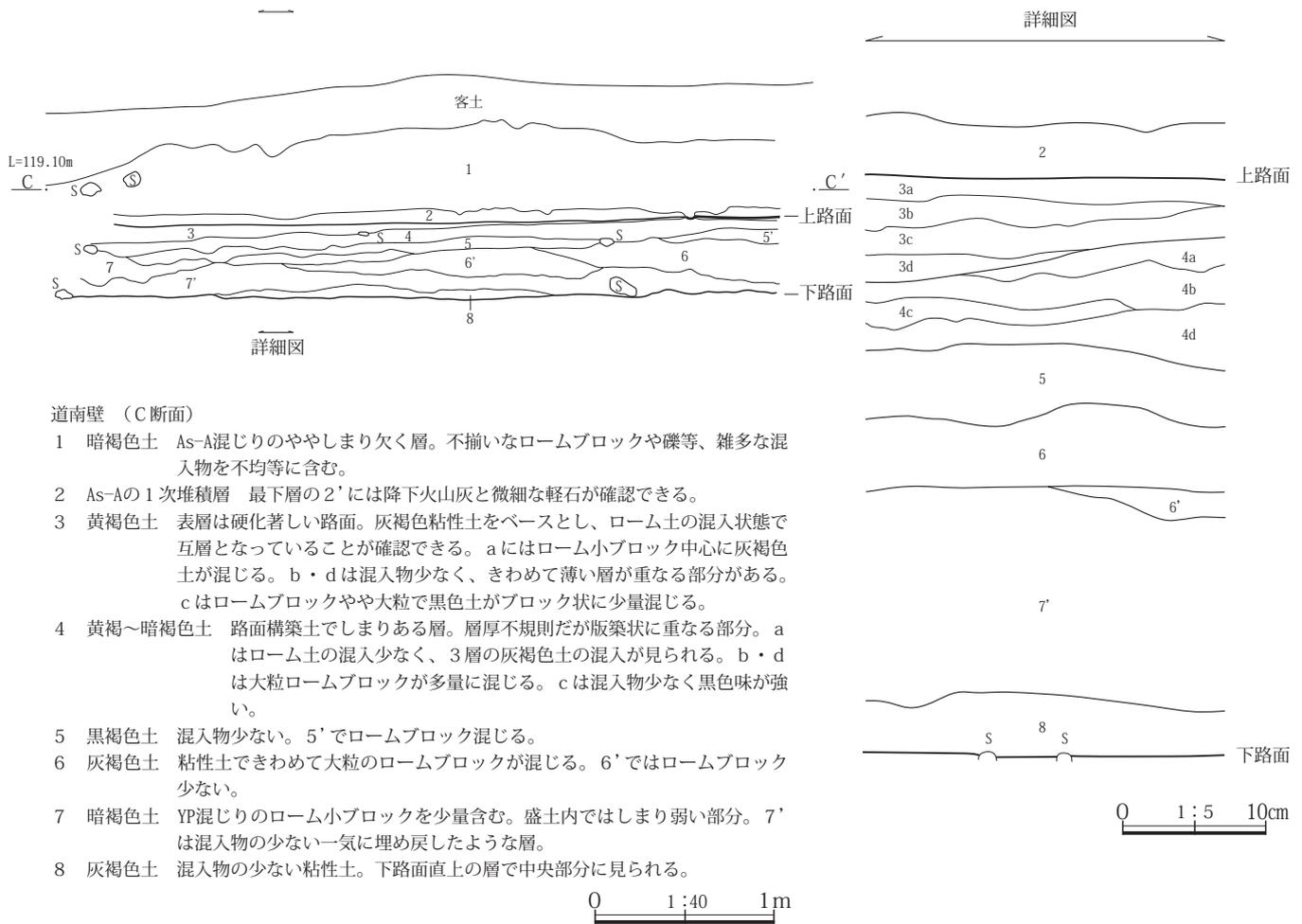
側溝 北側溝で掘り直しが見られ、側溝北側の浅い部分が後出している。南側溝でも2条の溝となっているが前

後関係を示す断面観察が得られなかった。北側溝と対になるのなら側溝北側が後出するはずで、この部分上面に顕著な硬化面は確認できない。北側溝は両溝とも幅40cm、深さ20cm前後である。南側溝は北側部分では北側溝とほぼ同規模だが、南側部分では幅90cm前後、路面からの深さ30cm前後になり他の部分と大きく異なる。斜面に



第17図 1号道断面(1)

第二章 調査の内容



道南壁 (C断面)

- 1 暗褐色土 As-A混じりのややしまり欠く層。不揃いなロームブロックや礫等、雑多な混入物を不均等に含む。
- 2 As-Aの1次堆積層 最下層の2'には降下火山灰と微細な軽石が確認できる。
- 3 黄褐色土 表層は硬化著しい路面。灰褐色粘性土をベースとし、ローム土の混入状態で互層となっていることが確認できる。aにはローム小ブロック中心に灰褐色土が混じる。b・dは混入物少なく、きわめて薄い層が重なる部分がある。cはロームブロックやや大粒で黒色土がブロック状に少量混じる。
- 4 黄褐～暗褐色土 路面構築土でしまりある層。層厚不規則だが版築状に重なる部分。aはローム土の混入少なく、3層の灰褐色土の混入が見られる。b・dは大粒ロームブロックが多量に混じる。cは混入物少なく黒色味が強い。
- 5 黒褐色土 混入物少ない。5'でロームブロック混じる。
- 6 灰褐色土 粘性土できわめて大粒のロームブロックが混じる。6'ではロームブロック少ない。
- 7 暗褐色土 YP混じりのローム小ブロックを少量含む。盛土内ではしまり弱い部分。7'は混入物の少ない一気に埋め戻したような層。
- 8 灰褐色土 混入物の少ない粘性土。下路面直上の層で中央部分に見られる。

第18図 1号道断面(2)

接するため崩落土砂や排水対策に特に大規模な側溝が必要だったと思われる。

道の傾斜 東側へ低い1.3%で上路面より緩やかで全体がほぼ均一な傾斜である。

出土遺物 下路面は上路面に比べ出土遺物が多く、碗2・5、鉢7が路面直上またはやや高い位置での出土である。また北側溝内より銅製品9、南側溝内より鉄製品10を出土している。北側溝内の遺物も多く、陶磁器7点、羽口1点、金属製品2点を図示した。完形近くまで復元できる遺物はなかった。

盛土

下路面に積まれた土砂の層厚は東隅で17cm、西隅で45cm前後となり、西側へ向かって徐々に厚くなっている。盛土が厚く、As-Aの堆積も顕著だった道跡南隅のC断面で詳細を記した。

軽石部分は一次堆積で火山灰が路面直上に見られた。

盛土上面部分(3層)は最上層に細かな互層状部分があり、道として使用された過程で新たに溜まった土砂が踏み固められた層のようだ。4層は4枚以上の版築状でローム土が最も多く見られる。ただし4③層から5層にかけては最大で20cm以上の層厚だが不均等になっている。自然堆積土のような土質である。

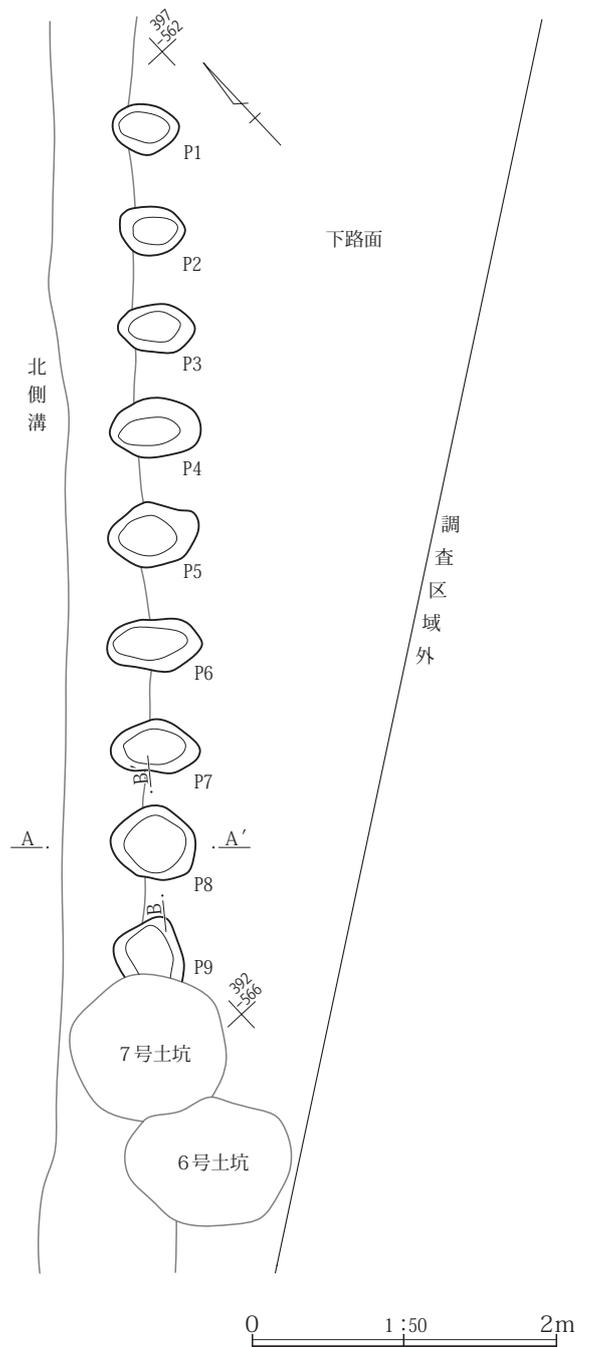
出土遺物 側溝上の盛土内からは鉢4が下路面より8cmの高さから出土している。その他図示した遺物の大半はこの層内の出土で陶磁器碗皿類の破片が主体だった。図示した以外の出土遺物は磁器12点、施釉陶器11点、焼締陶器2点で、盛土に使われた多量の土量に比べると、比較的少量と言えよう。

下路面のピット列

下路面の北側側溝際に楕円形を呈した黒色部分が連続して見られた。上面は敷かれた礫などと共に踏み固められ路面調査時には明瞭でなかったが、後出する側溝掘り下げ時に明確になった。道の走向に沿って続いており道に関連する施設と想定されこの項で扱った。確認できたのは9カ所の皿底状の窪みで北東側よりP1～9の番号を付した。ピット列と呼称したが柱穴ではない。P9は前出する7号土坑を誤って先に掘ってしまい、一部を失っている。

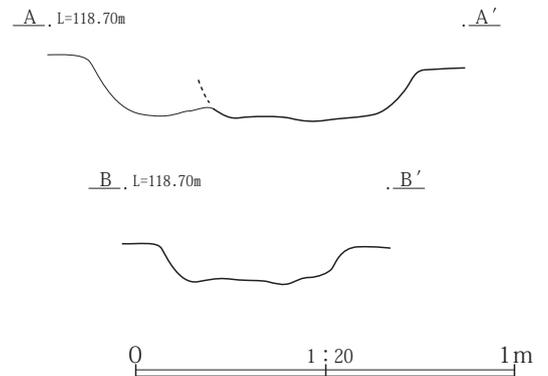
埋没土は共通で、粘性のある黒色土で不揃いのロームブロックを不均等に含んでいた。踏み固められて著しくしまっていた。

各ピットは平面形状楕円形が多く、長軸63～43cmに対し短軸49～33cmで短軸長を揃えようとする傾向が看守できる。そして道路の走向に垂直方向に長軸を向ける傾向があり、円形のP8を除くとP9のみ道走向側に長軸を置いていた。底面は総てのピットが平坦で広く、路面からの深さ15cm前後で据えられた扁平な石を抜いた跡のような形状である。窪みの間隔は上端で30cm前後であり、石が敷かれれば踏み石のような状態となるであろう。確認できたのはこの範囲のみだが、後出する側溝に削られた可能性がある。



下路面ピット列

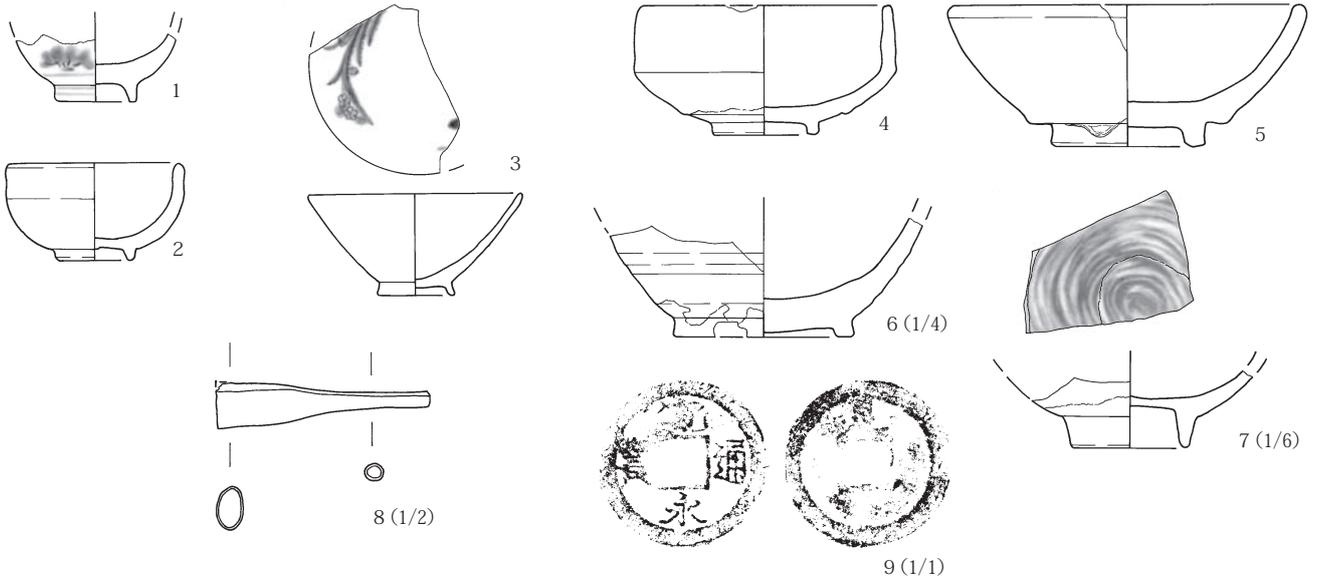
No.	位置	形状	規模 (cm) 長径×短径×深さ	南西側ピットとの間隔
1	396-562	楕円形	44×33×9	35
2	396-562	楕円形	43×33×12	33
3	395-563	楕円形	51×33×14	31
4	395-563	楕円形	61×40×16	30
5	394-564	楕円形	61×43×15	35
6	394-564	楕円形	63×34×16	34
7	393-565	楕円形	59×34×16	23
8	393-565	不整形円形	53×49×13	24
9	392-566	不整形円形	44×(40)×15	



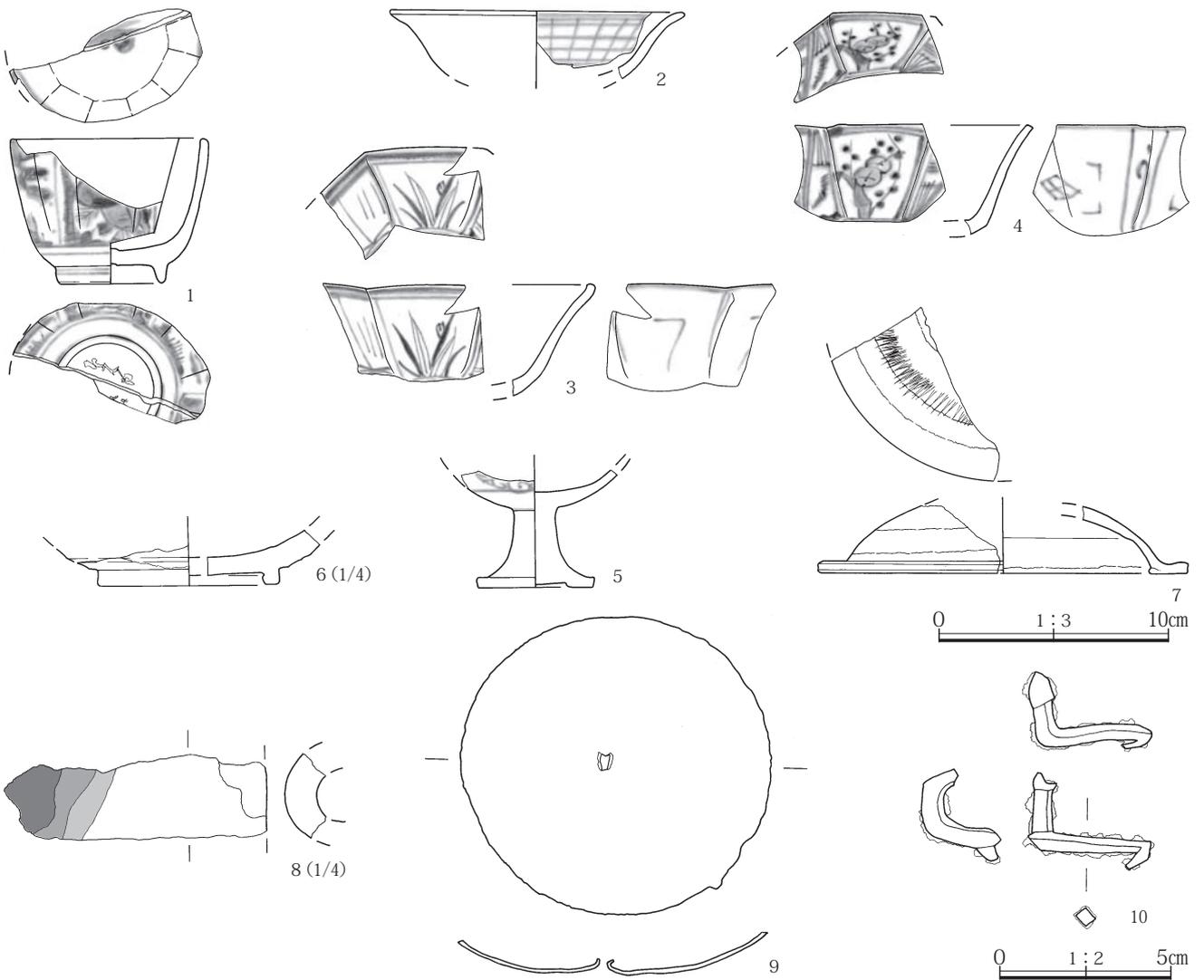
第19図 1号道下路面のピット列

第Ⅱ章 調査の内容

1号道



側溝



第20図 1号道および側溝出土遺物

(2)井戸 (第21～26図 PL. 8-①～⑥・15～17
遺物観察表55～58頁)

本遺跡で確認できた井戸は1基のみである。試掘調査でもAs-Aを多量に含む大型遺構として把握されていた。As-A降下後に軽石廃棄のため人為的に埋め戻された遺構である。その後、北西隅付近に石組みの井戸が再度掘削されている。石垣上面付近はコンクリートで固められていたため攪乱扱い記録を十分に残さなかったが、井戸再掘削の時期はコンクリート使用以前の明治期頃まで遡れる可能性がある。

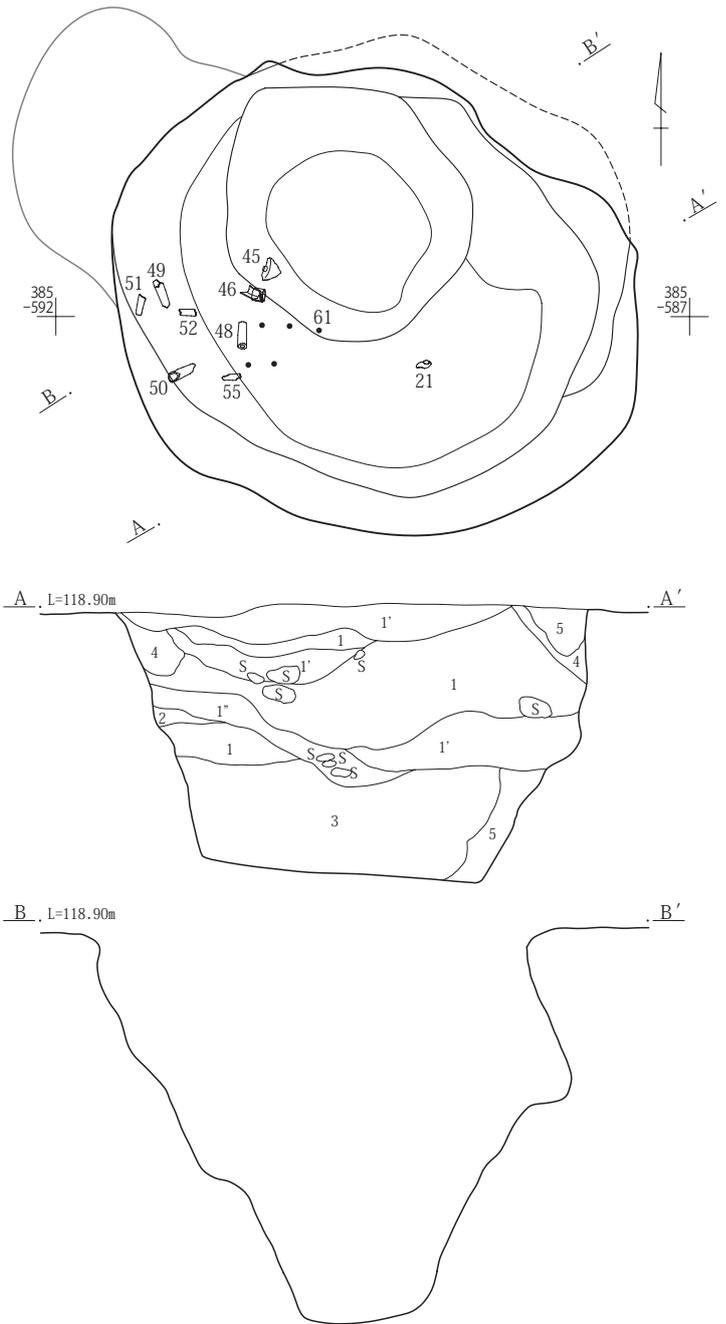
位置 383～387-587～591

規模形状 北西部分の後世井戸部分を除くと上面は4.1×3.65mの東西方向にやや長い楕円形を呈している。上面壁際には崩落した地山土がブロック状に堆積しており、本来の平面規模は半径で30cm以上小さかったはずである。確認面から2.1mの深さで広い平坦面となり、平坦面北隅に径1.9m前後の不整形円形状に深さ0.5mの窪みを加えている。底面は湧水のため不明瞭だが、径1.2m前後の円形で比較的平坦である。なお、南壁際には確認面から深さ1m前後の位置まで埋戻しの痕跡が見られる。

埋没土 断面図示部分は下方で粘性土の埋戻しが見られたが、中央付近では底面近くまで混入物の少ない軽石が埋められていた。鍛冶遺物の混入が顕著だったが焼土や灰・炭化物などの混入は見られなかった。壁面には確認面より1mに満たない深さでタナ落ちの痕跡がみられるが、調査時の湧水は冬の調査という时期的要因もあり底面から60cm(確認面から150cm)前後であった。

出土遺物 きわめて多量の遺物を出土し、陶磁器類46点、羽口7点、砥石3点および金属製品4点や古銭を図示した。陶磁器類は碗皿類が主体で焙烙・内耳土器など煮沸土器が少なかった。羽口は確認面から80cm前後の中層付近から出土している。61の寛永通宝は8枚が癒着して出土したもので剥離できた2点を採拓した。確認面から約50cm深い軽石内の出土で埋納されたものではない。12・21・26など明治時代以降の遺物が混じるが後世井戸掘削時に混入したものと考えたい。

図示した以外の近世遺物には磁器61点、施釉陶器45点、焼締陶器と焙烙各5点があり、近現代遺物の陶磁器35点



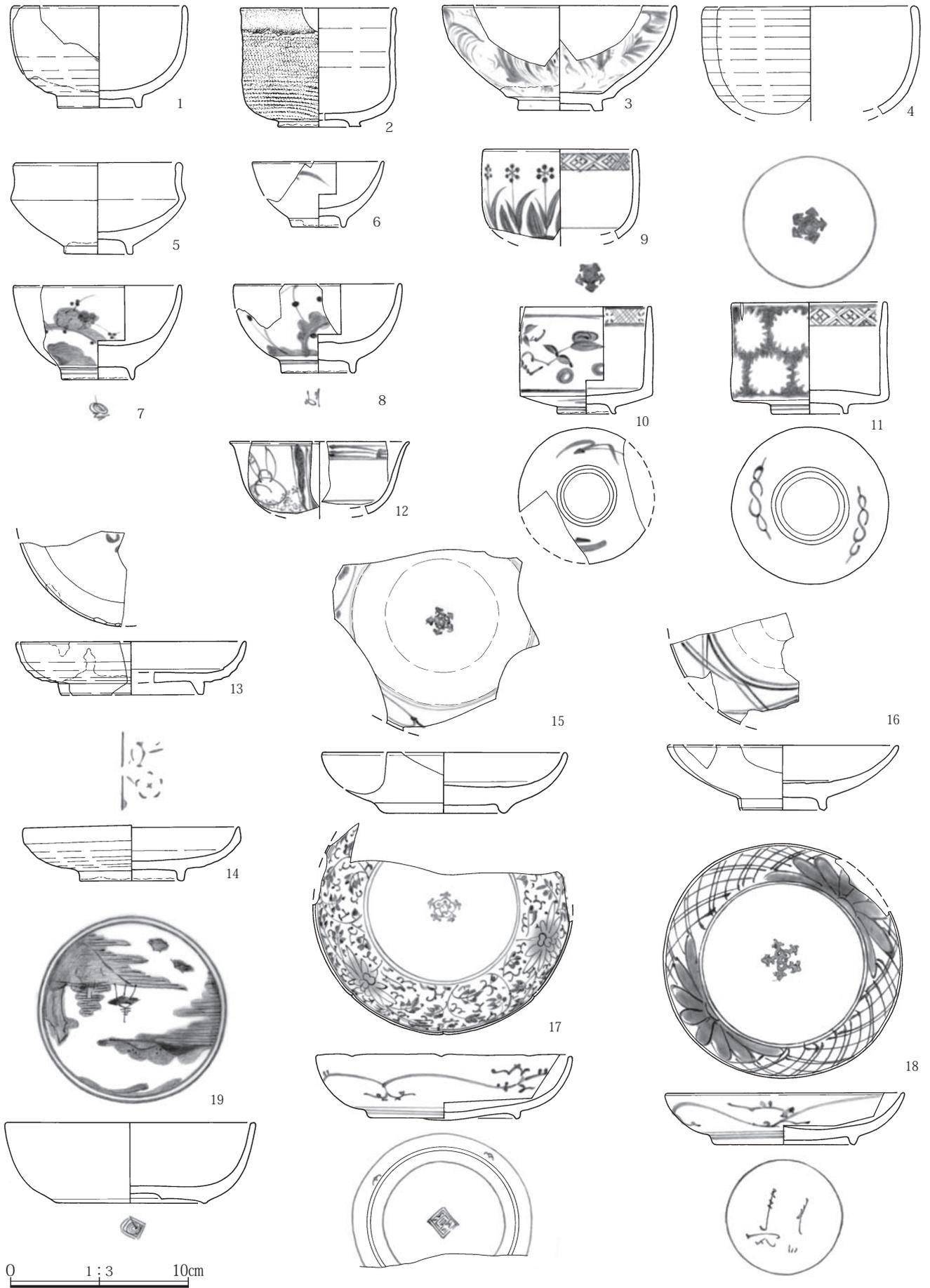
1号井戸

- 1 混入物の少なく汚れのないAs-A。一次堆積層ではない。1'では軽石主体だが黒色土が少量、不均等に混じる。軽石自体もやや汚れる。1''は汚れたAs-A主体で、黒色土・ローム状土が縞状に少量混じる。
- 2 黒褐色土 黒色土主体のしまり欠く層。
- 3 暗褐色土 黒色土とローム土の混土。裏込め部分と想定される。
- 4 黒褐色土 崩落した地山。オーバーハング上の土。
- 5 ロームブロック主体の土。壁崩落土か。

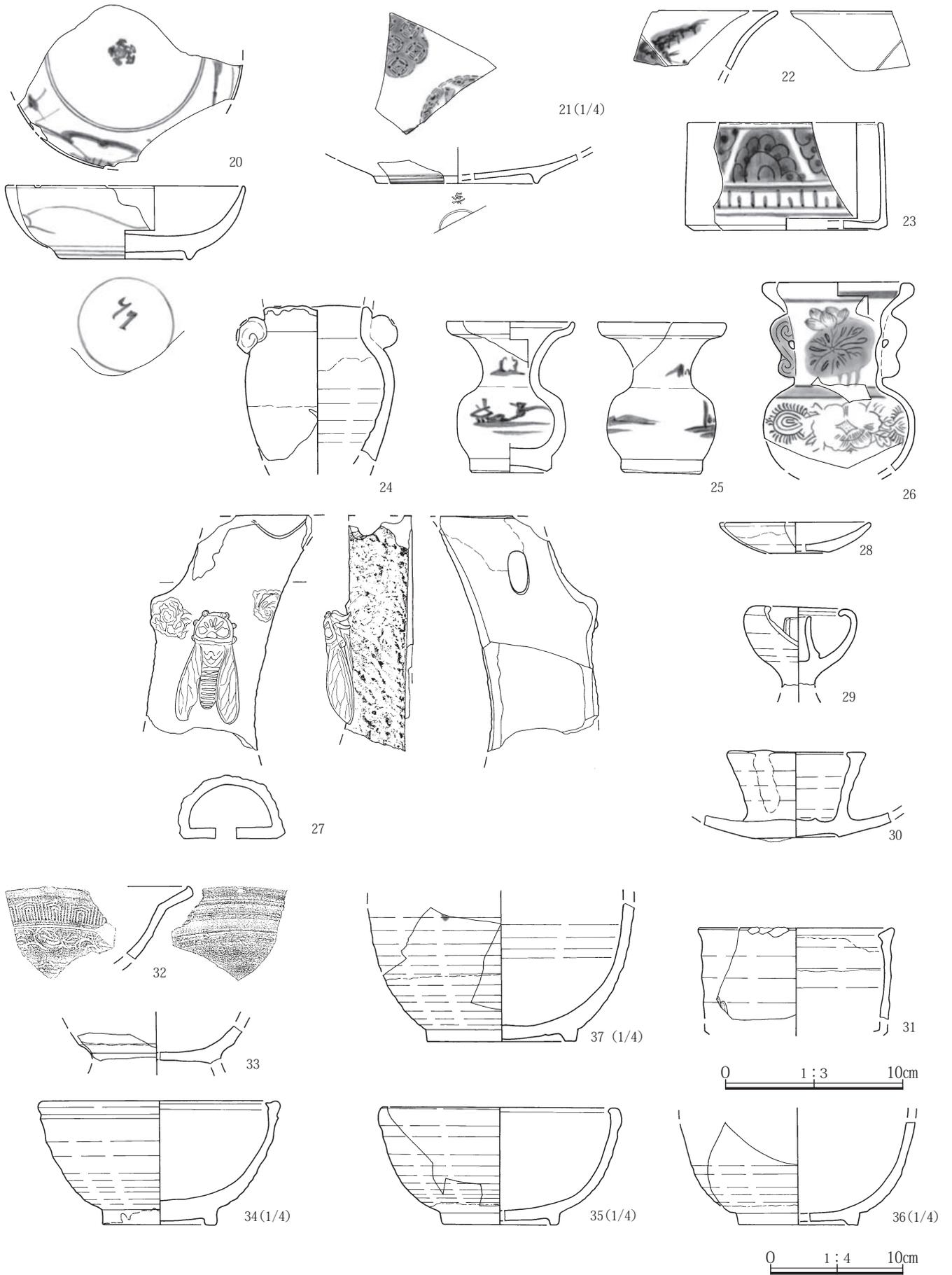
0 1:60 2m

第21図 1号井戸

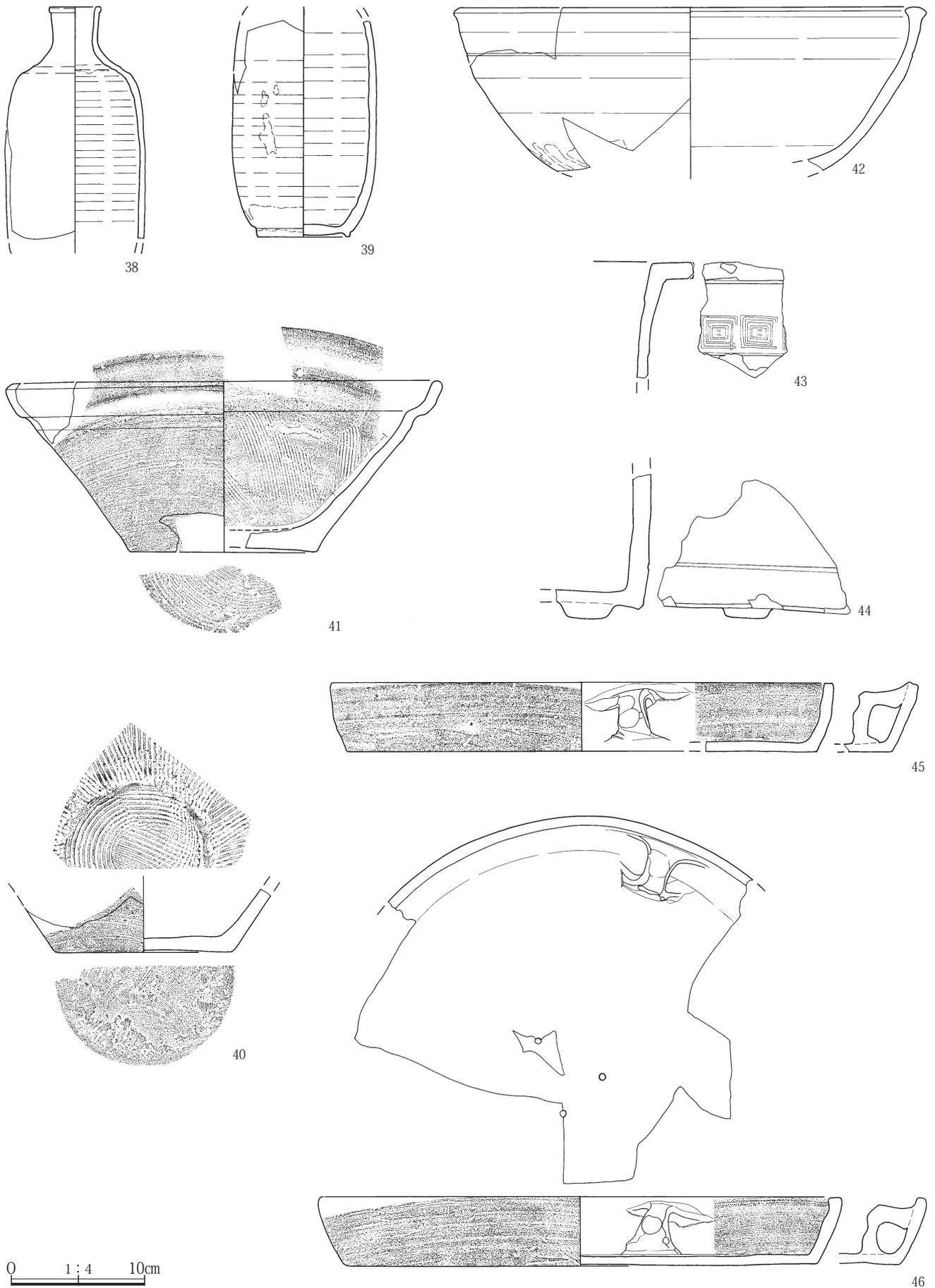
第II章 調査の内容



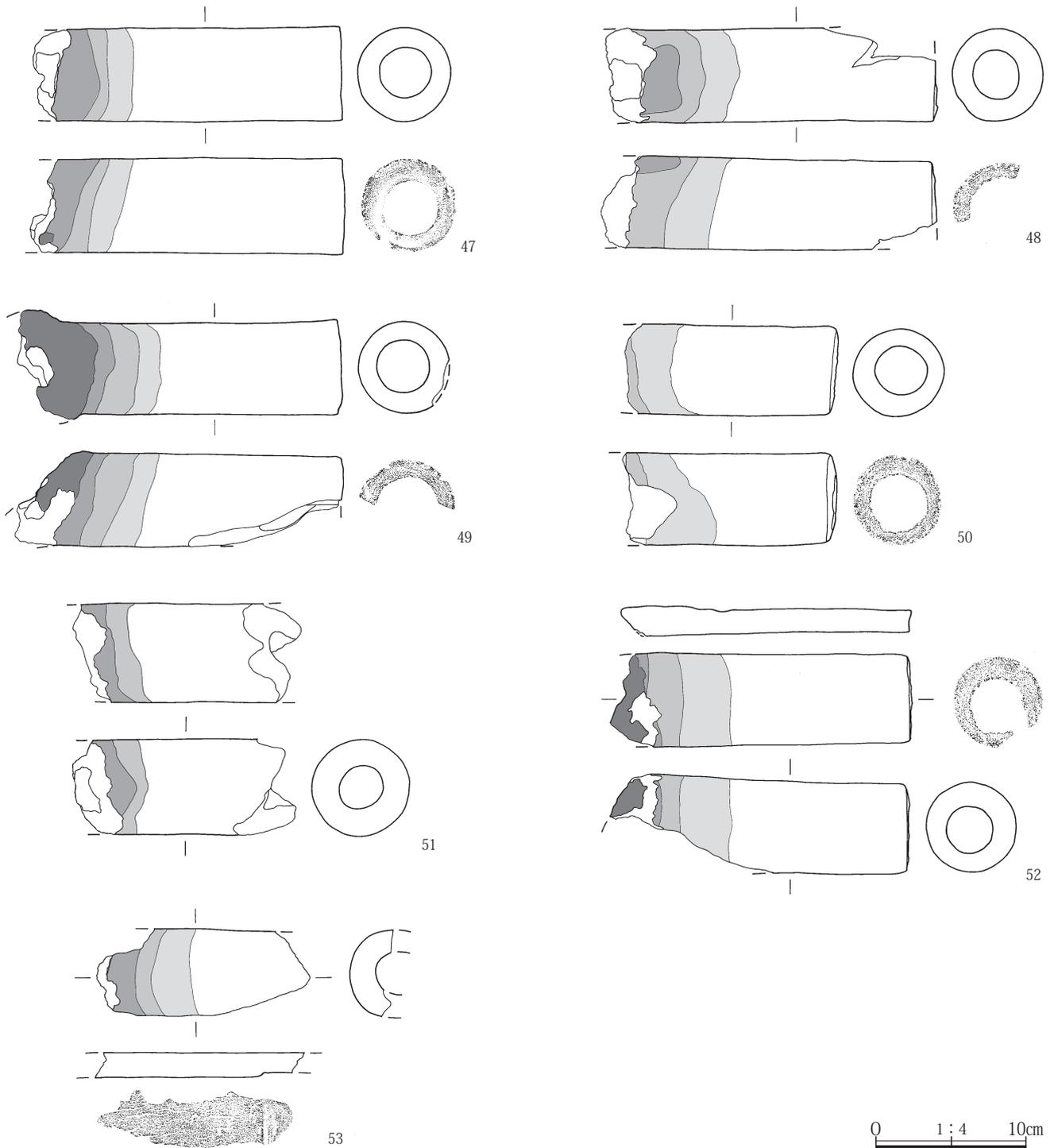
第22図 1号井戸出土遺物(1)



第23図 1号井戸出土遺物(2)



第24図 1号井戸出土遺物(3)

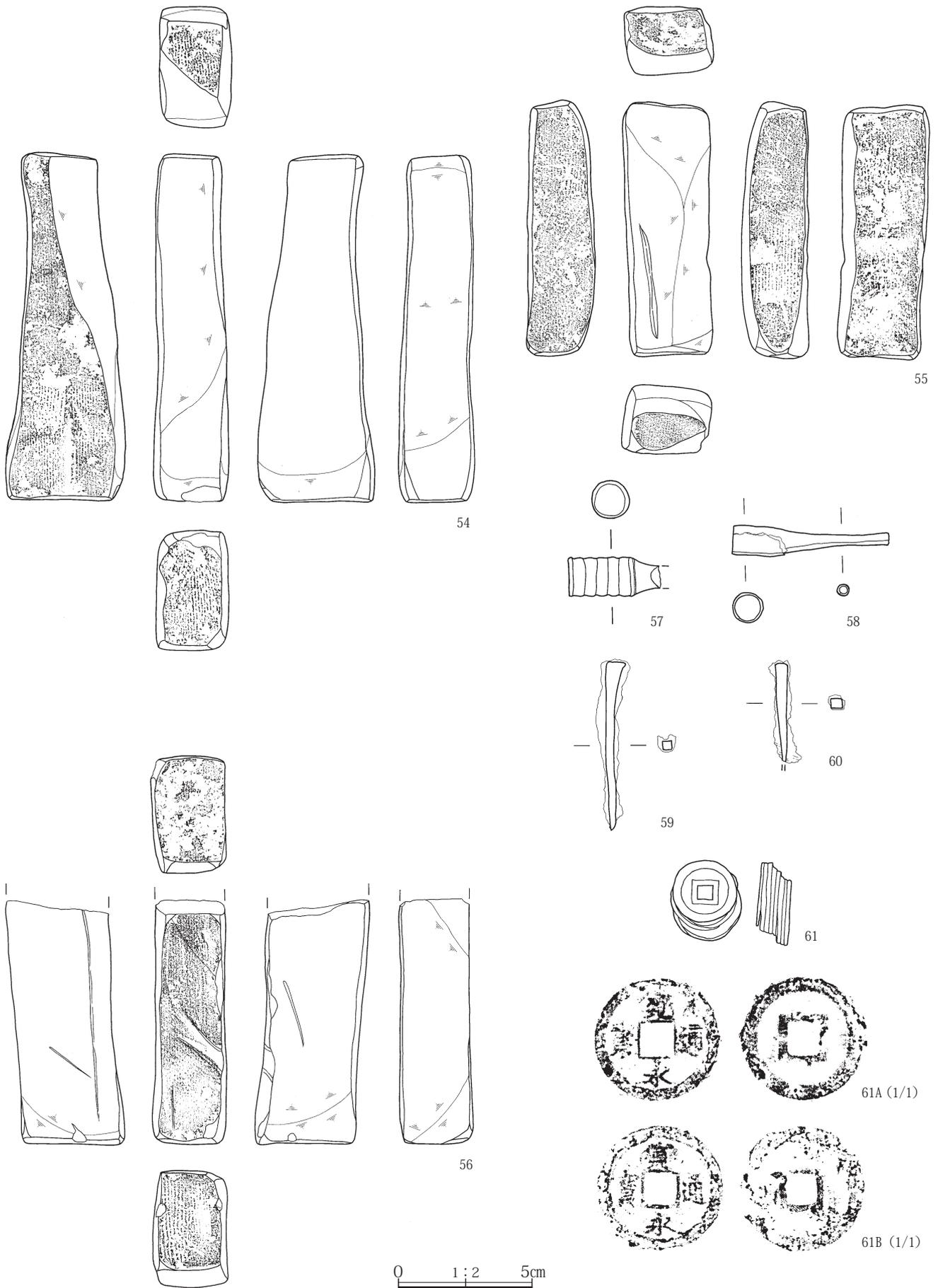


第25図 1号井戸出土遺物(4)

より多い。その他に膨大な量の鍛冶滓を出土しており詳細は48頁以降に記した。鍛冶滓はかたまって出土したのではなく、羽口出土地点周辺を中心に軽石内にバラバラに混入するような状態であった。底面付近からは出土していない。

所見 軽石は混入土砂の比較的小さい一次堆積に近いものであった。西側に重複して後世に井戸が改めて掘削さ

れており、大量の軽石降下による混乱が想像される。軽石降下からあまり時間を経過していない時期の埋戻し作業であったと想定している。この中にきわめて多量の鍛冶滓や羽口が含まれる理由は不明だが、井戸内出土地点を記録して取り上げた羽口類は鍛冶工房が想定される西側に偏っている。工房側から投げ込んだような出土状態であった。



第26図 1号井戸出土遺物(5)

(3) ピット列・掘立柱建物・礎石建物
(第27～29図 PL.8-⑦⑧・9)

柱穴状の遺構は少なく、調査区東側に集中していた。近世の土坑が見られない一画である。道脇に並ぶピット列および建物の痕跡と考えられる遺構として掘立柱建物2棟を想定し1号ピット列と2・3号掘立柱建物と呼称した。これらピットには通し番号を付けたので2号建物はP15から、3号建物はP8からのピット番号となっている。他に礎石建物となる可能性のある調査区西側で確認した石列を4号礎石建物とした。建物は3棟とも全容を把握できておらず、不明瞭な遺構である。これらの遺構からは破片を含め出土遺物がなかった。

埋没土の説明には土坑と共通の記号を用いた。本文35頁を参照されたい。

1号ピット列 (第27図 PL.9-①～④)

道跡の上路面調査時に確認した施設で北側溝の北側に1列に並ぶ7基のピットである。ピットの間隔はやや不一致だが規模が近似し、同時に存在した施設と考え1号ピット列と呼称した。南西側は施設隅を把握できたと考え、北東側は調査区境にかかる北東側にピットが続く可能性がある。

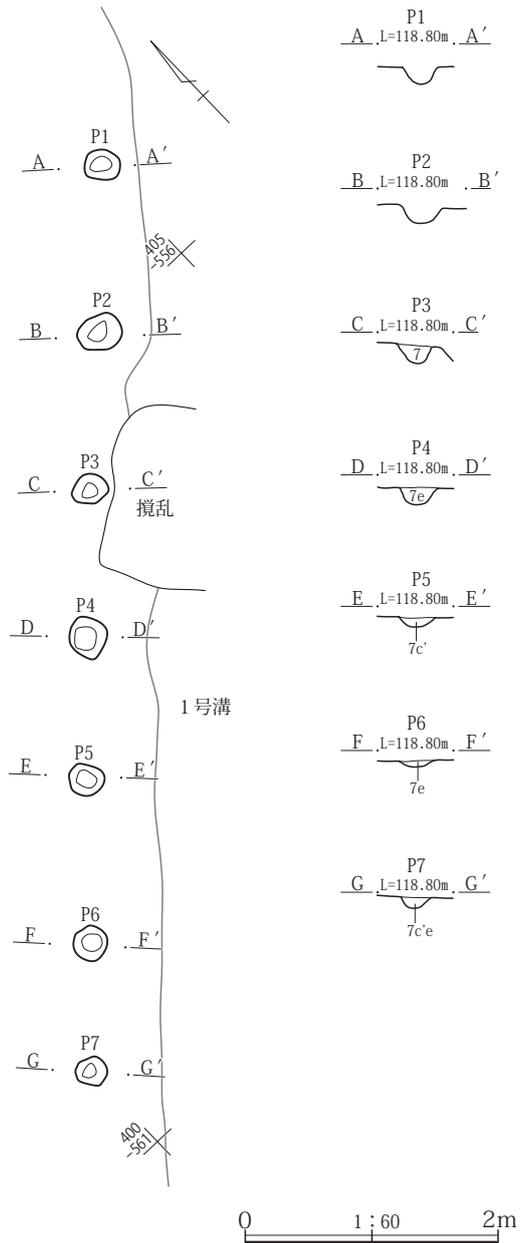
位置 北側溝との上端間隔はP1の10cm・P2の22cmに対しP5～P7は40cm前後あり、側溝に正確に併走してはいない。北西側には2号掘立柱建物がある。

規模形状 長軸30cm前後、短軸25cm前後の大きさの近似したピットで全長7.2mの列となる。底面は皿底状で柱痕は確認できない。ピット間隔は芯々距離でP1-2間133cm、P2-3間121cm、P3-4間116cm、P4-5間112cm、P5-6間130cm、P6-7間103cmを測る。P5-6間を例外として全体では南西側ほど間隔が短くなる傾向がある。列はP4を挟んで北東側と南西側でわずかに走向が異なっている。

埋没土 記録を残した5基はいずれも単層で柱痕や根固めなどの痕跡が見られない。As-Aの混入が見られず、天明三(1783)年以前に埋没したものと考えられる。

方向 N-45°E (P1～4) N-43°E (P4～7)

備考 街道に面し2号掘立柱建物との間にある柵または



第27図 1号ピット列

1号ピット列計測表

No.	位置	形状	規模 (cm)		備考	写真
			長軸×短軸	深さ		
1	556-405	不整円形	28×24	16		PL.9①
2	556-405	楕円形	36×29	14		PL.9②
3	557-404	不整円形	29×23	19		
4	558-403	不整円形	30×29	24		PL.9③
5	559-402	不整円形	29×25	11		
6	560-401	円形	28×27	9		
7	560-400	不整円形	25×23	11		PL.9④

第Ⅱ章 調査の内容

堀のような施設を想定したいが柱穴としては深度に乏しく、柱間隔が不一致な点など否定的な材料が目立つ。入口・門に相当する部分も想定できない。礎石を埋めた痕跡と考えるにはP3・7など底面が平坦でなく不自然である。

2号掘立柱建物（第28図 PL.9-⑬～⑮）

調査区北隅で確認した5基のピットで、そのうち4基が建物南隅部分にあたと想定し2号掘立柱建物と呼称した。調査区境に接した位置にあって全容が把握できておらず、ピットの形状が不揃いで不明瞭な点が多い。

位置 1号ピット列の北側に隣接し、P15が1号ピット列P5と1.1mの距離にある。

規模形状 重複部分を含まないと、各ピットは径25～30cm前後の規模が主体となる。深さは様でなく、P16の浅さが目立つが他は柱穴的な断面形状である。南東側柱筋は2.3mの長さがあり、北側調査区域外まで続く可能性がある。P15はピット2基の重複で北側部分からP18へ向かって南西側柱筋を想定すると直角に近い隅部分となるが、北側ピットの方が柱穴的である。各ピットの間隔は芯々距離でP15-16間135cm、P16-17間94cm、P15-18間140cmで様ではない。

埋没土 1号ピット列同様にAs-Aの混入が見られず、天明三(1783)年以前に埋没したとみられる。

方向 N-34°E(南東側柱筋)

備考 街道沿いの建物と思われるが方向が道から10°近く異なっている。

3号掘立柱建物（第28図 PL.9-⑤～⑯）

調査区北隅で確認した建物で大半が調査区域外となり全容は不明瞭である。各ピットは深度に富み柱穴的であり、南側柱筋が規則的でないが他のピットが見られないことから3号掘立柱建物とした。

位置 2号掘立柱建物の南西7mの位置に本建物P8がある。道からは最も近いP11でも4m近い距離がある。

規模形状 確認できる東側柱筋は6.85m、南側柱筋は4.6mを測る。比較的大型建物となる可能性があるが南東隅が直角にならず、南側柱筋のピットも一列に並ばない。P13が北側へ逸れたと考えるとやや直角に近い南東隅となるが大型を想定する建物としては整美さに欠ける。各

ピットは径30cm前後の規模で1号ピット列や2号掘立柱建物ピットと近似した規模である。各ピットの間隔は芯々距離でP8-9間236cm、P9-10間235cm、P10-11間217cm、P11-12間275cm、P12-13間183cmを測る。2号掘立柱建物と比べ柱間幅は2倍近い値になっている。ほぼ直線的に並ぶ東側柱筋ピット間隔が規則的なのに対し、並ばない南側柱筋ピット間隔が不揃いで両筋の対称がより顕著に表れている。

埋没土 2号掘立柱建物同様As-Aの混入が見られず、天明三(1783)年以前に埋没したと考えられる。

方向 N-21°E(東側柱筋) N-62°W(南側柱筋P11-13間) N-65°W(南側柱筋P11-12間)

備考 建物区画内に3号土坑がある。2号掘立柱建物以上に道との角度が乖離し、道との距離もあり、街道に軒を揃えようとする意図のない建物である。

4号礎石建物（第29図）

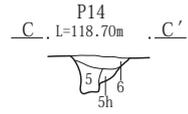
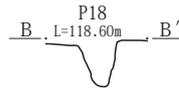
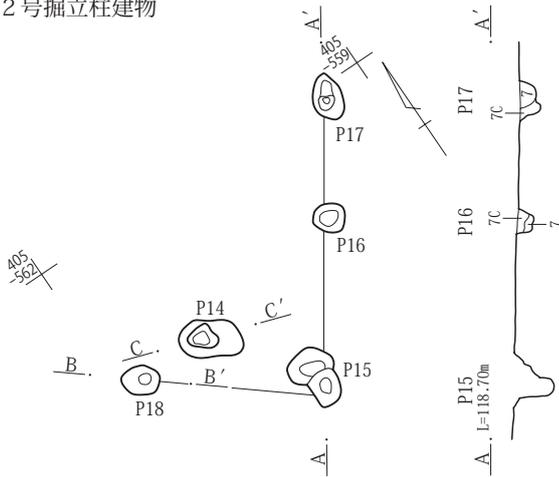
調査区西側にある古墳時代1号住居の掘り下げ途中で扁平な川原石が規則的に並んでいるのに気付いた。住居の壁には沿わない方向に3石が並び、北隅の石から西方向90°の位置にも1石が配されており、別遺構を想定し礎石建物とした。建物配置には合致しないが石の大きさや表面レベルの近い石5を併せて記載した。

規模形状 確認できた東側柱筋は長さ3.05mで1号住居内南側へさらに1石を想定することは可能である。個別礎石の大きさは別表に記した。いずれも径20cm前後の川原石で礎石としては小振りである。平面が丸い石より方形に近い石を選んだように見える。各石の間隔は芯々距離で石1-2間163cm、石2-3間157cm、石3-4間148cmを測る。石5は石4の西側216cmの柱筋から鈍角に開いた位置にある。東側の石2-4は特に上面レベルが揃っている。住居床面から7～10cmの高さで下側は床面にほぼ接し、グリ石のような付帯物は見られなかった。住居確認面からは35cmの深さにある。石5も近似した状況で石1のみ床面より浮いた状態だった。石1は北側に隣接した住居カマド袖上に径10cmの扁平な礫が見られた。

方向 N-1°E(東側柱筋)

備考 石3は5号溝に前出している。住居内を掘り込んで礎石を置くならピット状の掘り込みがあったはずだ

2号掘立柱建物



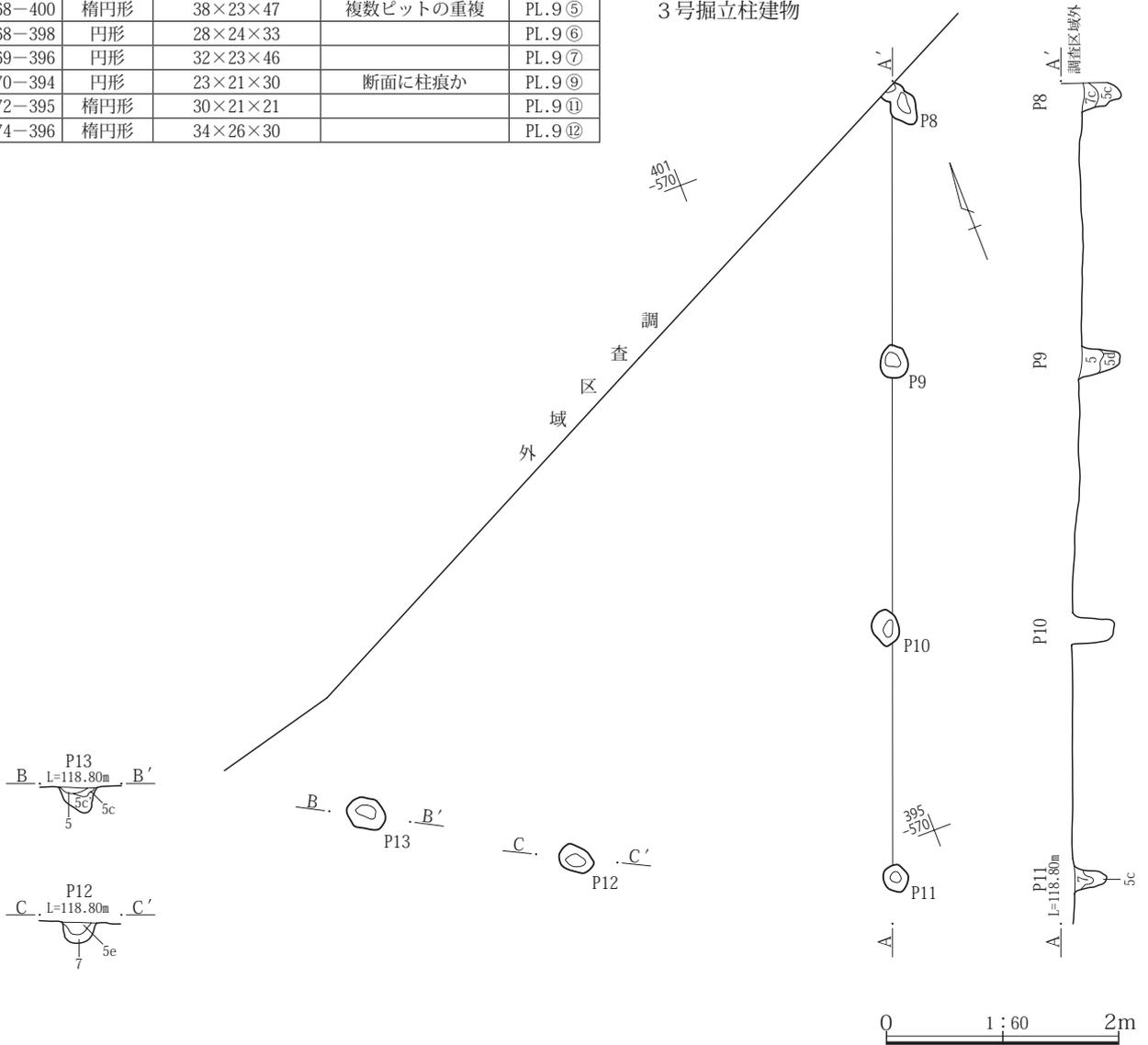
2号掘立柱建物計測表

No.	位置	形状	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	備考	写真
14	561-403	楕円形	48×30×49	建物とは無関係か	PL.9 ㉓
15	560-403	形	48×37×35	2基のピットの重複	PL.9 ㉔
16	559-404	形	25×23×17		PL.9 ㉕
17	559-404	形	34×24×36	重複または抜柱痕あり	
18	561-403	形	30×24×43		

3号掘立柱建物計測表

No.	位置	形状	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	備考	写真
8	568-400	楕円形	38×23×47	複数ピットの重複	PL.9 ㉖
9	568-398	円形	28×24×33		PL.9 ㉗
10	569-396	円形	32×23×46		PL.9 ㉘
11	570-394	円形	23×21×30	断面に柱痕か	PL.9 ㉙
12	572-395	楕円形	30×21×21		PL.9 ㉚
13	574-396	楕円形	34×26×30		PL.9 ㉛

3号掘立柱建物



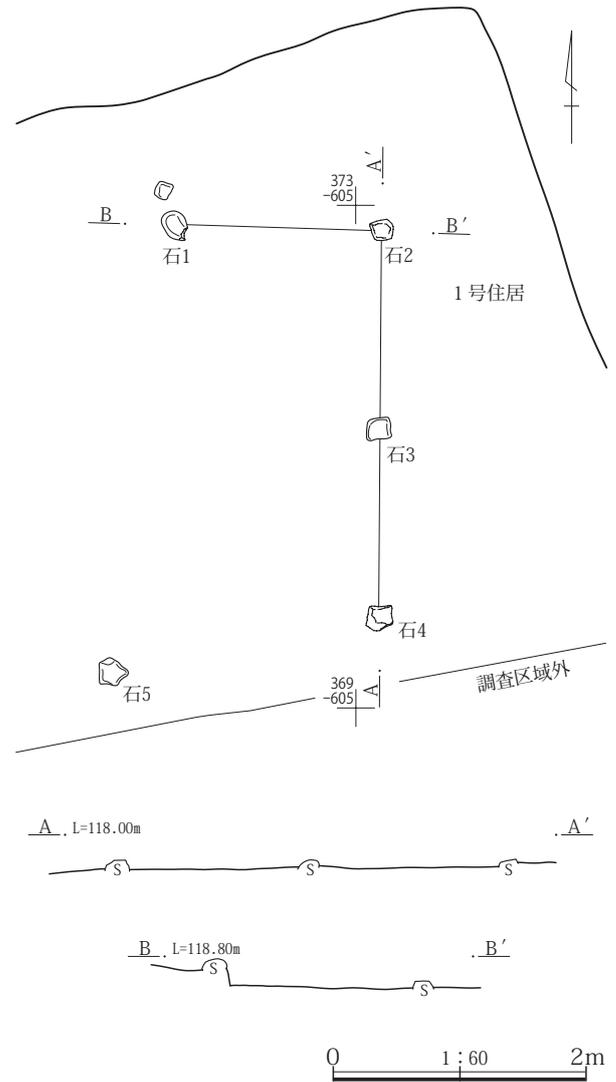
第28図 2号掘立柱建物・3号掘立柱建物

第Ⅱ章 調査の内容

が、住居調査時には全く気付かなかった。抜柱した際に住居埋没土壁が崩れたものと想定している。石3は5号溝(本文42頁)に前出している。住居埋没土の軟弱な土層をきらって床面近くの深さまで礎石を埋めたのであろうか。これら礎石に繋がる石が東側の工房跡を覆うように旧地表面に配されていた可能性があるが、周辺は上面が掘削されていて確認できない。

4号礎石建物計測表

No.	位置	形状	規模 (cm) 長径×短径	上面レベル (m)	備考
石1	606-372	楕円形	25×19	118.78	一部欠損。上面北側へ低くやや傾斜。
石2	604-372	不整形	18×16	118.60	上面平坦。
石3	604-371	方形	19×17	118.60	上面平坦。
石4	604-369	五角形	22×20	118.60	上面ほぼ平坦。
石5	606-369	五角形	23×22	118.62	上面やや凹凸。中央が高い。



第29図 4号礎石建物

(4) 鍛冶工房 (第30図 PL.10-①・②)

調査区南隅は近年の建物土台など攪乱の激しい一画であったが、その隙間に地山が被熱赤変した部分が3カ所見られた。各焼土には対になるようなピットがあり、そこに多量の鍛造剥片が含まれていた。焼土部分が炉の底面でこの付近を鍛冶工房と考え、一括してこの項で扱った。炉に前出する32号土坑もこの項に含めた。

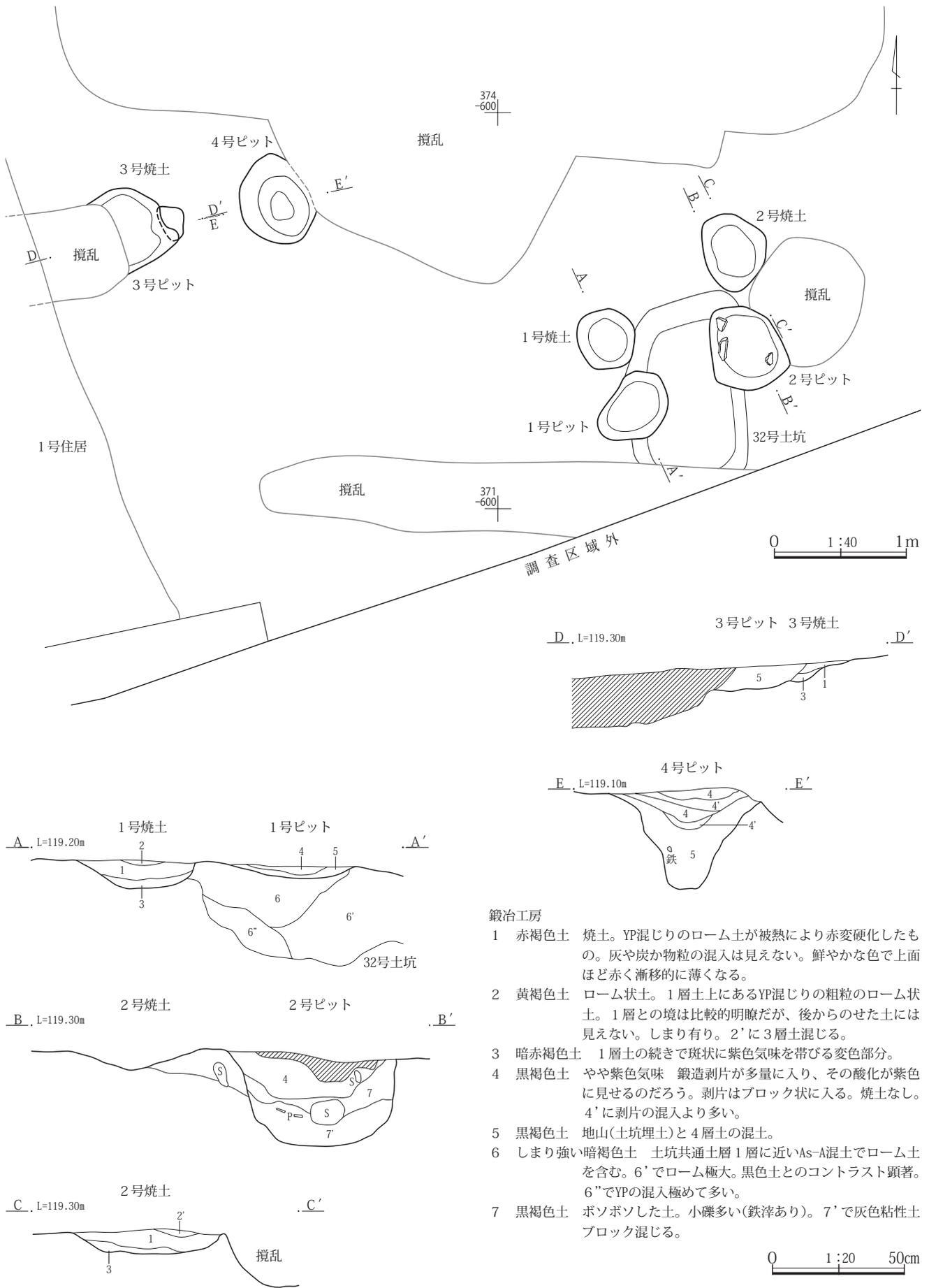
ピットから多量の鍛造剥片等を出土しているが、詳細は本文48頁に記した。

1号焼土と1号ピット (PL.10-③・④、11-①・②)

調査区南隅で確認した明瞭な被熱赤変部分が2カ所並んで確認され、西側を1号焼土と呼称した。

位置 371・372-698・699

焼土 平面45×43cmの不整形円形を呈している。最深部の確認面からの深さ10cmであるが、赤色味の強い部分は7cmの厚さである。鉄滓・鍛造剥片や炉壁片など製鉄関連遺物は全く見られない。赤変しているが土質は地山と同じであり、被熱した地山と判断した。この上に炉体があったものと推定する。焼土上にある2層土が炉底壁の下に敷かれた粘性土となる可能性がある。



第30図 鍛冶工房

第Ⅱ章 調査の内容

ピット 焼土の南側にあり、上端での間隔7cmに近接している。東側半分は前出する32号土坑上にある。平面は61×51cmの不整楕円形を呈し、確認面からの深さ6cmを測る。底面と32号土坑埋没土の境は不明瞭な部分があったが、比較的平坦な底部と思われる。鍛造剥片を含む。

備考 南側の攪乱内には上面が平坦な礫がみられ、床石であった可能性がある。前出する32号土坑は埋没土にAs-Aを含み、ピットは天明3年以降の施設である。

2号焼土と2号ピット (PL.11-③~⑥)

焼土は1号焼土の東側70cmに並ぶようにして確認された。南側に近接する2号ピットとの間隔も10cmで、焼土とピットが対になる工房のセットが想定できた。

位置 372・373-598

焼土 平面58×48cmの形を呈し、確認面からの深さ12cmを測る。1号焼土同様地山が赤変したようで遺物を含まず、上面に2層土がある。

ピット 焼土の南側にあり、西側半分は32号土坑上にある。平面は60×49cmの不整楕円形を呈している。底面はなべ底状で確認面からの深さ34cmを測る。中層に長径14cmの川原石が見られた。床石には難しい礫である。鍛造剥片・粒状滓(湯玉)のほか微細な鉄滓や砥石片を出土した。

備考 2号ピット東側の窪みは明治時代の印版磁器片を含むため攪乱扱いをしたが、ピットはこの攪乱に後出しており、明治時代以降の施設であることが分かった。

3号焼土と3・4号ピット (PL.11-⑦・⑧)

1号住居東側にあり、焼土部分は当初住居のカマドを想定した。3号ピットに大きく削られており、焼土とピットの組み合わせがあるなら本焼土と対になるのは4号ピットであろう。

位置 373-601・602

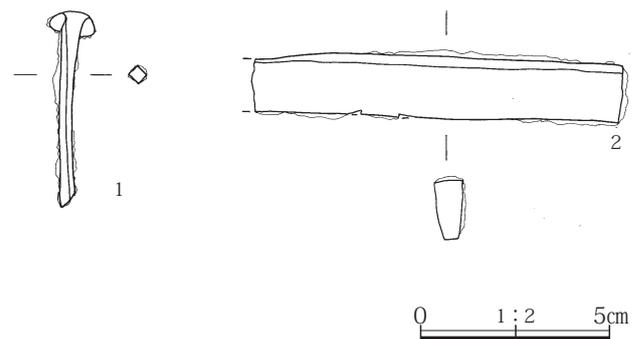
焼土 3号ピットに西側を大きく削られ、わずかしか残存していない。中央部分が残存しないため赤色の彩度は1・2号焼土に劣る。確認できる規模は径21cm、深さ7cmである。

3号ピット 東側の焼土を大きく壊し、さらに西側は攪乱で壊されている。鍛造剥片を含み鍛冶に係わる施設と思われるが、3号焼土とは別の施設になる。確認できる

平面は南北軸63、東西40cm以上で他のピットに比べ方形に近い。確認面からの深さ10cmを測る。鍛造剥片・粒状滓(湯玉)を含む。

4号ピット 焼土の東側40cmにあり、平面は68×57cmの楕円形を呈している。底面はやや狭く柱穴状で、確認面からの深さ37cmを測る。埋没土内出土の鉄製品2点(第31図 PL.17)を図示した。製鉄原料として持ち込まれた可能性がある。極めて多量の鍛造剥片を含み、粒状滓(湯玉)が混じる。

備考 北東側に広範な攪乱があり、全容を把握できたか不明である。1・2号土坑に比べ焼土とピットの並びや距離が異なり、1対の施設としてよいか不明である。



第31図 鍛冶工房出土遺物

32号土坑

1・2号ピットに前出する遺構で南隅は攪乱に壊され全容を把握できていない。

位置 371・372-598

規模形状 長軸126cm以上(推定140cm)、短軸86cmの南北に長い長方形を呈すと思われる。底面は不整で凹凸が多く、近世の他の土坑と異なる。確認面からの深さは47cmを測る。

埋没土 As-Aを含む。人為的に一気に埋め戻されたような堆積状態でしまりは強い。

備考 出土遺物はない。製鉄に係わる施設であるか判断できなかった。

(5) 土坑(近世以降)

(第32～36図 PL.12・17・18 遺物観察表58・59頁)

古代の土坑については本文15頁以降に記したが、それ以外の土坑について本項で扱う。

調査区西側北寄りを中心に多数の土坑を確認している。3カ所の土坑集中確認地点があり、西側にあり384-608周辺を中心とする17・30号土坑などを含む土坑集中地点A(以下地点Aと略す)、中央にあり地点Aの東側7m付近で11・28号土坑などを含む地点B、地点Bの南東側3m付近にあり15・24号土坑などを含む地点Cの呼称を設定した。なお、32号土坑は鍛冶遺構内にあり、その項ですでに記し、ここでは扱わなかった。

地点Aは天明3年以降と確認される土坑主体で、B地点は天明3年以前と想定されるものが多かった。

遺構図は第32図以降に示したが番号順の掲載ではない。出土遺物は38・39頁に一括して記した。遺物では時期の明らかな陶磁器類は18世紀以降のものである。金属製品が比較的多く出土し、13号土坑出土の火打金は本遺跡の唯一例である。

個別土坑の説明については39・40頁の一覧に記した。土層には共通の土層註を用いた。基本的な土質については算用数字で表し、混入物等の付帯事項をアルファベット小文字で組み合わせた。この記号は古代の土坑でも使用している。

(基本土質)

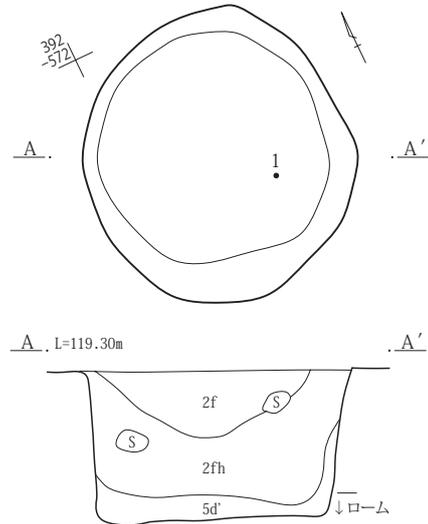
- 1 暗灰色土 As-Aの混入の多い土。
- 2 灰黄褐色土 As-Aの混入のやや多い土。
- 3 暗黄褐色土 2区通有の粘性土。ローム粒や灰色味をおびた弱粘性粗粒土(山砂に近い)等雑多な混入物からなる。
- 4 暗灰褐色土 山砂に似たような粗粒弱粘性土。
- 5 黒褐色土 As-A下の壤土。
- 6 黒褐色土 しまりのある弱粘性土。
- 7 暗褐色土 暗褐色土とローム土・ローム状土の混土。
- 8 暗黄褐色土 ローム土主体で黒色土を不均等に含む。

(付帯事項)

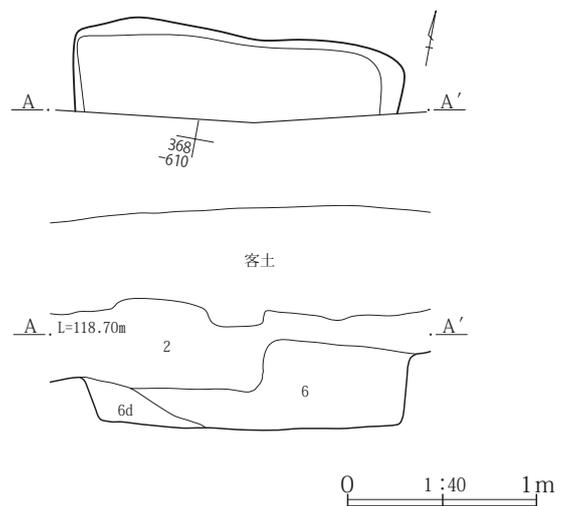
- a As-Aを含む。a'では少量の混入。
- b As-Cらしい軽石を含む。b'では少量の混入。
- c ローム粒を含む。c'では少量の混入。

- d ロームブロックを含む。d'では少量の混入。
- e 漸移層のようなローム状土を含む。
- f 細かな礫を含む
- g しまり弱い。
- h しまり強い。

1号土坑



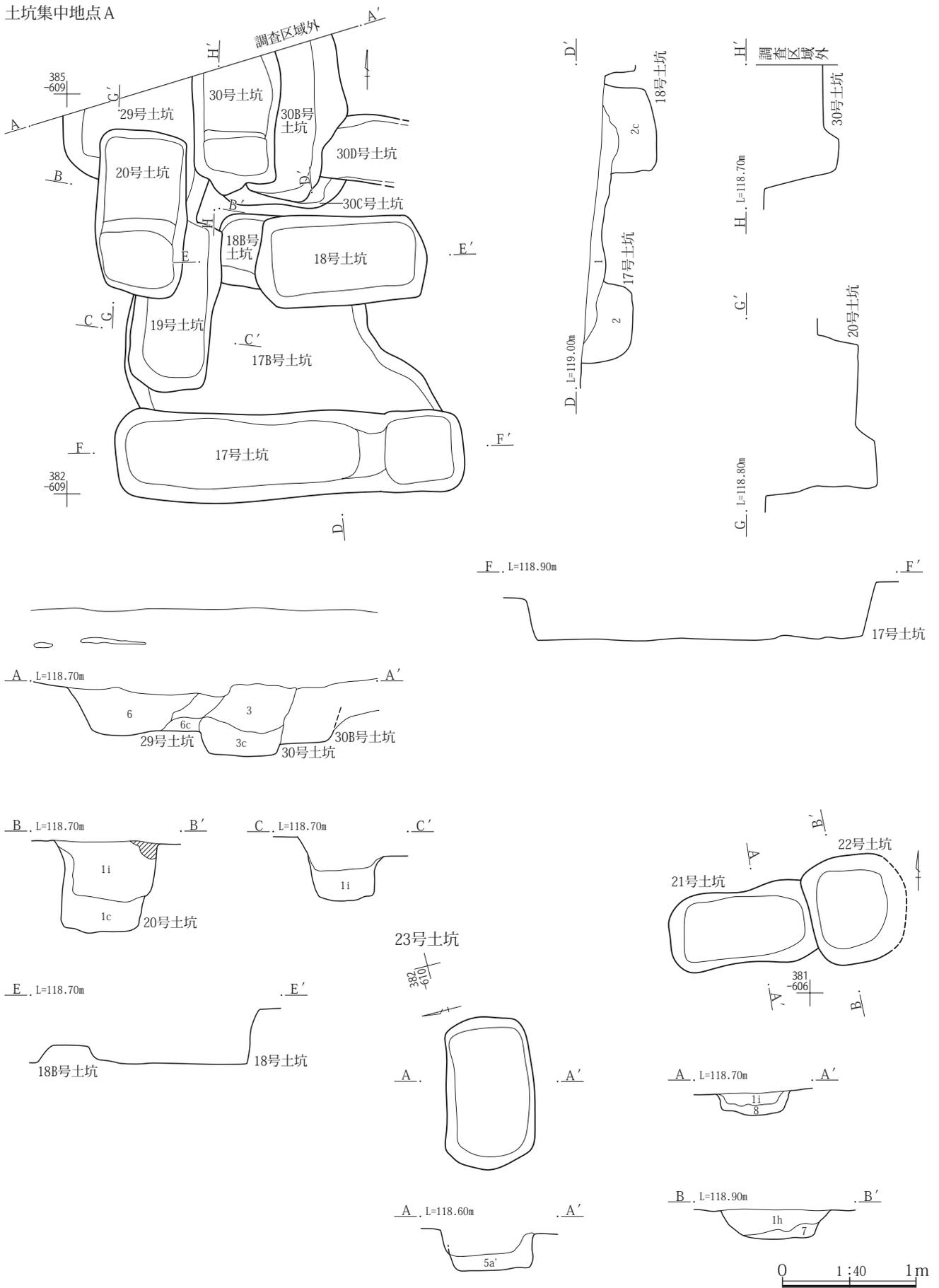
33号土坑



第32図 近世以降の土坑(1)

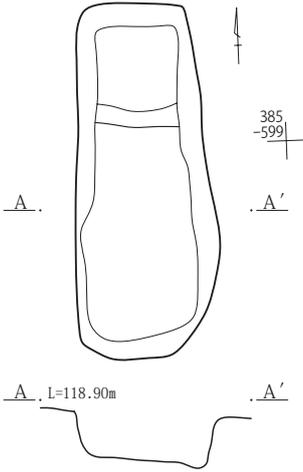
第II章 調査の内容

土坑集中地点A

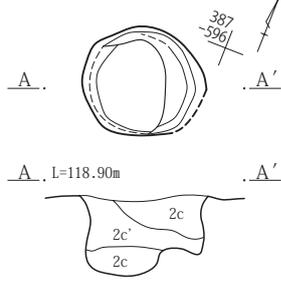


第33図 近世以降の土坑(2)

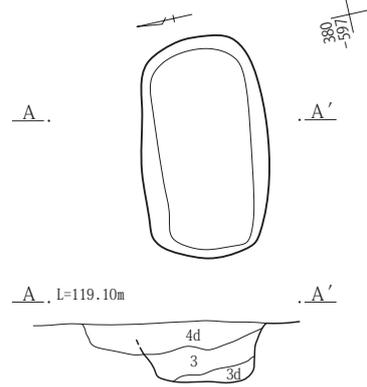
8号土坑



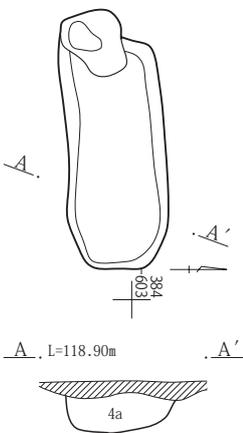
9号土坑



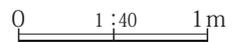
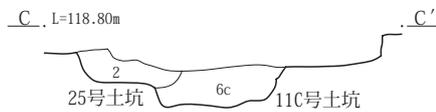
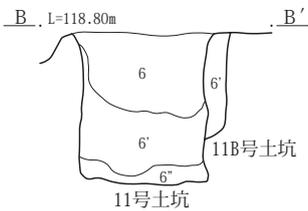
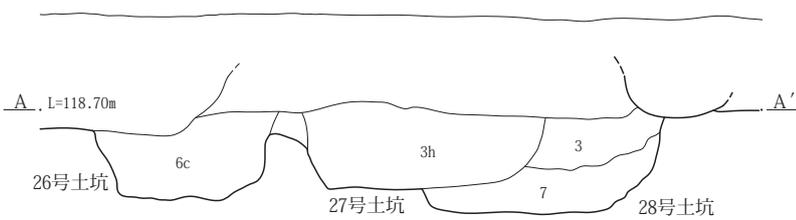
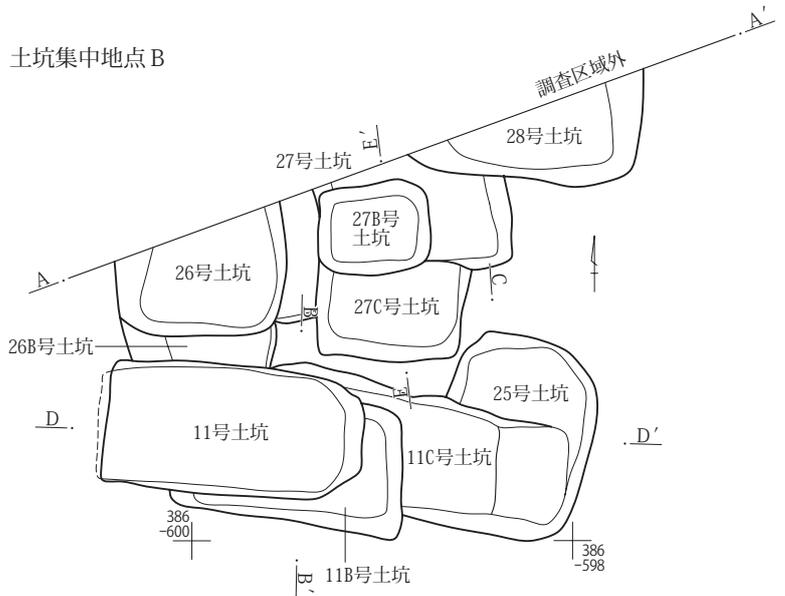
12号土坑



16号土坑



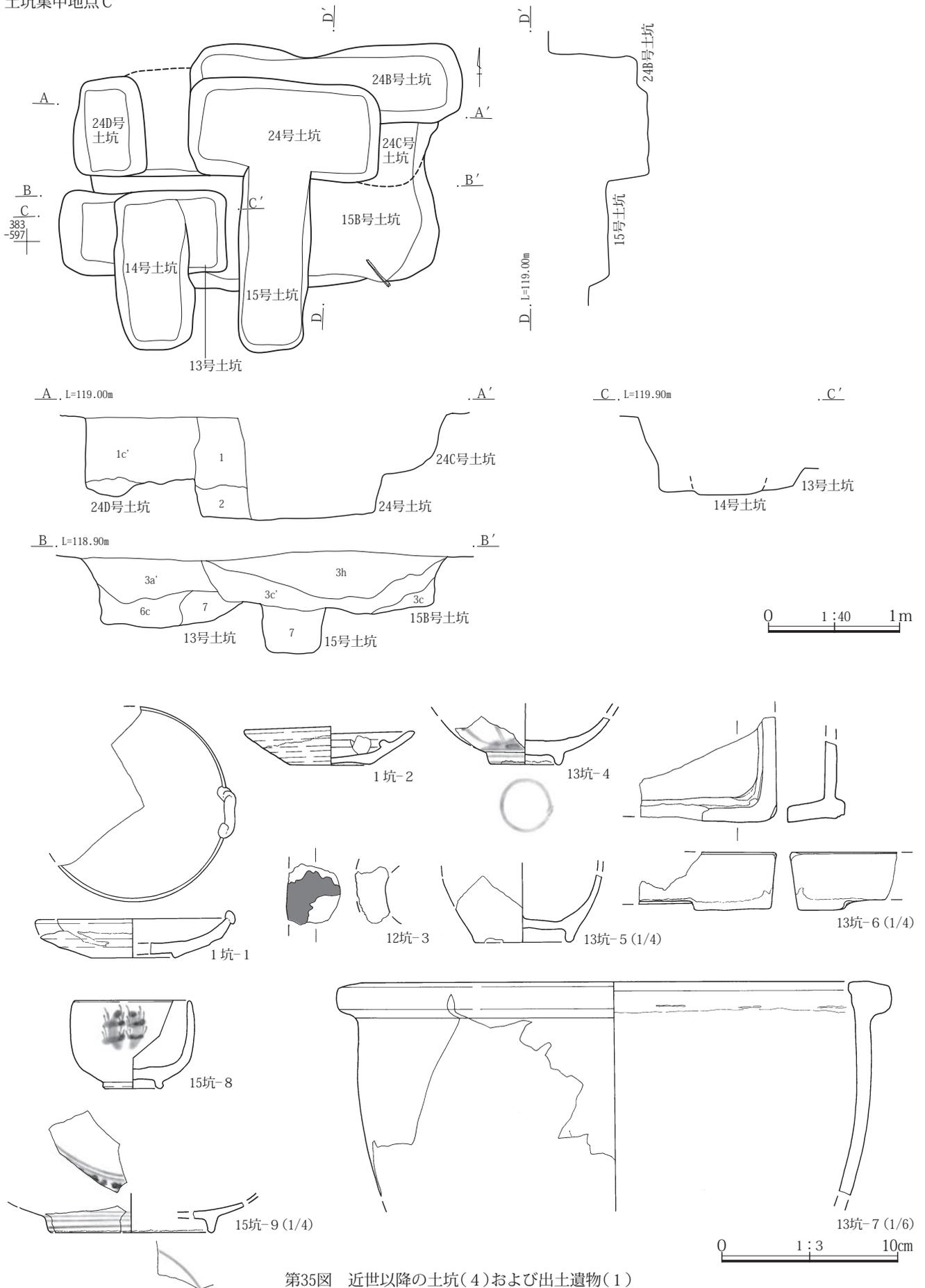
土坑集中地点B



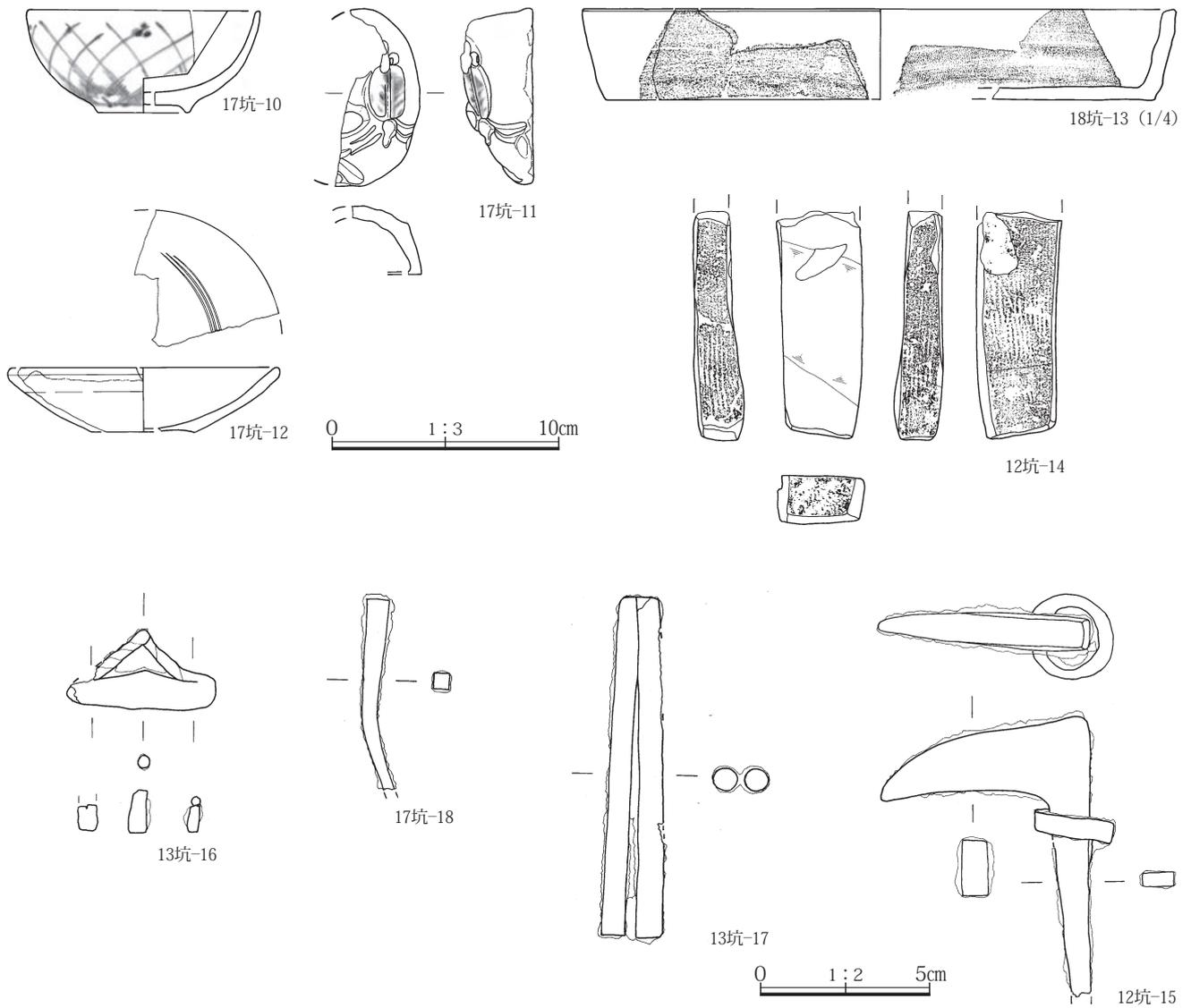
第34図 近世以降の土坑(3)

第II章 調査の内容

土坑集中地点C



第35図 近世以降の土坑(4)および出土遺物(1)



第36図 近世以降の土坑出土遺物(2)

第3表 土坑一覧(近世)

No.	挿図	位置 形状	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真		軸方向		
1	第32図 PL.12①	390-570 円形	157×145×78 N-27° E	皿1は底面から58cm。上面礫多い。掘り直しの可能性。	天明3年以降。方形周溝墓に後出。底面平坦。道北側側溝の北西1.6mに位置する。
8	第34図 PL.12②	383-599 長方形	189×75×29 N-1° E	2層土。	地点B南に隣接。天明3年以降。2段底状で北側が5cm深い。
9	第34図 PL.12③	386-596 円形	65×58×40 (27) N-68° E	掘り直しの痕跡。	地点B東に隣接。天明3年以降。2時期あり旧坑はピット状、新坑は底面平坦。
11	第34図 PL.12④	386-599 長方形	135×70×79 N-86° W	近世陶磁器片3片。	地点B南隅3基の西隅にある1基。11B号土坑に後出。西壁はオーバーハング。
11B	第34図 PL.12④	- 長方形	121×67×56 N-87° W		11号土坑東側にあり同土坑に前出。11C号土坑に後出か。
11C	第34図 PL.12④	- 長方形	(160)×66×46 N-86° W		地点B内。25号土坑に前出。底面は平坦で西側は傾斜。
12	第34図 PL.12⑤	380-596 隅丸長方形	118×67×35 N-82° W	埋没土内より羽口片3と砥石14、鉄器15。近世陶磁器片1片。	地点C南西に隣接。底面は比較的平坦。上面は攪乱か。
13	第35図 PL.12⑦	382-595 長方形	125×64×58 N-89° E	埋没土より4~6、鉄器16・17。他に土師器1片、近世陶磁器24片。	地点C南西隅。15B号土坑に前出。14号土坑と重複。底面は東側へ低くわずかに傾斜。壁は短軸側で垂直、東西側で上方へ開く。
14	第35図 PL.12⑦	382-595 長方形	122×57×59 N-3° W		地点C南西隅。13号土坑と重複。底面平坦。北壁は13号土坑とほぼ一致。

第Ⅱ章 調査の内容

No	挿図	位置	長軸×短軸×深さ(cm)	遺物と埋没土	備考
	写真	形状	軸方向		
15 B	第35図 PL.12⑦	383-594 長方形か	182×(86)×43 N-88° E (南辺)		地点C南東側にある大型土坑。13・15号土坑に後出。
16	第34図	384-604 長方形	122×52×35 N-85° E		地点Bの東に隣接。天明3年以降。2号住居に後出。底面は平坦。
17	第33図 PL.12⑧	606-382 長方形	(192)×66×39 N-88° E	埋没土より10~12、鉄器18。他に土師・須恵4片、近世陶磁器14片。	地点A南隅。天明3年以降。17B号土坑に前出。底面はわずかだが階段状に西側へ低く、数次の掘り直しの可能性。特に東隅は底面に正方形遺構重複の痕跡。
17 B	第33図 PL.12⑧	383-607 —	225×(96)×20 (11) —		17号土坑北側部分の総称で複数遺構の可能性。天明3年以降。17・18号土坑に後出。底面は東側でやや高いが他はほぼ平坦。
18	第33図 PL.12⑧	383-606 長方形	128×67×42 N-87° E	埋没土より在地陶器13。他に近世陶磁器6片。	地点A東側。天明3年以降。17B号土坑に前出。底面は南側へやや低く傾斜。
18 B	第33図 PL.12⑧	384-607 長方形か	(50)×53×31 N-81° W		18号土坑西側に重複。
19	第33図 PL.12⑧	383-607 長方形	(126)×58×50 N-3° E		地点A西側。天明3年以降。17B号土坑に前出か。18B・20号土坑とも重複。
20	第33図 PL.12⑩	383-608 長方形	124×68×66 (83) N-4° E		地点A西側。天明3年以降。南側1段窪むような方形深部あり。東側に掘り直し痕または後出する別遺構が存在。19・29号土坑と重複。
21	第33図	605-381 長方形	(106)×60×20 N-80° E	近世陶磁器1片。	地点A南25cmに近接。天明3年以降。22号土坑と接するようにして重複。
22	第33図	381-605 隅丸方形	80×(73)×21 N-11° W		地点A南に近接。21号土坑と重複。天明3年以降。南側上端は攪乱に削られる。底面は皿底状。
23	第33図 PL.12⑫	381-610 長方形	115×65×31 N-80° W		地点A西側に隣接。底面はほぼ平坦で地山傾斜と逆に東側がわずかに低い。
24	第35図 PL.12⑦	383-594 長方形	145×75×85 N-85° W		地点C北側4基以上の土坑のうち中央最深部分。天明3年以降。15号土坑に前出か。
24 B	第35図 PL.12⑦	384-594 長方形	205×59×67 N-88° E		地点C北隅。24号土坑北側に重複。底面平坦。
24 C	第35図 PL.12⑦	383-594 方形か	(37)×—×38 —		15B号土坑北東側に底面が4cm前後高い部分があり24C号土坑を設定。
24 D	第35図 PL.12⑦	384-597 長方形	75×52×60 N-5° E		地点C北西隅。24号土坑西側の広い窪み(北側は攪乱で不明瞭)の西隅部分。
25	第34図 PL.12④	386-597 隅丸正方形か	(78)×80×24 N-11° E (東辺)		地点B南東隅。天明3年以降。11C号土坑に後出。底面は比高5cm前後の凹凸。
26	第34図 PL.12④	387-599 長方形か	90×(58)×35 N-86° W (南辺)		地点B北西隅。北側は調査区境となる。
26 B	第34図 PL.12④	387-600 —	—×(78)×38 —		11号土坑と25号土坑間の不明瞭な窪み部分。
27	第34図 PL.12④	387-598 長方形か	(80)×(71)×29 N-81° E (南辺)		地点B北側3基以上の土坑のうち北隅の広い部分。北側は調査区境となる。28号土坑に後出。
27 B	第34図 PL.12④	387-599 長方形	58×48×53 N-84° E		地点B北側で最深の土坑。底面は細かな凹凸あり。27・27C号土坑と重複。
27 C	第34図 PL.12④	387-659 長方形形	78×(53)×37 N-87° W (南辺)		27B号土坑の南側に重複。
28	第34図 PL.12④	387-597 長方形か	(121)×(58)×55 N-82° W (南辺)		地点B北隅。北側は調査区境となる。27号土坑に前出。東壁は緩やかに立ち上がっている。
29	第33図 PL.12⑧	384-608 長方形か	(110)×(108)×40 N-3° E (西辺)		地点A北西隅。北側は調査区境となる。30号土坑に前出。20号土坑と重複。
30	第33図 PL.12⑧	384-607 長方形か	(94)×63×45 N-5° W		地点A北隅4基以上の土坑の最深部分。北側は調査区境となる。南隅に方形の深部あり20号土坑に類似。29号土坑に後出。
30 B	第33図 PL.12⑧	385-607 長方形か	(118)×(54)×44 N-1° E (東辺)		30号土坑東側に重複。北側は調査区境となる。30C・D号土坑と重複。
30 C	第33図 PL.12⑧	384-607 長方形か	(124)×(80)×25 N-1° E (東辺)		30B土坑の南側に重複。東辺は同土坑と共有か。
30 D	第33図 PL.12⑧	384-607 長方形か	(44)×52×26 N-80° W		地点A北東隅。東側は攪乱により不明。30B・D号土坑と重複。
33	第32図	368-609 長方形か	173×(50)×39 N-82° E	土師・須恵9片、近世陶磁器2片。	調査区西隅に離れて存在。南側は調査区境。

(6) 溝

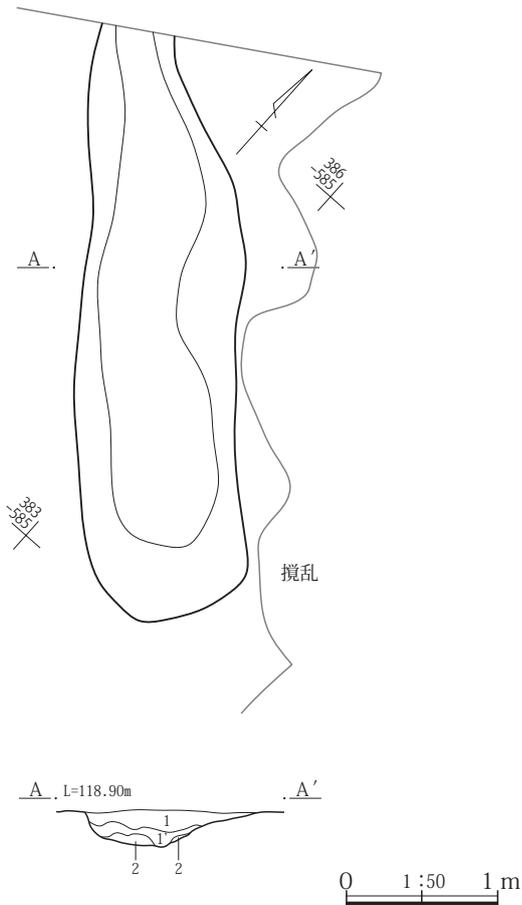
道の側溝および方形周溝墓として名称を変えた溝以外に2条の溝を調査した。どちらも明瞭な遺構ではないがこの項で一括して扱った。調査時の名称を踏襲したため4号溝からの始まりとなった。

4号溝 (第37図 PL.18)

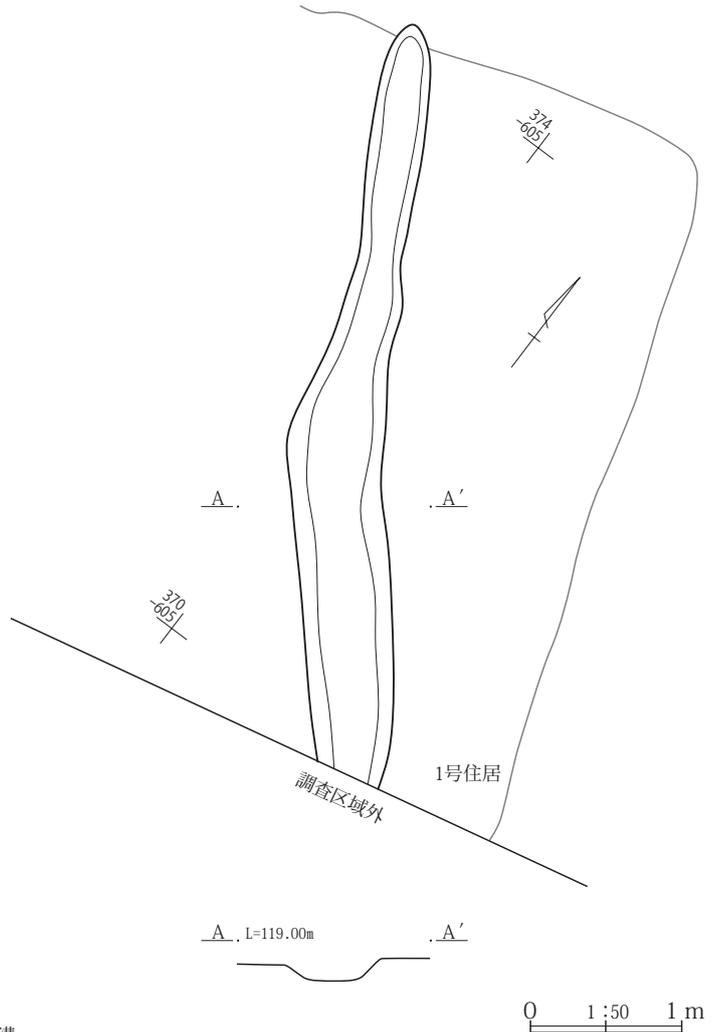
調査区中央付近の1号方形周溝墓南西溝の西側で確認した。東側は地山を削り込んだ後世の削平面で北側にも攪乱がかかり全容を把握できていないが隅付付近まで調査できたようだ。付近は機械で転圧されたような硬さで残存状態は良くなかった。

位置 南東隅383-584 北西隅386-587

4号溝

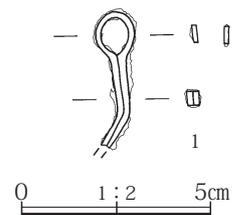


5号溝



4号溝

- 1 暗褐色土 As-Cと思われる軽石混じりの黒色土。方形周溝遺構の溝にくらべると軽石の混入多くしまりも強い。1'はローム小ブロックが混じる。
- 2 暗黄褐色土 ローム土と黒色土の混土。方形周溝遺構の溝下層土とも近似している。軽石の混入はない。



第37図 4号溝・5号溝および出土遺物

第Ⅱ章 調査の内容

規模形状 全長3.91m以上、幅49～107cmで細い部分は北西隅付近のみである。底面は比較的平坦で深さ13～23cmを測る。底面レベルは中央付近が深く、北西隅付近は特に浅い。土坑に近い施設である。

方位 N-44°W

備考 出土遺物はない。上層埋没土は古墳時代の遺構と近似しており、これが埋戻し土でなければ古代の遺構となる可能性がある。

5号溝 (第37図 PL.13-①・②)

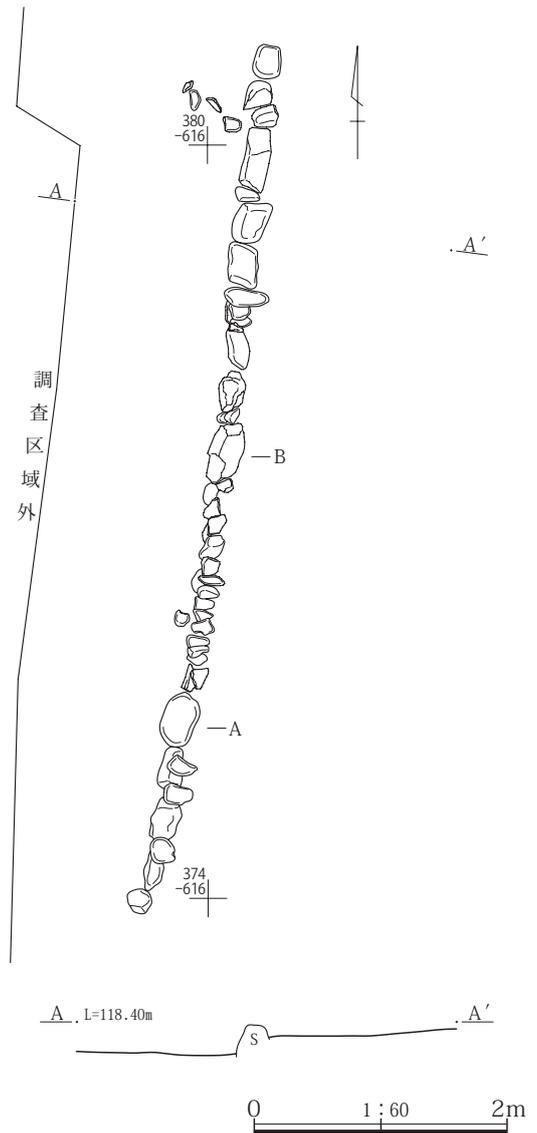
1号住居上面で確認した。地山上より住居上部分でより明瞭に確認できた溝である。南東隅は調査区境にかかり全容を把握できていない。

位置 南東隅370-603、北西隅374-606

規模形状 確認できた範囲で全長4.98m、幅29～64cmを測る。中央付近で小さく「く」の字状に屈曲し、屈曲部の北西側で細い。底面は平坦で確認面からの深さ8～13cmを測る。底面は北西部分で傾斜と逆に北西側に向かって高くなるが、南西側ではほぼ平坦で水路的ではない。

方位 N-36°W(北西側) N-40°W(南東側)

備考 図示できた遺物はないが、土師器と近世陶磁器片を4片ずつ出土している。4号礎石建物の石2に後出している。埋没土はAs-Aと思われる軽石混じりの粗粒土で近世土坑と同質の褐色土だった。



第38図 石垣

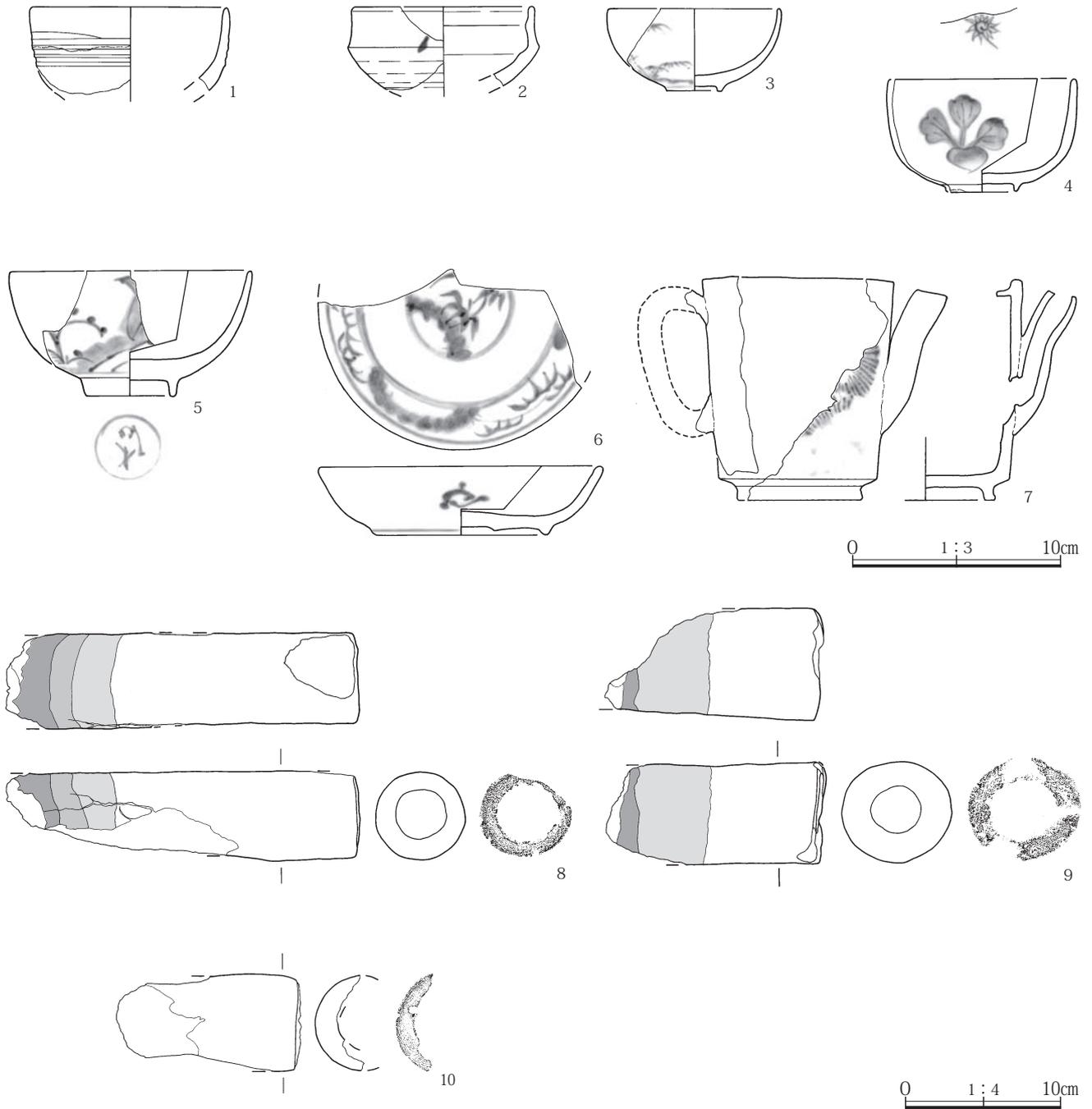
(7) 石垣 (第38・39図 PL.13-③、18 遺物観察表 59・60)

調査区西隅の傾斜地で等高線に沿うよう直線的に据えられた礫があり、部分的にAs-Aが見られ、江戸時代の石列と考えた。礫は2石以上積まれた部分があるが、最上部の礫が細長い小型の礫で、さらに上段に1石程度石が積まれていたことが想定される。旧状では高さはあまりないが石垣であったと考え、この石列を石垣と呼称した。石垣の西方は水路へ続き、地境の石垣であったと思われる。傾斜地にあつて石垣西脇は平坦であり、踏み固めは見られないが道状の施設であった可能性がある。

位置 374-616 (南隅) 380-615 (北隅)

方向 N-7°E

規模形状 石列部分は全長で6.95m部分を確認した。北側に石垣が延長するなら痕跡は残るはずである。南側石垣下面は高くなって浮くような状態で、石垣が削平されても痕跡は残らない可能性がある。使用されている礫は川原石が多い。下段には最大で長軸50cm前後の礫を裏側(斜面上面)だけ掘り込んで小口を繋ぐようにして並べ、裏込めは見られない。その上に一部小口を見せるようにして細長い礫が置かれている。ただし図A-B間の1.7m部分のみ長さ18cm前後の細長い礫を小口積みしてある。出入口状の隙間を塞いだように見えるが、周辺に窪みや硬化面は確認できない。残存する石垣上面と西側平坦面の比高差は30cm前後である。



第39図 石垣脇出土遺物

出土遺物 石垣周辺は西脇付近を中心に遺物の出土が多く、陶磁器7点と羽口3点を図示した。陶磁器は完形近くまで復元できた個体はない。羽口は8のように残存状態が良く、また複数の個体が出土したのは1号井戸以外では本遺構のみである。図示した以外に土師器4片の他近世の磁器1片・陶器13片、近代の磁器2片を出土している。焙烙などの煮沸具が出土していない。

備考 石垣隙間や西脇平坦面にはAs-Aが見られ、一部では踏み込まれたような窪みに火山灰も残っていた。天明3年に残存していた施設と考えられる。なお、石垣北側延長の部分の調査区境には道状の窪みにAs-Aを廃棄した痕跡が見られる。

(8)耕作痕 (第40図 PL.13-⑤)

1号道上面路確認時に路面を覆うAs-Aが途切れる場所で見られた細い溝状の窪みで、中に混入物の少ないAs-Aが鋤き込まれるようにして確認された。畑の畝間に相当する耕作痕と思われる遺構でこの項で扱った。北側の広い痕跡と南西側の小規模な痕跡では走向が異なり別の耕作痕になると思われる。

位置 406-550 (北東隅) 396-562 (南東隅)

形状規模 北東側は長さ11m、幅2.4mの範囲に見られる9条以上の畝間である。最長部分で6.2mを測るが1.5m前後の部分が多い。幅は7~16cmで一様ではない。畝間の間隔は芯々距離で25~35cmと短く、2時期以上の重複する畝間と思われる。南西側は長さ1.9m、幅0.9mの範囲に3条の畝間が見られる。畝間の規模は近似している。最長部分で1.7mの長さがあり畝間芯々間隔は40cm前後で北西側耕作痕よりやや広い。

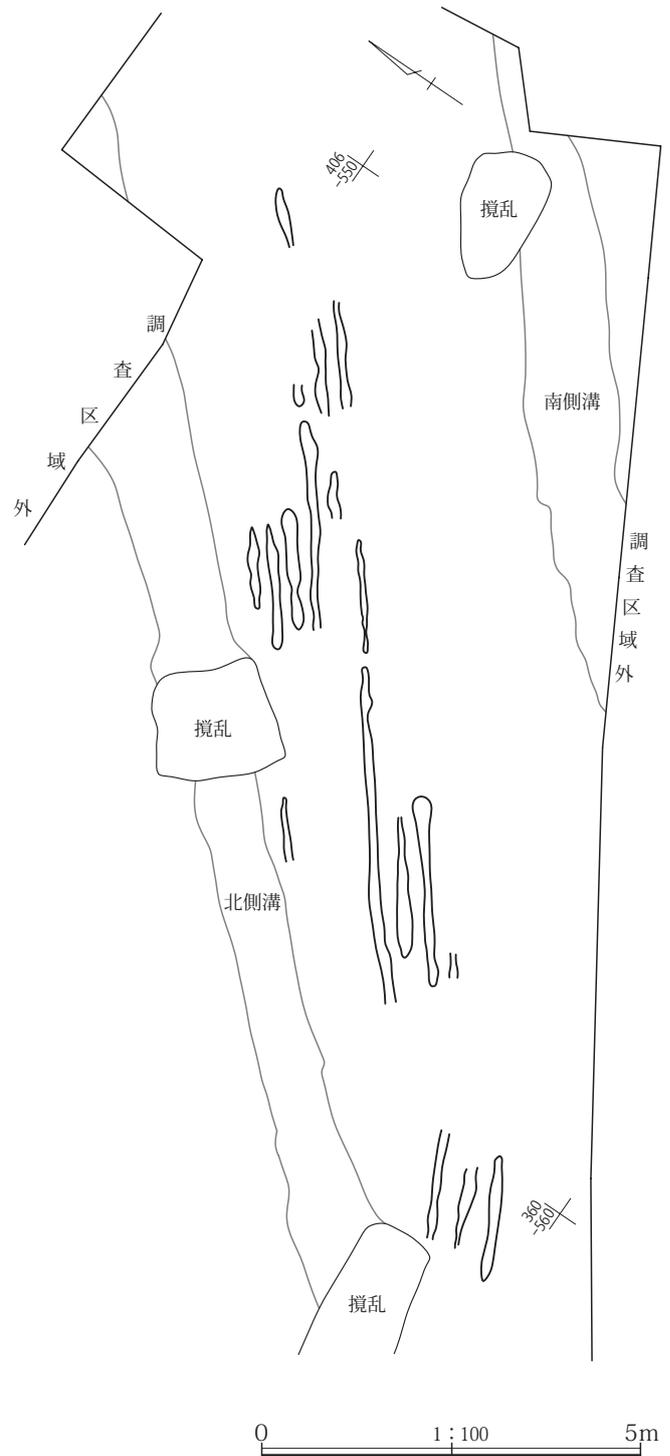
方位 N-52°E (北東側) N-62°E (南西側)

備考 1号道上のみで見られた痕跡である。この地点周辺にはAs-Aが残存していたため明瞭な掘り込み痕跡を残したものである。畑であれば広範に痕跡をとどめるはずだが、他の部分では耕作前にAs-A除去作業が終了して痕跡を残さなかったものと思われる。As-A降下後、一定時間を経て軽石上に新たな土壌が堆積してからの耕作痕と推定できる。

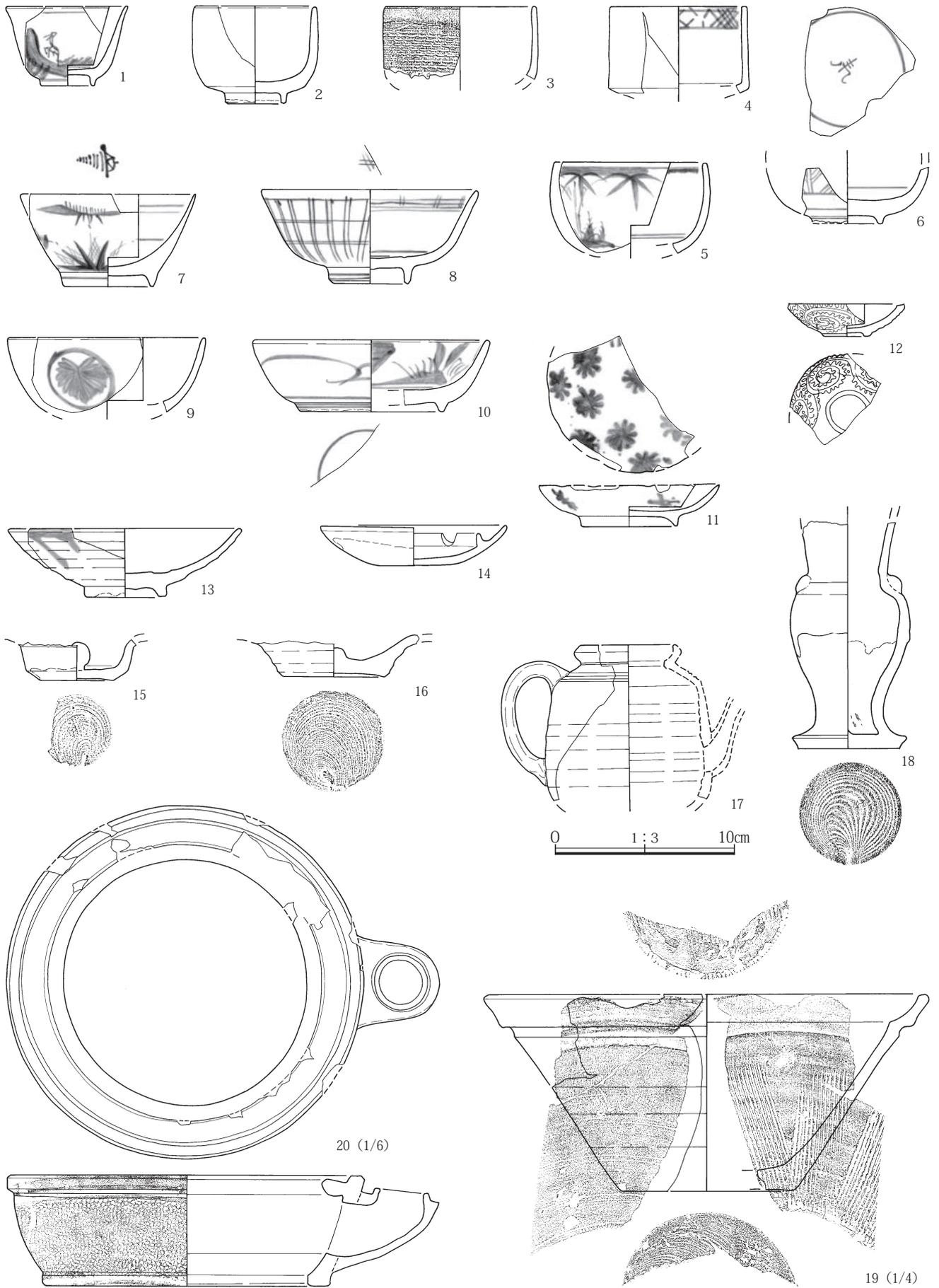
(9)その他の遺物

(第32~34図 PL.18・19 遺物観察表60・61頁)

遺構に伴わない遺物や攪乱内の遺物をここで一括して扱った。いずれも近世以降の遺物である。陶磁器18点、在地土器等5点、羽口6点、砥石6点、石造物1点、金属製品9点、古銭4点を図示した。羽口・砥石など鍛冶に係わる遺物の出土が目立つ。鉄製品にも42~45の不明棒状品があり、製鉄素材であった可能性がある。土師器・須恵器等古代の土器は27片の出土があったがいずれも小破片だった。近世陶磁器は遺構外から他に210点の出土があった。



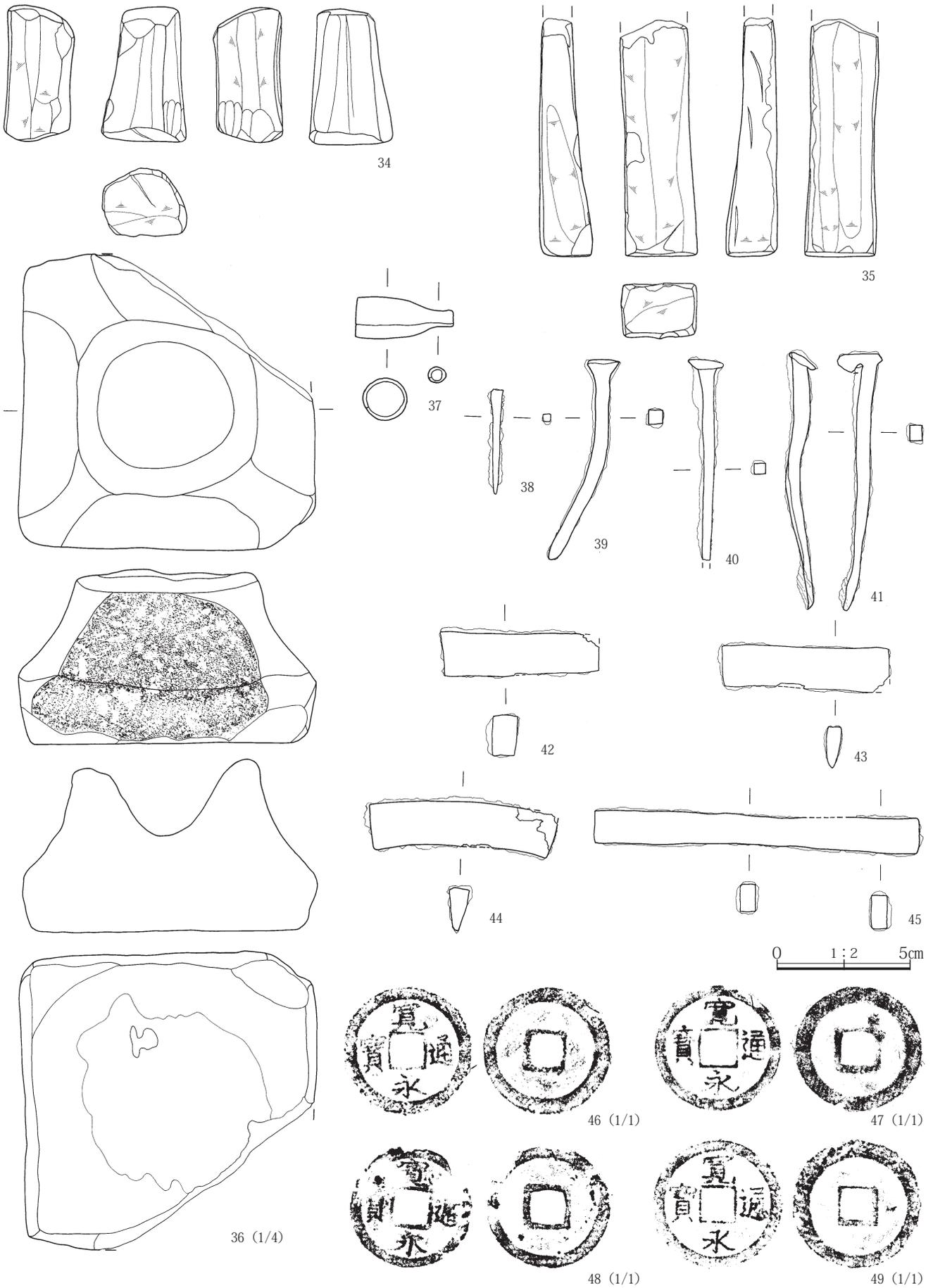
第40図 畑耕作痕



第41図 その他の遺物(1)



第42図 その他の遺物(2)



第43図 その他の遺物(3)

(10)鍛冶遺物の観察(PL.20)

鍛冶に係わる遺物は多くの遺構から出土している。羽口16点で例示すれば1号井戸7点を最多に、1号道側溝1点、石垣3点、遺構外6点がある。これらは遺構ごとに図示した。その他鍛冶滓や鍛造剥片など図示できなかった遺物について一部は写真(PL.20)で示し井戸出土の鍛冶滓と、鍛冶遺構周辺ピット出土の鍛造剥片類についてこの項で説明を加えた。

井戸出土遺物

井戸からは羽口の出土があったが、椀型滓の出土量がきわめて多かった。調査段階で微細片を除く鍛冶滓を取り上げ、洗浄作業を行った。炭化物等の出土はなかったが他に粘土溶解物などもあり、付近で鍛冶作業を行っていたことが分かる。なお、鍛造剥片等の微細物混入についての精査は行わなかったが、鉄滓分類作業の中で確認できるものはなかった。

整理作業の中で鉄滓は重量によって250g以上の大破片、125～250gの中破片、125g以下の小破片にわけ、中破片以上と小破片内でも比較的大きな資料については感覚的な分類ではあるが、磁着強・磁着中・磁着弱・非磁着にわけて重量の比を第4表に示した。

総量で約61kgの鍛冶滓を出土しているが、ほとんどすべてが椀型鍛冶滓であった。羽口付着の鍛冶滓も多く、多数の炉の破片であることが分かる。他に粘土溶解物が390gあるが、鍛冶滓に付着しているものは粘土溶解物に含まなかった。鍛冶滓は250g超の大型片はわずかで、100g前後に細かく崩れた状態だった。磁着の強さで見れば、磁着の強いものほど大きな破片に多く、反対に磁着の弱いものは小さな破片で比率が高くなる傾向が明瞭に窺える。磁着の強いものほど厚手で強度に富み、割れにくかったことが表れた数値である。

鍛冶滓は井戸出土以外にも総量で10kg以上出土しているが、いずれも攪乱内や表土内のもので、鍛冶遺構ピットを含め、他の遺構から出土する例はなかった。

なお粘土溶解物の一部をPL.20の⑩に1/3縮小写真で示した。

鍛冶遺構ピット出土遺物

鍛冶遺構と考えた3カ所の焼土には対になるようにし

てピットが伴い(3号焼土には2基のピット)、合計4基のピットを調査したが、これらピットには掘削段階で見えるほどの多量の鍛造剥片が混入していた。この埋没土は全量持ち帰り、整理段階で一部を洗浄した。洗浄によって水溶物を除去したものを洗浄土とし、乾燥後、礫などを除去し、磁石による磁着物分離を行い、磁着物以外を残渣とした。土量と洗浄によって得られた資料は第5表のとおりである。

調査した土量のうち1データは総量と洗浄土量を欠いている。ピット全体の土量は124kg以上になるが、およそ10%にあたる12.1kg以上の土を洗浄した。

磁着物には鍛造剥片と砂鉄のほか、磁帯した岩砕まで含まれ、鍛造剥片の総量を示すものではない。目の間隔0.8mmの篩で砂鉄と鍛造剥片の分離を試みたが、きわめて微細で粉のようになった鍛造剥片が多く、分離は不可能だった。

磁着物を重量および洗浄土量中の割合で示すと、1号ピット293g(30.1%)、2号ピット1415g(41.1%)、3号ピット132g(8.2%)、4号ピット808g(16.9%)および2号ピット下(32号土坑表層部分)628g(49.7%以下)となった。

なお、サンプルとして0.8mmの篩による分離を試みた3点についての資料を第6表に示した。磁着物のうちピンセットで選別できた確実な鍛造剥片は2パーセント前後で、篩落下物を含めると感覚的には20%程度が鍛造剥片のように見える。砂鉄も少なくなかったが、ピット内に砂鉄を蓄えたような状態を想定できるものではない。

PL.20の⑨～⑫に粒状滓を2倍に拡大した写真を示した。また鍛造剥片で特に大きなものを⑬～⑮に2倍に拡大で示した。⑯は最も磁着物の多い2号ピット下で選別した鍛造剥片の一部を等倍で示した。

第4表 1号井戸出土鍛冶滓の分類(単位：g)

重量分類	強磁着	中磁着	弱磁着	非磁着	総量	備考
250g以上	988	279			1267	PL.20-①～③
	78%	22%	0%	0%		
	3片	1片			4片	
125～250g	1749	6865	3619	2077	14310	PL.20-④～⑧
	12%	48%	25%	15%		
	10片	43片	22片	14片	89片	
125g以下	3067	12446	11956	5360	32829	おおよそ60gまで
	9%	38%	36%	16%		
(小片)					13015	おおよそ60g以下
総重量					61421	

強磁着は磁石に付いて持ち上がるほどの磁力、中磁着は磁石に反応する程度、弱磁着は磁力を感じる程度、非磁着はほとんど反応しないものと、感覚的に分類した。

第5表 鍛冶遺構ピット内土壌の内訳(単位：g)

ピットNo.	位置	全土量	洗浄土量	洗浄後土量	磁着物量	残渣	その他遺物	備考
1		6500	462	250	117	133		位置不明
1		4110	513	287	176	111		位置不明
2	上層	5480	530	383	289	94		
2	中層	7020	630	378	130	248	砥石細片	サンプルA
2	中層	8670	872	598	424	174	陶器細片	
2	下層	6150	517	381	298	83		
2	下層	8390	898	553	274	279		
2	ピット下			921	364	557	粒状滓	全土量計測欠く 土坑部分 サンプルB
2	ピット下	6710	579	304	49	255		土坑部分
2	ピット下	8180	684	414	215	199		土坑部分
3	上層	2880	488	230	34	196		
3	上～中層	7550	663	327	78	249	粒状滓	
3	下層	3530	464	233	20	213		
4	上層	5220	495	254	64	190		
4	上層	5530	506	271	106	165	粒状滓	
4	中層	9030	1074	739	365	374		サンプルC
4	中～下層	6470	608	252	51	201		
4	中～下層	8030	815	421	132	289		
4	下層	7730	741	556	74	482		
4	最下層	7210	554	376	16	360		

その他遺物では磁着物・残渣から除外してある。

第6表 磁着物サンプルの分類(単位：g)

サンプル	総重量	篩落下物	鍛造剥片	その他	備考
A	225.0	139.5	4.5	81.0	2号ピット中層
B	191.1	113.9	2.7	74.5	2号ピット下(土坑部分)
C	150.6	110.9	1.5	38.2	4号ピット中層

篩目は8mm。落下物には微細鍛造剥片と砂鉄が多量に混じる。その他は磁帯した岩砕等。

第Ⅲ章 考察

吉井川下宿遺跡と川内村 中野屋孫三郎

I. 吉井川下宿遺跡と中野孫三郎

吉井川下宿遺跡は、国道254号線の改良工事に伴って発掘調査を行った。調査地点は地元の方々の間でも火打金生産が行われていた場所として知られていた。調査の結果、鍛冶跡が見つかりはしたものの、火打金が生産されていた時期に特定しづらい状態であった。大量に生産されたであろう火打金も携帯用が1点出土したのみであり、この場所で生産されたと結論できない。そこで、調査地点がどのような場所かを記録や絵画資料から検討してまとめにかえたい。

遺跡の所在する群馬県高崎市吉井町は、文化・文政期から明治10年代にかけての「上州吉井火打金」生産地として知られている^(1~3)。上州吉井火打金は『守貞漫稿』に「上州△△吉井氏の製ヲ良トス」と記されている⁽⁴⁾。また、『天保時代名物競』という見立て番付に、火打関係では「上州 吉井火打鎌」と「三河 吉田ぼくち」の二つが対置されている⁽⁵⁾。以上のように、吉井火打金は江戸時代末頃にはブランドとして広く知られる存在となっており、江戸では文政年間から天保年間に次第に評判となっていた⁽⁶⁾。地元の吉井郷土資料館には、火打金生産と販売を物語る暖簾や看板、引札版木などが保管されている。

調査地の南側を通る国道254号線は、江戸時代の中山道脇往還として利用され、通称「姫街道」と呼ばれていた。調査地は国道が南から延びた丘陵の裾を回り込むように曲がる場所に位置する(第44図)。この場所を昭和16年頃の耕地図(第45図)で確認すると、耕地図では短冊形地割りがより明瞭に残るとい違いがあるものの、川や道といった大まかな地割りは一致する。更にこの場所を明治6年頃の『多胡郡川内村絵図』⁽⁷⁾で確認すると、細かい地割りにいたるまで耕地図と一致する。街道は丘陵裾部を回り込むようにカーブした後に直線となり、直線となる変換点に4つの点が描かれている。このマークは凡例に記載がないが、吉井宿東側の境(入り口)を示すも

のと考えられる。ここから西(左側)の直線部分には、街道両側に短冊形地割りが並ぶ。東側から吉井宿に入って北側の短冊形地割り二つ目に中野孫三郎の名が確認できる(第46図)。

調査地点は街道上のマークと短冊形地割りから考えると吉井宿の東側入り口付近にあたり、明治15年(1882)、に吉井町と合併する以前は川内村であった。川内村は明治3年(1870)以前は上下二ヶ村に分かれていた⁽⁸⁾。この絵図に調査区をあてはめると、調査区西側が絵図に示された中野孫三郎屋敷地の街道に面した部分にあたり、屋敷地の南側約1/3を調査したことになる。

II. 川内村 中野孫三郎(中野屋孫三郎)

明治8年(1875)の『以書付奉願預候』の控えによると、中野孫三郎は、「河内村中野孫三郎」が吉井町の火打職人に対して看板と火打金の銘を改めるよう訴えている⁽⁹⁾。また、この文書には「上州吉井中野屋孫三郎女作と銘を切付」たことも記されている⁽¹⁰⁾。つぎに吉井宿での火打金生産量であるが、『明治八年七小区物産下調簿』(第47図)によると「火燧金大」吉井町10,523丁・川内村2,500丁、「火打金中」吉井町15,517丁・川内村記載なし、「火打金小」吉井町38,813丁・川内村3,500丁である⁽¹¹⁾。今のところ、川内村で火打金生産を行っていたのは中野孫三郎のみが判明しているが、吉井町では明治5年(1872)で4軒が生産を行っていた。また、川内村の孫三郎を含め、いずれも吉井宿内で街道に面している⁽³⁾。個々の生産規模が不明であるが、明治8年の産額と明治5年の生産者比率をみる限り、川内村での生産量は決して少なくないといえよう。

江戸時代の史料は非常に少ないが、文政10年(1827)に刊行された『諸国道中商人鑑』(第48図)は重要である⁽¹²⁾。この書は広告代に応じて街道沿いの商家を宿場毎に紹介した旅人向けの情報誌である。この中で「上州吉井之部」の最初に「本家火打所 吉井入口右側 中野屋孫三郎」が看板の絵と共に紹介されている⁽¹³⁾。この書は街道の東側から順に掲載しているため、「吉井入口右側」は『多胡郡

川内村絵図』にあった中野孫三郎の屋敷付近を示すことになる。さきに紹介した『以書付奉願預候』には、数十年間操業してきた旨の記載があるので同一場所の可能性は高いといえよう。

Ⅲ. 江戸・東京の吉井火打金と川内村 中野屋孫三郎

江戸・東京の吉井火打金と川内村の中野屋孫三郎との関係を示す引札が近年見つかった（第49図）。この引札は反故紙として使用されたため裏の文字が透けて見づらいが、「江戸両国 鍛冶屋吉五郎」が「賣弘所」として吉井火打金の販売を行っていたことがわかる。販売者が鍛冶屋であるので製作も行っていた可能性が高い。ここで目を引くのは、「惣本家 上州多胡郡河打村吉井町東ヨリ 入口 中野屋孫三郎兼重女作」の記載である⁽¹⁴⁾。

以前紹介した引札（第50図）では、単に「吉井本家」の「取次所」や「賣弘所」としているのに対して^(3・15)、本引札は吉井川下宿遺跡の調査区西側に所在した川内村の中野屋孫三郎を具体的に示している点に特徴がある⁽¹⁶⁾。そして、江戸・東京の引札に総本家として名称と場所が示されている川内村の中野屋孫三郎は、吉井宿の火打金生産者の中でも名の知れた存在であったとは考えられないだろうか⁽¹⁷⁾。

以上、調査区内に位置した「火打所 中野屋孫三郎」に関して述べてきたが、指摘できた点を簡潔に記すと以下ようになる。

1. 調査区西側は江戸時代から明治時代と続いた川内村（現高崎市吉井町）の「火打所 中野屋孫三郎」の屋敷地であった。
2. 川内村の中野屋孫三郎は、吉井宿火打金生産者の中であって、江戸・東京にまで知られる存在であった。

注

1. 「火打鍛冶職中野孫三郎一族墓」が高崎市指定史跡となっている。
2. 『吉井本家の火打金—上州吉井宿の特産品—』吉井町郷土資料館 2001
3. 大西雅広「上州名産の「吉井火打金」」『群馬の遺跡7 中世～近代』上毛新聞社 2005
4. 朝倉晴彦編『合本 自筆影印 守貞漫稿』東京堂出版 1988
△は判読不能
5. 畑 麗「火打ち道具の文献 近世」「火打ち道具の絵画資料 近世」『火打ち道具の製作 調査と映像記録』江戸東京博物館 2002
6. 林 英夫、芳賀 登 編『番付集成 下』柏書房 1973、No211、この番付は書体や枠にページ番号が付けられていることから、後世に翻刻された番付と考えられる。執筆時には原本や影印は確認できていない。
7. 『群馬の地名』平凡社 1987
8. 『第十三大区小七区 多胡郡川内村絵図』群馬県立文書館蔵
吉井町は多胡郡に属していたが、明治29年の郡再編成により多野郡に

属した。その後、2009年には高崎市に編入された。

9. 原本を未確認のため史料掲載を控えるが、コピーを使用した。複写史料の存在は長谷川寛見氏のご教示による。この史料に記された複数の氏は、他の史料や勲業博覧会出品目録でも確認でき、原本を複写したものと考えている。
10. 大西雅広「民具資料から見た吉井火打金 『群馬考古学手帳 10』群馬土器観会 2000」でも触れたように、民具資料で「上州吉井中野屋孫三郎女作」の鑿銘を入れる火打金は少ない。この史料のとおり銘を入れていたとすれば、現存資料のみ限り、他所（江戸・東京）での生産量が多いことになるが、この点については今後の課題である。
11. 吉井郷土資料館蔵
12. 三井文庫蔵
13. 吉井町域の火打金生産・販売者は掲載されていないが、広告費を支払った商家を掲載するという性格の書であるため、吉井町域での生産・販売が文政期以降ということにはならない。
14. 筆者蔵。年代不明。

上下川内村が明治3年に川内村となるが、江戸時代でも川内村と記す例があり、これをもって明治3年以降とする根拠とはなりにくい。また、注3文献の巻頭写真で紹介した引札が「東京日本橋」となっているのに対して、本史料は「江戸 両国」となっている。したがって、ここでは江戸時代末頃から明治時代初期の可能性を考慮して「江戸・東京」とした。

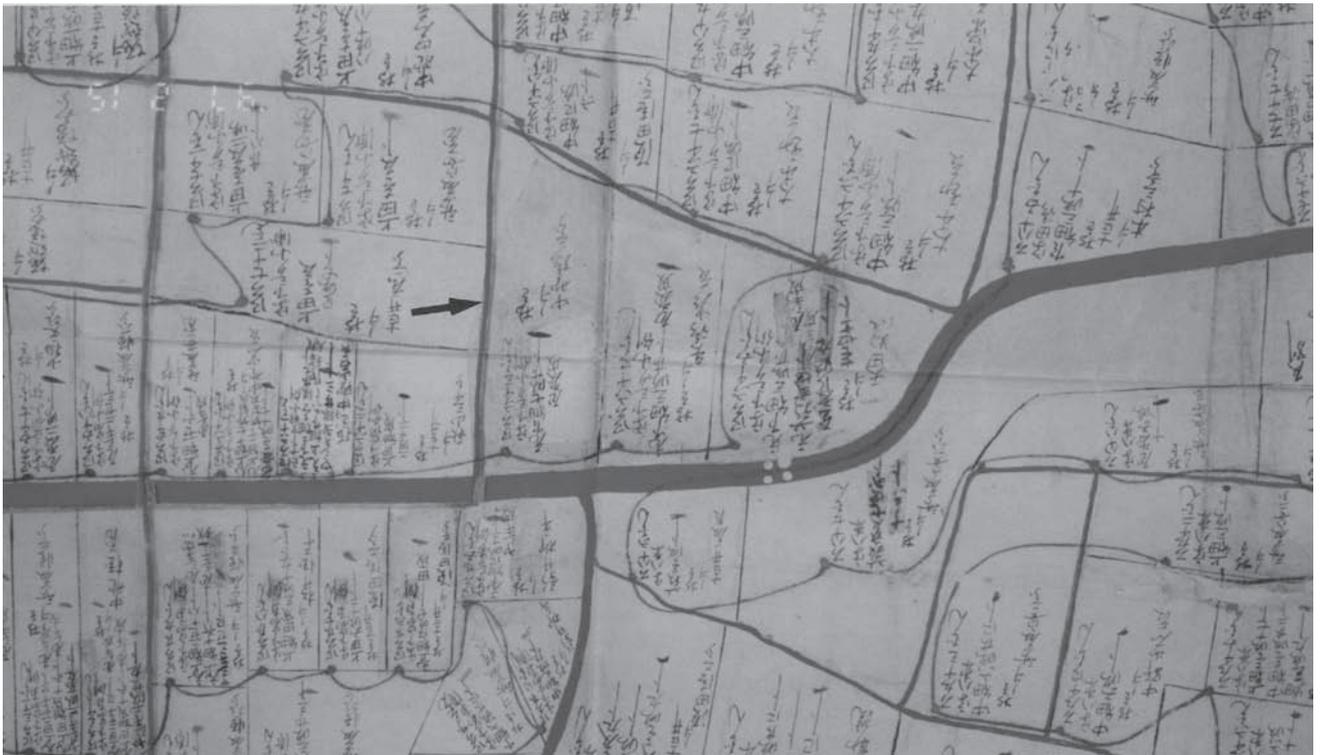
注15文献でこれに類する引札を紹介したが（第50図）、掲載された火打金の鑿銘がすべて同じであり、火打金の形状と配置と判読できる値段に共通性が認められる。このため、両者は無関係ではないと推測される。

15. 大西雅広「火打関係資料拾遺」『研究紀要 27』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009
16. この引札のように川内村の中野屋孫三郎が「中野屋孫三郎兼重女作」という銘を入れていたかどうかは不明である。しかし、『以書付奉願預候』と『諸国道中商人鑑』を見る限り、その可能性は低いようである。
吉井郷土資料館には「中野屋孫三郎兼重女作」と記された暖簾が残されているが、これは別な火打所の暖簾であろう（第51図）。
17. 川内村 中野屋孫三郎の取次店・代理店的な契約をしていた可能性は考え得る。しかし、江戸時代の薬や書籍等の引札では、「賣弘所」、「取次所」とのみ記されるところ「本家」と記している。この点も製作を行っている可能性を疑う根拠のひとつである。ただし、当初は売広所や取次所として始め、販売量の増加に伴って江戸・東京で生産を行っていた可能性は高いと想定している。
松崎亜沙子「明治時代の発火具生産」『火打ち道具の製作 調査と映像記録』江戸東京博物館 2002に明治10年頃に、東京芝明神町の白井慶治郎が「平面二鑿ヲ以テ上州吉井中野屋本家女作ト鑿」したとする史料の紹介と指摘がある。しかし、江戸・東京における吉井火打金生産の開始時期や進出過程など不明な点が多い。



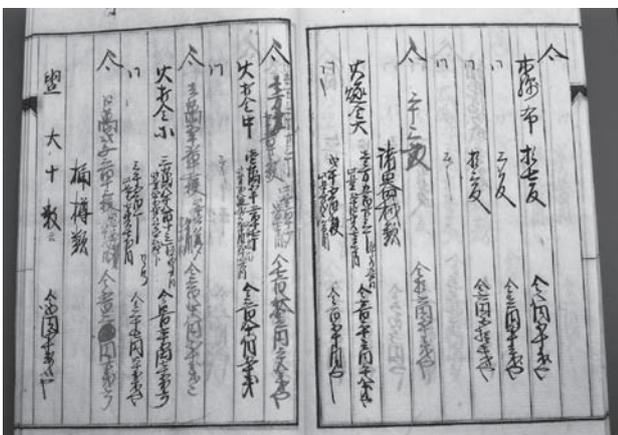
第44図 吉井町都市計画図 1/2に縮尺し1/5000で掲載
中央付近の線で囲んだ範囲が調査区。

第45図 吉井町耕地図(昭和16年頃) 1/2500に拡大
地割りは左の都市計画図とほとんど変わらない。

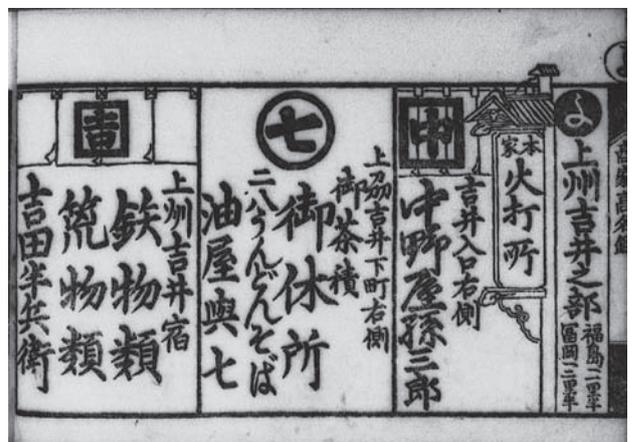


第46図 『多胡郡川内村絵図』調査区付近部分写真 群馬県立文書館蔵

中央付近を左右に貫くのが街道で、短冊状地割りが始まる付近の街道上に宿場の入り口を示すと思われる印がある。矢印先端に無名小河川があり、その右側(東)に「中野孫三郎」屋敷地がある。



第47図 『明治八年七小区物産下調簿』 吉井郷土資料館蔵
右側に吉井町、左側に川内村の生産量と生産額が記される。



第48図 『諸国道中商人鑑』 公益財団法人 三井文庫蔵
上州吉井之部の最初に中野屋孫三郎が記される。



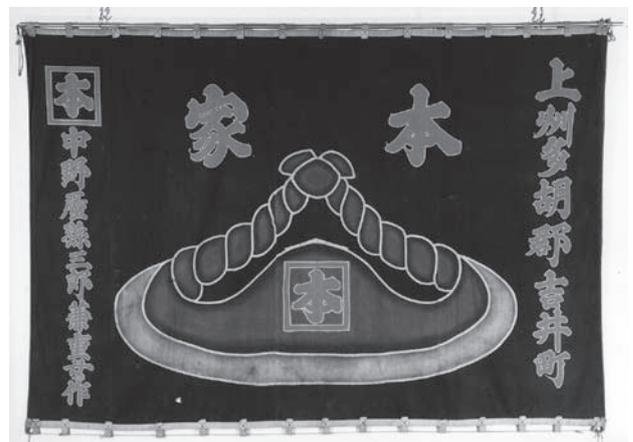
第 49 図 江戸・東京の吉井火打金引札 筆者蔵



第 50 図 江戸・東京の吉井火打金引札

注 13 文献より転載

火打金図の配置と形状が左の引札とほぼ一致し、鑿銘は一致する。この引札によると両国広小路に出張所があったとされる。



第 51 図 吉井火打金の暖簾 吉井郷土資料館蔵



第 52 図 高崎市指定史跡 火打鍛冶職中野孫三郎一族墓

右奥の樹木に隠れて写っていない場所に火打金生産にかかわったと考えられる人物の古い墓石が複数存在しており、形態的に不自然な写真中央の墓石より歴史的には重要であろう。



第 53 図 発掘調査以前の吉井宿入り口付近

手前右側に見える道に沿ってカーブした堀の向こう側が調査区で、中野屋孫三郎の屋敷地だった場所。ここから直線的な街道となり、かつては両側に火打金職人を含む商家などが軒を連ねていた。

遺物観察表

遺物観察表

1号住居

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)				胎土/焼成/色調	成形・整形の特徴	摘要
				口底	高	径	厚			
1	第11図 PL.14	土師器 杯	北壁下西寄り床上11cm 1/2	11.6	—	高	—	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/橙	口縁部やや外反気味。口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	器面摩滅
2	第11図 PL.14	土師器 杯	カマド東脇壁際床直上 完形	10.5	—	高	3.5	細砂粒・粗砂粒/良好/ 橙	やや厚手で底部内面は比較的平坦。口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	器面摩滅
3	第11図 PL.14	土師器 杯	貯蔵穴内とその周辺 完形	10.3	—	高	3.4	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	器面摩滅
4	第11図 PL.14	土師器 杯	カマド東脇壁際床上25 cm完形	10.6	—	高	3.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/橙	口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	
5	第11図 PL.14	土師器 杯	貯蔵穴内床下7cm 完形	11.0	—	高	3.7	細砂粒・粗砂粒・雲母・ 片岩/良好/にぶい橙	口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	産地藤岡か
6	第11図 PL.14	土師器 杯	カマド前床直上 完形	9.9	—	高	3.3	細砂粒・軽石・角閃石/ 良好/にぶい黄橙	やや薄手。口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	
7	第11図 PL.14	土師器 杯	カマド東脇壁際床上3 cm 3/4	12.5	—	高	4.5	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部横撫で、底部整形不明、内面撫で。	外面摩滅顕著
8	第11図	土師器 杯	埋没土 1/4	13.5	—	高	5.0	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部横撫で、底部手持ちへら削り、内面撫で。	底部に煤状の付着物
9	第11図 PL.14	土師器 鉢か	カマド西脇床直上 完形	9.2	—	高	6.6	細砂粒・粗砂粒・軽石・ 角閃石/良好/褐	厚手。口縁部横撫で、体部外面斜のへら削り、内面へら撫で。	
10	第11図 PL.14	土師器 高杯	カマド東脇壁際床直上 ～20cm 脚部一部欠損	11.7	8.5	高	5.0	細砂粒・粗砂粒・雲母・ 片岩/良好/橙	杯部外面横のへら削り、内面撫で後放射状の細くシャープな暗文施文。脚部外面縦のへら削りで面取り。脚柱部内面指先の撫で。	
11	第12図 PL.14	土師器 甕	カマド西脇床直上から 床上5cmに散乱 2/3	22.1	3.6	高胴	37.1 18.7	細砂粒・粗砂粒・角閃石・ 軽石/良好/橙	口縁部横撫で、胴部外面斜のへら削り、内面横のへら撫で。	胴部内面下位に接合痕口縁部外面に輪積み痕
12	第12図 PL.14	土師器 甕	貯蔵穴内床下4～9cm 1/2	23.4	—	高胴	— 18.4	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 良好/赤褐	口縁部横撫で、胴部外面上半縦、下端斜のへら削り、内面横の撫で。	産地藤岡か
13	第12図	土師器 甕	カマド東脇壁際床直上と 周辺 口縁部片	22.9	—	高	—	細砂粒・粗砂粒・角閃石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部横撫で、胴部外面縦のへら削り、内面撫で。	
14	第12図	土師器 甕	北側埋没土 口縁部片	18.0	—	高	—	細砂粒・粗砂粒・片岩/ 良好/にぶい黄橙	口縁部横撫で、胴部外面縦のへら削り、内面横のへら撫で。	産地藤岡か
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)				材質・石材 形態・素材	製作状況・使用状況	摘要
15	第12図 PL.14	金属製 品 耳環	中央床上11cm 完形	径	1.7	厚	0.6 ～ 0.4	銅 金箔貼り	外形ほぼ円形で断面楕円形の金環、全体に銅錆に覆われるが外側の一部と内側に金色がのこり銅芯金箔貼りで見られる。端部はやや斜めに作られているが表面は平滑。内側の金の残りの良いところでは0.3mmほどの幅で軸方向に沿った磨きまたはなでと見られる痕跡が全体的に残っている。また両端部から5mmほどの部位で強めに曲がっている。	3.41 g
16	第12図 PL.14	金属製 品 耳環	北壁下西寄り床ほぼ直上 完形	径	1.9	厚	0.5 ～ 0.4	銅 金箔貼り	外形ほぼ円形で断面円形の細身の金環、内側に金色がのこるが側面全体は銅錆に覆われ銅芯金箔貼りで見られる。端部近くで徐々に細くなり端部では面取りの様に急に細くなる。両端部は平行に作られ表面は平滑。内側の金の残りの良いところでは0.2～0.5mmほどの幅で軸方向に沿った磨きまたはなでと見られる痕跡が残っている。	3.74 g
17	第12図 PL.14	鉄製品 鏝	かまど東脇 ほぼ完存	長厚	4.4 0.1	幅	2.1		無茎の鉄鏝で中央に3mmの円孔があるが矢柄等の痕跡は見られない。右の腸判部分は元で劣化破損する。	3.77 g
18	第12図 PL.14	鉄製品 不詳	土器(9)内に混入 破片	長厚	2.8 0.1	幅	2.1	薄板状鉄製品	厚さ1mmほどの薄板状鉄製品で外形も破損後錆化しているため本来の全体形状は不明。	3.01 g
19	第12図 PL.14	鉄製品 釘か	かまど東脇 両端欠く	長厚	2.4 0.5	幅	0.7		断面線方形角釘と見られるが頭部は角型で特別な形態は見られず先端は破損する。木質の付着は見られない。	1.59 g
20	第12図 PL.14	鉄製品 釘	土器(9)内に混入 先端欠くか	長厚	3.0 0.3	幅	0.3		断面四角の棒状鉄製品で、両端とも破損し全体形状は不明。木質等の付着は見られない。	0.97 g
21	第12図 PL.14	鉄製品 不詳	土器(9)内に混入	長厚	2.1 0.2	幅	0.8		錆膨れにより形状不明。	1.52 g

1号道

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口底	高	幅			
1	第20図 PL.14	肥前磁器 碗	高台一部残存、 体部下位完	口底	— (3.0)	高	—	小碗。外面に染付。(灰白色)	波佐見系。江戸時代。
2	第20図 PL.14	瀬戸・美濃 陶器 小碗	下路面直上 口縁部1/2、底 部完	口底	(6.7) 3.0	高	3.8	器壁はやや厚い。口縁部はやや外反。内面から高台脇に灰釉。(灰白色)	18世紀後半。
3	第20図 PL.14	肥前磁器 小杯	盛土内 口縁部1/4、底 部1/2	口底	(8.4) 3.0	高	4.0	体部から口縁部は直線的に開く。底部内面は丸みを持ち、平坦部を持たない。内面に草花文を描く。(白色)	江戸時代。
4	第20図 PL.14	瀬戸・美濃 陶器 せんじ碗	下路面直上 8 cm 口縁部1/3、高 台部完	口底	(9.7) 4.2	高	5.1	外面口縁部下で稜をなし、口縁部は内傾して立ち上がる。外面屈曲部稜線上は凹線状に窪む。内面から高台脇に貫入の入る灰釉。(淡黄色)	18世紀中頃～後半。
5	第20図 PL.14	瀬戸・美濃 陶器 碗	下路面直上 口縁部1/2、底 部完	口底	(13.6) 6.1	高	5.6	器壁は厚い。高台脇を水平に削る。底部内面広く平坦。体部から口縁部は内湾して延びる。内面から高台脇に銅緑釉。高台脇に釉が溜まり、3カ所滴状となる。(淡黄色)	江戸時代。口縁端部に小剥離。高台端部擦れる。
6	第20図	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢?	東側上面路下12 cm 体部1/5、底部 完	口底	— 9.4	高	—	底部器壁は厚い。体部外面は回転斡削り。内面から高台脇に鉛釉。底部内面に目痕3カ所。(淡黄色)	江戸時代。
7	第20図	肥前陶器 鉢か皿	下路面直上 体部下位1/3、 底部1/2	口底	— 8.4	高	—	高台は高く、高台内の持ちも深い。内面に白土刷毛塗り。内面から高台脇に透明釉。底部内面の釉を蛇ノ目状に拭う。高台端部付近にアルミナ?を塗布。(灰黄褐色)	江戸時代。
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況		摘要
8	第20図 PL.14	銅製品 煙管	東側上面路直下	長厚	5.6 0.7	幅	1.2	煙管の吸い口で木口側がつぶれて楕円形に歪む。	4.23 g
9	第20図 PL.14	銅製品 銭貨	下路面南側溝際 完形	長厚	2.26 0.124	幅	2.2	寛永通宝。新寛永。裏に足の文字が見られるが浅く平坦、両面にヤスリ痕が残る。	2.349 g

1号道側溝

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口底	高	幅			
1	第20図 PL.14	肥前磁器 碗	埋没土 口縁部一部、底 部1/2	口底	(8.8) 4.5	高	6.3	口縁部は5mm残存するのみで形状不明であるが、波状を呈する可能性がある。体部はゆるく多角形状となる。縦1/2程の割れを焼継ぎで補修するが、底部はずれて低い段差を生じている。焼継ぎは白濁し、同様な素材で底部外面に文字が記される。(白色)	焼継ぎ。 19世紀前半～中頃。
2	第20図	肥前磁器 皿	埋没土 3/8	口底	(12.6) —	高	—	口縁部は外反。口縁部から体部内面1重圏線内に1重線による格子状文。透明釉は光沢が強い。(白色)	江戸時代。
3	第20図	肥前磁器 鉢	1/7	口底	— —	高	[4.9]	八角形の鉢で口縁部は外反し端部は小さく内湾。内面は屈曲部を二重線で区画し区画内に草文。外面は屈曲部を線で区画し、区画内に簡略化した文様を描く。(白色)	19世紀前半～中頃。
4	第20図	肥前磁器 鉢	1/7	口底	— —	高	[4.9]	八角形の鉢で口縁部は外反。内面は梅樹文と不明文様を交互に描く。外面は簡略化した文様を染付。(白色)	19世紀前半～中頃。
5	第20図 PL.14	肥前磁器 仏飯器	杯底部完、脚部 1/4	口底	— (5.0)	高	[4.8]	杯底部付近は開く。脚柱部は上部が細い。脚底部は中央部が窪み、接地部のみ無釉。杯部外面に染付。細かい貫入が入る。	17世紀末～18世紀後半。
6	第20図	美濃陶器 片口鉢?	底部1/3	口底	— (10.4)	高	—	器壁は厚い。内面から高台脇に鉛釉。底部内面に目痕1カ所残存。(淡黄色)	江戸時代。
7	第20図 PL.14	製作地不詳 陶器 行平蓋	埋没土 1/6	口底	(16.0) —	高	—	口縁部は水平に開き、天井部は丸みを持つ。天井部内面は透明に近い釉かける。天井部外面、鉄泥による幅広の2重圏線間に飛び鉋。(浅黄色)	近現代。
8	第20図	在地系土器 羽口	埋没土 先端部付近破片	長	[15.2]	径	—	先端部の器厚は1.7cm、基部で内面器表残存の厚さは1.4cmで先端部ほど厚く、先端部ほど内傾が細い可能性がある。断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は褐灰色。先端付近はガラス状となる。先端付近内面は橙色に変色。基部内面は端部から2.5cmまでの器表がない。表面が平滑であることから、挿入時に擦っていると考えられる。器表残存部との間は低い段をなす。(褐灰色)	
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況		摘要
9	第20図 PL.14	銅製品 不詳	北側溝埋没土 皿部ほぼ完存	長厚	9.0 1.1	幅	8.7	薄い銅板を皿状に曲げ、中央に凸側からかまぼこ型の小孔を穿つ。ほぼ円形の外形だが一部2mmほどの突出部で破損した形跡がある。素材表面は銅錆色の部分と銀白色の部分とが有り銅地にメッキ等の可能性もある。	31.19 g
10	第20図 PL.14	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長厚	3.6 2.3	幅	2.3	断面正方形の角釘で頭部から2cmで90°さらに2cmで横に90°さらに3cmで30°鋭角に曲がり1cmで尖り先端となる。木質は見られず使用形態は不明。バックルか。	5.01 g

1号井戸

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口底	高	幅			
1	第22図 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 御質碗か	埋没土 口縁部一部、底 部完	口底	(9.6) 4.6	高	5.7	高台はややシャープ。高台径は大きく器高はやや低い。体部外面に染付が1部残る。内面から体部外面下位に灰釉。貫入が入る。(浅黄色)	18世紀中頃～後半。
2	第22図 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 甕碗	埋没土 1/3	口底	(8.6) (4.6)	高	6.6	体部中位は湾曲し、口縁部は開き気味。高台はやや幅広。口縁部から内面に鉄釉、外面口縁部下から高台内は化粧風に薄く施釉。高台端部の釉は拭う。体部外面に回転施文具による文様。(灰黄色)	18世紀中頃～後半。

遺物観察表

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要
				口底	高	径		
3	第22図 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 刷毛目碗	埋没土 口縁部一部、底 部3/4	口底 (13.0) 4.7	高	5.9	高台脇は稜をなし、体部は開き、口縁部は直立気味。内外面に白土刷毛塗り。内面から体部外面下位に灰釉。貫入が入る。(灰黄色)	
4	第22図 PL.15	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋没土 1/3	口底 (11.6) —	高	[5.1]	体部下位で内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面に灰釉。細かい貫入が入る。(灰色)	17世紀後半～ 18世紀前半。
5	第22図 PL.15	京・信楽系 陶器 碗	埋没土 口縁部2/3欠	口底 (9.2) 3.8	高	5.1	体部は開き、口縁部下は稜をなして内傾気味に立ち上がる。口縁部は外湾。高台内は挟り込む。残存部に施文はない。内面から高台脇に透明釉。細かい貫入が入る。(浅黄色)	18世紀中頃～ 後半。
6	第22図 PL.15	肥前磁器 小碗	埋没土 口縁部1/2欠	口底 7.4 3.0	高	3.6	口縁部外面に簡略化した染付を2方に施す。図示したのは主文様で、裏文様は「J」状の文様を一箇所染め付けるのみである。(灰白色)	
7	第22図 PL.15	肥前磁器 碗	埋没土 口縁部1/4、底 部3/4	口底 (9.2) 3.9	高	5.3	底部器壁は厚い。体部から口縁部外面に雪輪梅樹文。高台内に渦福字銘。呉須の発色は良好。下半に不規則な貫入が入る。(灰白色)	波佐見系。18 世紀中頃～後 半。
8	第22図 PL.15	肥前磁器 碗	埋没土 口縁部1/3欠	口底 (9.4) 4.2	高	5.0	底部器壁は厚い。体部から口縁部外面に雪輪梅樹か雪輪草花文。高台内不明銘。(灰白色)	波佐見系。18 世紀中頃～後 半。
9	第22図 PL.15	肥前磁器 丸碗	埋没土 底部欠	口底 8.5 —	高	[5.0]	体部外面に草花を横並びに染め付ける。口縁部内面にやや簡略化した四方摺文。(白色)	18世紀中頃～ 後半。
10	第22図 PL.15	肥前磁器 筒形碗	埋没土 口縁部1/4、底 部完	口底 (7.3) 3.3	高	6.0	口径はやや小さく、高台脇はやや上方に開く。体部から口縁部外面に花卉文。高台脇には葉のような染付を一对描く。口縁部内面はやや簡略化した四方摺文、底部内面は1重圏線内にコンニャク印判の五弁花。(白色)	18世紀中頃～ 後半。
11	第22図 PL.15	肥前磁器 筒形碗	埋没土 ほぼ完	口底 8.6 4.2	高	6.3	口径は大きく、高台脇は水平に開く。体部から口縁部外面は花状の文様を白抜きにする。高台脇に一对の染付。口縁部内面に四方摺文。底部内面は1重圏線内にコンニャク印判による五弁花。(白色)	18世紀中頃～ 後半。
12	第22図 PL.15	瀬戸・美濃 磁器 端反碗	埋没土 1/8	口底 (10.0) —	高	[5.0]	外面は縦線間にウサギ状の染付。(白色)	近代。
13	第22図 PL.15	美濃陶器 摺り絵皿	埋没土 1/8	口底 (12.8) (8.0)	高	3.0	底部内面周縁に低い段差が廻る。底部内面に鉄絵具による型紙摺り。内面から体部外面下位に灰釉。(淡黄色)	18世紀。
14	第22図 PL.15	美濃陶器 摺り絵皿	埋没土 口縁部1/2欠	口底 12.0 5.7	高	3.0～ 3.2	口縁部付近は直立気味。底部内面に呉須による型紙摺り。高台端部を除く全面に灰釉。貫入が入る。(灰白色)	18世紀前半～ 中頃か。
15	第22図 PL.15	肥前磁器 皿	埋没土 口縁部一部、底 部完	口底 (13.3) 7.0	高	3.4	外面は無文。体部内面は簡略化した唐草文。見込み五弁花はコンニャク判。釉剥き部にアルミナを塗布。高台端部を除き施釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。(灰白色)	18世紀後半～ 19世紀初頭。
16	第22図 PL.15	肥前磁器 皿	埋没土 口縁部1/8、底 部1/4	口底 (12.8) (4.8)	高	3.6	底部周縁の2重圏線外に2重線で格子状文。高台端部を除き施釉。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。不規則な貫入入る。(灰白色)	17世紀末～ 18世紀中頃。
17	第22図 PL.15	肥前磁器 皿	埋没土 口縁部1/2、底 部2/3	口底 14.3 8.4	高	3.7	口縁部は輪花につくる。底部内面周縁の2重圏線外に唐草文。見込み五弁花文。体部外面に唐草文。高台脇の1重圏線と高台外2重圏線間に小さい不明文様2カ所残存。高台内1重圏線内、2重角内に「筒江」銘か。高台内ハリ支え1カ所で、支えがない部分が変形して下がる。(白色)	17世紀末～ 18世紀中頃。
18	第22図 PL.15	肥前磁器 皿	埋没土 口縁部一部欠	口底 13.3 7.8	高	2.9	底部内面周縁2重圏線外に格子状文と花卉文。見込み五弁花。口鏝。体部外面に唐草文。高台内1重圏線内に「大明年製」崩れ銘。(白色)	18世紀前半～ 中頃。
19	第22図 PL.15	肥前磁器 青磁染付皿	埋没土 口縁部一部欠	口底 13.7 8.4	高	4.5	外面に青磁釉。蛇ノ目凹形高台。底部内面2重圏線内に山水文。高台内二重角内に渦福字銘。(白色)	18世紀。
20	第23図 PL.16	肥前磁器 皿	中央寄り確認面 下128cm 口縁部1/4、底 部1/2	口底 (13.2) 7.4	高	4.1	底部内面周縁の2重圏線外に簡略化した文様を染付。見込み五弁花コンニャク判。体部外面に細く簡略化した唐草文。高台内1重圏線内に不明銘。(灰白色)	18世紀中頃～ 19世紀初頭。 波佐見系。
21	第23図 PL.16	肥前磁器 皿	埋没土 底部1/7	口底 — (12.0)	高	—	内面型紙による文様内に濃みを入れる。高台内に「壽」押印。高台内中央に浅い凹線が1条認められるが、意図的か否かは不明。(白色)	明治12年～ 38年。有田の 精磁會社製。
22	第23図 PL.16	肥前磁器 鉢	埋没土 口縁部片	口底 — —	高	—	口縁の推定直径は約15cm。口縁部は外反し、内面に笹文を染付。(白色)	焼継ぎ。19世 紀前半～中 頃。
23	第23図 PL.16	肥前磁器 重鉢	埋没土 1/7	口底 (11.0) (10.3)	高	6.0	底部外面を除いて施釉後に口縁部上面から端部内面の釉を剥ぐ。外面に染付。(白色)	江戸時代。
24	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 花瓶	埋没土 底部欠	口底 — —	高	[8.7]	当初の口縁部は欠損するが、端部を擦って平坦に仕上げられており、欠損後に再使用した可能性が高い。耳は円形に巻いた粘土紐を貼り付ける。外面体部中位以下は光沢のある錆釉、口縁部内面から体部中位に灰釉。(灰白色)	灰釉には貫入 が入る。
25	第23図 PL.16	肥前磁器 花瓶	埋没土 口縁部2/3欠	口底 (7.0) 4.5	高	8.5	頸部から口縁部はラッパ状に開き、端部付近で受け口状にする。底部外面を削り込んで高台状にする。体部外面に簡略化した東屋山水文。頸部内面から高台外面に透明釉。(灰白色)	波佐見系。
26	第23図 PL.16	製作地不詳 磁器 仏花瓶	埋没土 1/2	口底 8.4 —	高	[10.5]	赤絵。葉を緑、唐草状の文様と蓮の花、圏線を赤の上絵で描く。頸部裏面に赤の上絵具による「吉井・・・」の文字。取っ手表面と肩部圏線間は浅黄橙色の上絵具で塗る。(白色)	近現代。
27	第23図 PL.16	製作地不詳 陶器 壁掛け花瓶	埋没土 口縁部の一部と 底部欠	口底 — —	高	[12.6]	断面中央は灰白色。器表付近は灰色、無釉部器表は褐色。横断面は蒲鉾形を呈し、裏面は平坦。表面との接合部は面取り。裏面には壁掛け穴を開ける。樹木にとまった蝉を表現。表面は樹木の木肌を細かい凹凸で表現。2カ所には古枝痕も表現し、にぶい赤褐色の鉄泥で塗る。蝉は黒褐色の鉄泥で塗る。内面は鉄釉。裏面の口縁部は直線的であるが、表面は節穴状に窪ませる。(灰白色)	江戸時代以 降。

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要
				口底	高	径		
28	第23図	製作地不詳 陶器 灯火皿	埋没土 1/7	口底 (8.4) (3.5)	高	1.7	外面口縁部以下回転篋削り。内面から口縁部外面に灰釉。	江戸時代以降。
29	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 ひょうそく	埋没土 口縁部1部、体 部完	口底 (5.2) —	高	[4.7]	脚部欠損。口縁部は内側に巻き込むように内湾。底部内面に灯芯立てを貼り付け、上部から底部まで切り込みを入れる。全面に錆色の鉄釉。(灰白色)	18世紀後半～ 19世紀前半。
30	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 灯火受台	埋没土 口縁部欠損	口底 — 4.3	高	4.9	鉛釉施釉後に高台周縁部の釉を拭う。受け部口縁端部上面は無釉であるが、1部に釉が溜まり、外面に流れる。高台の1部に溶着痕残る。(灰黄色)	18世紀中頃。
31	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 香炉	埋没土 1/4	口底 (10.8) —	高	[5.1]	口縁端部上面は内傾し、内面端部は稜をなして突き出る。体部外面の一部に鑿状工具による松状文。口縁部内面から体部外面に鉛釉。体部内面上位は煤状物付着により黒い。口縁端部外面に小剥離3カ所。(淡黄色)	18世紀中頃。
32	第23図	肥前陶器 三島手鉢	埋没土 口縁部片	口底 — —	高	—	内面文様の窪みに白土を入れる。白土が入らない部分やほみ出しは多い。内から体部外面中位に透明釉。(にぶい橙色)	江戸時代。
33	第23図 PL.16	製作地不詳 陶器 瓶類	埋没土 底部1/4	口底 — —	高	—	高台欠損。高台脇は回転篋削り。外面は高台脇まで灰釉。内面は無釉。(淡黄色)	江戸時代。
34	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	埋没土 口縁部1/3、底 部完	口底 (18.2) 8.3	高	9.3	口縁部外面の稜上に凹線。口縁端部上面は丸みを持ち、内面端部は突帯状に突き出る。片口部欠損。内面から高台脇に黄釉。底部内面に目痕3カ所。(淡黄色)	18世紀後半。
35	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	埋没土 口縁部一部、底 部1/2	口底 (17.9) (8.8)	高	8.8	器高に比して口径大きい。口縁部はやや内湾。内面から高台脇に灰釉。底部内面に目痕1カ所残る。(淡黄色)	江戸時代。
36	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 片口鉢	埋没土 1/3	口底 — (8.9)	高	[7.6]	内面から高台脇に灰釉。底部内面に目痕2カ所。(灰白色)	江戸時代。
37	第23図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 練鉢	埋没土 1/3	口底 — 11.2	高	[10.0]	中型の練鉢。体部下位はゆるい丸みを持ち、体部上位は垂直に近く立ち上がる。底部内面に直径4cm前後の目痕2カ所残る。内面から体部外面中位に灰釉。体部外面上位の一部に銅緑釉が認められ、口縁部外面に流したと推定される。(灰白色)	18世紀後半～ 19世紀前半。
38	第24図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋没土 体部下位以下欠	口底 3.9 —	高	[17.2]	外面は体部中位以下回転篋削り。口縁部は外面に折り返して肥厚させる。頸部内面から外面に光沢の強い灰釉に近い鉛釉。体部は直線的に立ち上がる。(灰白色)	18世紀後半～ 19世紀前半。
39	第24図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 徳利	埋没土 肩部以上欠	口底 — 7.0	高	[16.0]	体部の張りは弱く、寸胴形に近い。外面は黄釉で体部下位以下の釉を拭う。(淡黄色)	18世紀中頃～ 19世紀前半。
40	第24図 PL.16	瀬戸陶器 すり鉢	埋没土 底部1/2	口底 — (13.2)	高	—	体部外面は回転篋削り。内面は12本一単位のすり目を深く施す。底部内面のすり目は直線の後に、周囲に円を描くように施す。底部右回転糸切無調整。全面錆釉。使用頻度が少なく内面器表は平滑でないが、底部外面周縁の釉は摩滅。(淡黄色)	江戸時代。
41	第24図 PL.16	瀬戸陶器 すり鉢	埋没土 口縁部から体部 2/3、底部1/3	口底 31.5 (13.3)	高	12.8	口縁部は下位で外反した後に立ち上がる。体部外面は上位以下回転篋削り。底部右回転糸切無調整。内面は23本一単位のすり目を9カ所施す。体部内面下位以下の器表は摩滅し、中位は平滑で一部の器表摩滅。底部外面周縁の器表摩滅。口縁端部器表は部分的に摩滅。錆釉施釉後、外面体部下位以下を拭う。(淡黄色)	18世紀後半。
42	第24図 PL.16	瀬戸・美濃 陶器 練り鉢	埋没土 1/8	口底 (34.0) —	高	[12.4]	体部から口縁部は内湾。口縁端部は内外に張り出す。口縁端部上面は丸みを持つ。外面口縁部下に浅い凹線1条。内面から体部外面下位に柿釉。(にぶい黄橙色)	江戸時代。
43	第24図	瀬戸・美濃 陶器 瓶掛	口縁部片	口底 — —	高	—	口縁部は直角に開く。頸部外面に押印文。口縁部内面から外面に銅緑釉。貫入が入る。ルス釉製品。(淡黄色)	江戸時代。
44	第24図 PL.16	在地系土器 火鉢?	西寄り確認面下 72cm 体部から底部片	口底 — —	高	—	断面中央は暗灰色、器表付近は明褐色、内面器表は褐色、外面器表は黒褐色。体部はほぼ直立し、筒形の火鉢と推定される。外面は粗い磨きで部分的に光沢を持つ。底部に低い円筒形の脚を貼り付ける。脚は1カ所残存。脚端部は使用により器表摩滅。(黒褐・褐灰色)	江戸時代以降。
45	第24図 PL.16	在地系土器 焙烙	西寄り確認面下 81cm 1/4	口底 (37.2) (35.0)	高	5.2	断面はにぶい黄橙色、器表は黒褐色。底部外面はやや色が薄い。内面に内耳1カ所残存。口縁端部上面は窪む。体部外面下端は篋削り。(黒褐色)	江戸時代。
46	第24図 PL.17	在地系土器 焙烙	埋没土 1/4	口底 (38.6) (35.0)	高	5.2	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、器表は黒褐色。底部外面は灰白色。内耳1カ所残存。焼成後に直径約5mmの補修用円孔を底部に開ける。円孔は3カ所残存。底部内面に菊花状押印1カ所。体部外面下端は篋削り。(黒褐色)	江戸時代。
47	第25図 PL.17	在地系土器 羽口	埋没土 西寄り確認面下 74cm 一部欠	長 [20.7]	径	6.32～6.37 (基部)	現存長は20.7cm、基部外径は63.2mm～63.7mm、基部内径は36.0mm～36.1mm。基部側から10.5cm付近で段を成し、先端側の内径が細くなる。先端側欠損部内径28.4mm。ガラス化した部分は欠損。内面器表は滑らかであるが、皺状亀裂が明瞭に残る。外面器表は全面に細かな凹凸を残す。(褐灰色)	
48	第25図 PL.17	在地系土器 羽口	埋没土 西確認面下98cm 先端と基部1/2 欠	長 [22.0]	径	6.12～6.26 (中央)	基部側残存部の内径33.8mm。基部から11.2cm付近で段差をつけて内径を細くし、先端側残存部内径は28.0mmとなる。先端側はガラス化する付近から欠損。基部内面は端部から9mm幅で器表が摩滅して平滑となり、装着時に調整した可能性がある。内面器表は焙烙底部と同様な痕跡を残し、滑らかには仕上げない。また、外面器表も細かな凹凸を全面に残す。(灰～黒色)	

遺物観察表

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				長	径	幅			
49	第25図	在地系土器 羽口	埋没土 南西際確認面下 82cm 先端一部と基部 1/2欠	長	[21.6]	径	6.06 ~ 6.14 (残部)	断面中央は黒色、器表付近は淡黄色、器表は灰色～黒色。基部側内径は37.2mm。基部から9.7cm付近で段をつくり、先端側は内径が26.2mm～28.1mmと細くなる。先端は設置時の下部が欠損。内面器表は滑らかであるが、縦方向の皺状亀裂が残る。外面器表は細かな凹凸を全面に残す。(灰～黒色)	
50	第25図 PL.17	在地系土器 羽口	埋没土 西際確認面下96 cm 先端付近欠	長	[13.8]	径	5.66 ~ 6.06 (基部)	基部内径は33.8 ~ 35.5mm。残存部は短く内面の段差も認められないが、残存部先端側は灰白色から淡黄色となり、残存部外面側は赤褐色に変色する。このため、使用時に短い状態であったと推定される。内外面共に焙烙底部と同様な皺状亀裂を全面に残す。(淡黄～黒色)	
51	第25図 PL.17	在地系土器 羽口	埋没土 両端部欠	長	[14.7]	径	6.41 ~ 6.58 (中央)	先端側内径は28.2mm～30.7mm、基部側内径は31.8mmで内面に段差は認められない。内面は滑らかで縦方向の皺状亀裂が残る。外面は縦方向の筋状痕を全面に残す。先端側はガラス化した部分がすべて欠損。本遺跡出土羽口の中では最も太い部類に入る。(浅黄色)	
52	第25図 PL.17	在地系土器 羽口	埋没土 先端部1/2欠	長	[19.8]	径	5.83 ~ 5.92 (基部)	基部内径は33.3mm。内面は基部から12.0cm～14.4cm間で波打つような形状で器厚を増し、内径が細くなる。先端部は2/3が欠損するため内径は不明。基部器厚は9.9mm～14.5mmで先端部器厚は19.2mm。基部外径から先端部内径を推定すると約20mmとなる。先端部は設置時の下部が欠損。内面器表は焙烙底部と同様な皺状亀裂を残す。外面器表も細かい凹凸を残し、縦方向の細い筋状痕をなす。(黒色)	
53	第25図	在地系土器 羽口	埋没土 南西寄り確認面 下54cm 先端側片	長	[14.0]	径	—	基部側内面は段差があり、基部側器厚は14.4mm、先端側器厚は17.1mmと先端部側の気厚が増し、内径を細くする。内面器表は拓本で示したように皺状亀裂が残るが、段差部分は皺状亀裂が消えている。外面器表は細かい凹凸を残す。(にぶい橙・暗灰色)	
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況	摘要	
54	第26図 PL.17	砥石	埋没土 完形	長厚	13.0 2.7	幅	4.4 ~ 2.6	両小口と右側面に櫛刃状鑿痕が残り、確実な長さが判明する。主要砥面は一方の小口に向かって傾斜すると共に右側面に傾く。裏面も表面同様な傾斜であるが、使用頻度が少ない。左側面は整形痕が消える程度の使用。	砥沢石か。
55	第26図 PL.17	砥石	埋没土 完形	長厚	9.4 1.7 ~ 2.5	幅	3.1	砥面は表面1面のみである。両小口は平滑で整形痕が残らない。他の3面は未使用で部分的に櫛刃状鑿痕が残る。	砥沢石か。
56	第26図 PL.17	砥石	埋没土 2/3か	長厚	[9.1] 2.6	幅	3.6 ~ 3.9	狭い面の2面(表裏)が主要砥面。一方の小口は櫛刃状鑿痕が残り、製作時の形状を保つ。他方は欠損するが、欠損部の凸部が擦れて平滑となっており、欠損状態で使用された可能性が高い。左右側面は、面が窪まない程度に使用される。	砥沢石か。
57	第26図 PL.17	銅製品 煙管	埋没土 1/2	長厚	3.4 1.4	幅	1.4	煙管一部破損するが、破損部分の形状から雁首の肩の部分の破片とみられる。肩には輪を積み重ねたような五段の段が見られる。	8.38 g
58	第26図 PL.17	銅製品 煙管	埋没土 ほぼ完形	長厚	5.8 1.1	幅	1.1	煙管吸い口で肩付近で錆化した後に破損し段差を生じている、ロウ付け痕が残るが他に特別な装飾・メッキ等の痕跡は確認できない。	3.76 g
59	第26図 PL.17	鉄製品 釘	埋没土 先端部を欠く	長厚	6.2 0.12	幅	0.5	泥・砂巻き込み錆化し脆弱、断面正方形の角釘で頭部は角形、木質の付着は見られない。	4.93 g
60	第26図 PL.17	鉄製品 釘	埋没土 先端部欠く	長厚	4.7 0.5	幅	0.3	泥・砂巻き込み錆化し脆弱、断面正方形の角釘で頭部は角形、一部に木質の付着が見られるが残存は少なく材の詳細は不明。	1.94 g。一部 木質残存
61 A	第26図 PL.17	銅製品 銭貨	埋没土 完形	長厚	2.38 0.14	幅	2.38	寛永通宝。新寛永。裏面にヤスリ痕が残るほか僅かな鋳溜りが見られる。分離後の銅銭3枚のうちの1枚。	3.26 g
61 B	第26図 PL.17	銅製品 銭貨	埋没土 完形	長厚	2.33 0.116	幅	2.41	寛永通宝。新寛永。表面に僅かな鋳溜り有り。分離後の銅銭3枚のうちの1枚。	2.14 g

工房跡のピット(4号ピット)

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況	摘要	
1	第31図 PL.17	鉄製品 釘	中～下層	長厚	5.2 0.3	幅	1.1	断面ほぼ正方形の角釘で先端部は破損、頭部はたたき横に広くのばしたのち折り曲げる。	2.6 g
2	第31図 PL.17	鉄製品 不詳	中～下層	長厚	9.7 0.8	幅	1.6	断面細い台形の棒鉄製品で一端は破損する、器種や用途を特定しうる形状・特徴は把握できない。鉄素材または未成品の可能性あり。	34.33 g

土坑

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
1	第35図 PL.17	美濃陶器 灯火皿	1号土坑 3/4	口底	10.7 4.8	高	2.6	体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して斜め上方に開く。体部外面は回転鑿削り。口縁部に粘土紐を1カ所貼り付け。碁基底状。内面から口縁部外面に胎釉。無釉部に油状黒色物付着。(淡黄色)	18世紀中頃。
2	第35図 PL.17	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	1号土坑 口縁部一部欠	口底	9.4 4.5	高	1.7 ~ 2.1	外面口縁部下から底部外面は回転鑿削り。内面の受け部は低い。受け部に1カ所切り込みを入れる。全面錆釉施釉後に外面口縁部以下を拭う。受け部底部と体部外面に重ね焼き痕残る。(灰色)	19世紀前半。
3	第35図	在地系土器 羽口	12号土坑 先端部片	長	[3.9]	径	—	羽口先端部で外面はガラス状を呈する。(黄橙～にぶい赤褐色)	
4	第35図	肥前磁器 碗	13号土坑 底部	口底	— 4.1	高	—	蛇ノ目釉剥ぎ。高台内1重圏線。蛇ノ目釉剥ぎ部に砂?を塗布。高台底部に砂?付着。(灰白色)	
5	第35図 PL.17	製作地不詳 陶器 徳利?	13号土坑 底部	口底	— 7.8	高	—	底部は高台内を挟る。外面鉄釉施釉後に高台底部のみ拭う。内面は無釉。底部内面中央のみ降灰が認められ、頭部や口縁部径が小さい器種と考えられる。(にぶい黄褐色)	江戸時代か。
6	第35図 PL.17	製作地不詳 陶器 植木鉢	13号土坑 破片	口底	—	高	4.4	深さ2.9cmの浅く方形を呈する植木鉢。コーナーに「L」字形の高台を貼り付ける。高台部を除き透明釉を施し、口縁部上面付近に青釉をかける。外面下端には青釉が帯状に溜まる。(浅黄橙色)	近現代か。

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口底	高	径			
7	第35図 PL.17	常滑?陶器 甕	13号土坑 1/3	口底 —	(62.0)	高	[23.4]	断面中央は暗赤灰色、器表は赤褐色。口縁部は外方に厚く張り出す。張り出し部上面は外傾。(赤褐色)	常滑の赤物か。
8	第35図 PL.17	肥前磁器 碗	15号土坑 2/3	口底 6.5 3.2	—	高	5.0	腰は張り、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部はやや内傾。外面に1対の土筆状文が2カ所残存し、位置関係から3カ所に描かれたと推定される。(白色)	18世紀後半～ 19世紀初頭。
9	第35図	肥前磁器 皿か	15号土坑 1/7	口底 —	(12.3)	高	—	高台内1重圏線。釉に不規則な貫入。 (白色)	江戸時代。
10	第36図 PL.17	肥前磁器 碗	17号土坑 1/3	口底 (10.1) (4.0)	—	高	4.5	高台は低く、体部から口縁部は内湾。(白色)	18世紀初頭～ 中頃。
11	第36図 PL.17	瀬戸・美濃? 陶器 水滴	17号土坑 1/2か	口底 —	—	高	3.1	上面は型押しで作り出し、内面には指押さえ痕が残る。底部は無釉で粘土板貼り付け。左手に軍配を持ち、突き出たお腹や福耳から、布袋様をかたどった水滴であろう。底部以外の外面に灰釉、軍配の一部に銅緑釉。軍配上部に円孔1カ所残存。(灰白色)	江戸時代。
12	第36図	信楽?陶器 灯火皿	17号土坑 1/6	口底 (11.8) 4.4	—	高	2.3	無釉部の器表はにぶい黄橙色。口縁部下外面は回転篋削り。口縁部外面は轆轤目により僅かに窪む。内面に3条の櫛目文。口縁部付近から内面に細かい貫入が入る灰釉。(浅黄色)	19世紀。
13	第36図	在地系土器 焙烙	18号土坑 口縁部一部、底部 1/8	口底 (34.6) (32.0)	—	高	6.3	断面中央は黒色、器表付近は灰白色、底部内面以外の器表は暗灰色。底部内面器表は灰白色。体部外面下半の皸状痕はほとんど撫で消す。(暗灰色)	江戸時代。
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況	摘要	
				長厚	幅	厚			
14	第36図 PL.18	砥石	12号土坑 1/2	長厚 —	[6.7] 1.4	幅	2.2	現状で厚さが2.5cmと薄い、当初の厚さは不明。残存する小口と両側面、裏面の4面に櫛目状皸痕残る。主要砥面は表面であるが、薄いわりに砥面の窪みが小さい。	砥沢石か。
15	第36図 PL.18	鉄製品 鷹口	12号土坑 ほぼ完存	長厚 —	8.3 1	幅	6.0	小型の鷹口と見られる鉄製品。本体の厚さは約1cmで先端でトビの嘴状に狭くなるが刃の様にはとがらない。はばきが斜めに接する形で錆付き柄の木質等の痕跡も確認できない。茎は凹型で終わっているが錆化しており本来形状かは不明。	63.72g
16	第36図 PL.18	鉄製品 火打金	13号土坑 ほぼ完存	長厚 —	4.4 0.6	幅	2.4	携帯用火打金。いわゆる「ねじり鎌」や「ひねり鎌」と呼ばれる形状の製品。	8.57g。近代 遺物と共に出土。
17	第36図 PL.18	鉄製品 不詳	13号土坑 完形か	長厚 —	10.2 0.7	幅	1.8	丸い棒状の鉄製品が二本並んだ形で錆化、一方の端部は錆で劣化し形状は不明瞭だが二本は一体の鉄製品の可能性も有る。	41.73g
18	第36図 PL.18	鉄製品 釘	17号土坑 先端部を欠く	長厚 —	5.6 0.6	幅	0.5	断面正方形の角釘で先端部は破損し頭部は角形、木質の付着は見られない。	7.62g

5号溝

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況	摘要	
				口底	高	径			
1	第37図 PL.18	鉄製品 釘	埋没土	口底 —	3.6 0.4	高	0.4	頭部ループ状で先は僅かに曲がる角釘先端部は欠損。	2.75g

石垣脇

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口底	高	径			
1	第39図	瀬戸・美濃 陶器 腰錆碗	1/4	口底 —	(9.3)	高	[3.8]	口縁部外面に螺旋状の凹線。内面から口縁部外面に灰釉。体部外面以下に鉄釉。灰釉に不規則な貫入。 (灰白色)	18世紀後半～ 19世紀前半。
2	第39図	京・信楽系 陶器 碗	1/7	口底 —	(8.6)	高	[3.2]	口縁部下で屈曲し、口縁部は外湾して立ち上がる。屈曲部外面は明瞭な稜をなし、内面は凹線状に窪む。口縁部内面中位は稜をなす。口縁部外面に鉄絵。(淡黄色)	
3	第39図	肥前磁器 碗	口縁部一部、底部 1/4	口底 (8.1) (2.6)	—	高	3.9	高台は低く、径は小さい。体部は半球状に湾曲し、口縁部は直立気味。外面に笹か竹を描く。釉には不規則な貫入が入る。	18世紀前半～ 中頃。
4	第39図 PL.18	肥前磁器 碗	1/2	口底 8.6 3.1	—	高	5.4	高台は小さく、腰は張り体部は丸みを持つ。外面2カ所に無文残存。底部内面には線描きの文様。無文は配置から3カ所と考えられる。(白色)	18世紀後半～ 19世紀初頭。
5	第39図	肥前磁器 碗	口縁部一部、底部 1/8底部完	口底 (11.5) 4.0	—	高	6.0	大ぶりの碗。体部から口縁部外面に雪輪草花文。高台内1重圏線内に不明銘。(灰白色)	17世紀末～ 18世紀中頃。
6	第39図 PL.18	肥前磁器 皿	口縁部1/3、底部 1/2	口底 (13.3) 8.2	—	高	3.8	外面は残存部に1カ所不明文様、高台脇に1重圏線。口縁部から体部内面に笹文。底部内面中央は1重圏線内に笹文。蛇ノ目凹形高台。(白色)	19世紀前半～ 中頃。
7	第39図 PL.18	美濃陶器 水注	体部1/3、取っ 手欠	口底 —	9.1 5.8	高	10.5～ 10.7	口縁部内面に蓋受け。体部外面に鉄絵具による摺り絵。口縁部上面から高台脇に灰釉。貫入が入る。(灰白色)	17世紀後半～ 18世紀後半。
8	第39図 PL.18	在地系土器 羽口	先端付近欠	長 —	[22.5]	径	5.71～5.88 (基部)	基部内径37.1mm～36.0mm。図化できないが、送風穴基部から約10cm奥に段差があり、基部から18.5cmの場所で、内径は27.3mmと約1cm径が細くなる。下部の器表は大きく欠損。断面は浅黄褐色、器表は黒色。先端付近外面は、端部から褐色～黒色、橙色、浅黄褐色に変色。先端付近内面は橙色に変色。(黒色)	
9	第39図 PL.18	在地系土器 羽口	先端付近欠	長 —	[13.2]	径	6.49～7.24 (基部)	断面中央は褐色、器表付近は褐色。器表は褐色。基部内径33.2mm～36.2mm。他の羽口に比して器壁が厚いため外径は太いが内傾は細い。外面は丁寧に撫でられ、器表は滑らか。基部外面は横方向の横撫で状の痕跡が残る。内面器表の皸状痕も粗く少ない。胎土も他に比して砂を多く含む。基部から約7cm以遠の外面は浅黄褐色、11cm以遠は褐色に変色。褐色部の断面から内面器表は明赤褐色を呈しており、短い羽口であったと考えられる。(褐色)	

遺物観察表

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要
				長	径	高		
10	第39図	在地系土器 羽口	基部片	長	[11.8]	径	—	基部は全週せず、内面の器表は1部残存。断面は灰色、器表付近は灰白色、器表は黒褐色。外面器表の全面に細かい凹凸があり、内面器表の全面には皺状痕が認められる。

その他

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				長	径	高			
1	第41図	肥前磁器か 小杯	西側調査区 口縁部一部、底 部1/3	口 底	(6.8) (3.0)	高	4.4	外面手描きによる染付。山に鹿の文様。(白色)	近現代。
2	第41図 PL.18	肥前磁器 碗	口縁部1/4、底 部3/4	口 底	(6.6) 3.3	高	5.4	内面と高台内に透明釉。外面に鉄分を含む明黄褐色の灰釉。高台外面の釉は薄く、錆色に発色。	波佐見系。19世紀中頃～後半か。
3	第41図	美濃陶器 鍔碗	西側調査区 1/4	口 底	(8.4) —	高	[3.9]	体部外面に回転施文具による施文。口縁部から内面に鉄釉、体部外面に鉄分を含む釉を鉄化粧状に薄くかける。器高はやや低い。(灰色)	18世紀後半～19世紀前半。
4	第41図 PL.18	肥前磁器 筒形碗	西側調査区 1/3	口 底	(7.5) —	高	[4.8]	焼成不良のため素地と内面器表は灰色を呈する。青磁染付。口縁部内面は格子状の四方襷文。底部内面周縁1条の圏線。(灰色)	18世紀後半。
5	第41図	肥前磁器 丸碗	西側調査区 1/4	口 底	(8.4) —	高	[5.1]	外面に竹と筍文。口縁部内面に1条、底部周縁に2条の圏線。(白色)	18世紀後半～19世紀初頭。
6	第41図	肥前磁器 丸碗	西側調査区 底部、高台2/3 欠	口 底	— (3.8)	高	[3.0]	底部器壁厚い。外面に矢羽根文。底部内面1重圏線内に不明銘。(白色)	18世紀後半～19世紀初頭。
7	第41図 PL.18	瀬戸・美濃 磁器 広束碗	東側調査区 口縁部1/7、底 部完	口 底	(9.6) 5.0	高	5.2	高台と器高は低い。外面に草文と山?を染付。口縁部内面に2重圏線。底部1重圏線内に帆掛船か。器表の光沢は強い。(白色)	19世紀中頃。
8	第41図 PL.18	肥前磁器 端反碗	東側調査区 口縁部1/3、底 部1/2	口 底	(11.8) 4.2	高	5.2	腰は張り、口縁部は外反。外面は2重線による格子文。口縁部内面は4重圏線を2重線で区画。底部内面は斜格子状文。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。(灰白色)	波佐見系。19世紀前半～中頃。
9	第41図	肥前磁器 碗	西側調査区 1/4	口 底	(10.8) —	高	[4.2]	外面丸内にコンニャク印判による桐文。(灰白色)	波佐見系。18世紀中頃～後半。
10	第41図	肥前磁器 皿	西側調査区 1/4	口 底	(12.9) (8.0)	高	4.0	器壁は厚い。内外面染付。高台内1重圏線。(灰白色)	18世紀中頃～19世紀前半。
11	第41図 PL.18	肥前磁器 皿	1/3	口 底	(10.0) 5.4	高	2.3	輪花。内面コンニャク印判による花状の染付。(白色)	18世紀。
12	第41図 PL.18	肥前磁器 紅皿	東側調査区攪乱 内 口縁部1/3、底 部1/2	口 底	(6.4) 2.5	高	1.8	外型による成形で口縁部から体部外面に唐草文を印刻。高台に成形時の皺残る。口縁部上面は平坦。内面から外面中位付近に透明釉。(灰白色)	19世紀中頃。
13	第41図 PL.18	肥前陶器 青緑釉皿	西側調査区 口縁部一部、底 部完	口 底	(12.8) 4.6	高	3.8	体部から口縁部はやや丸味を帯びて開く。内面に緑色釉を厚く、外面に薄くかけ、口縁部から内面に青釉をかける。内面は部分的に緑色釉部分が残る。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。釉剥ぎ部に砂目4箇所。(灰白色)	17世紀中頃～末。
14	第41図 PL.18	瀬戸・美濃 陶器 灯火受皿	東側調査区攪乱 内 2/3	口 底	10.1 4.6	高	2.2	外面口縁部以下は回転鋳削り。受け部に「U」字状の挟り。錆釉施釉後に外面口縁部以下を拭う。(灰黄色)	18世紀後半～19世紀前半。
15	第41図 PL.18	軟質施釉陶 器 蓋	西側調査区 体部1/2	口 底	— (4.0)	高	—	胎土は土器質で全面に透明な釉を薄くかける。底部左回転糸切無調整。(にぶい橙色)	時期不詳。
16	第41図 PL.18	瀬戸・美濃 陶器 蓋	西側調査区 口縁部欠	口 底	— 5.6	高	—	口縁部は水平に開く。つまみは小さく突き出るが低くつまめない。上面に鉛釉を施釉するが、口縁部付近は薄く、錆釉状となる。下面は無釉。底部右回転糸切無調整。(淡黄色)	江戸時代。
17	第41図 PL.18	瀬戸・美濃 陶器 水注	西側調査区 口縁部から体部 1/3	口 底	(5.2) —	高	[8.7]	取っ手残存。注ぎ口欠損。口縁部は受け口状を呈し、肩部には3条の横線。肩部の張りは強い。内面の轆轤目は顕著。内外面に灰釉。(灰白色)	江戸時代。
18	第41図 PL.18	瀬戸・美濃 陶器 仏花瓶	口縁部欠	口 底	— 5.7	高	[12.2]	口縁部欠損。外面下半に錆色の鉄釉、上半から頸部内面に灰釉の掛け分け。一對の取っ手は退化して円形貼付文状となる。底部右回転糸切無調整で突部の釉が擦れる。(褐色)	18世紀。
19	第41図 PL.19	瀬戸陶器 すり鉢	口縁部一部、底 部1/3	口 底	(32.6) (12.6)	高	14.7	口縁部は外反し、内面は明瞭な稜をなす。内面は13本一単位のすり目。内外面に錆釉。底部右回転糸切無調整。底部内面の釉は使用により摩滅。体部内面下位の釉は部分的に摩滅。口縁部は擦られており、残存部中央は注ぎ口状に挟り込む。底部外面周縁の釉も擦れる。(灰白色)	17世紀末～18世紀前半。
20	第41図 PL.18	在地系土器 組合せ式竈	1号井戸掘り直 し部分 ほぼ完存	口 底	40.0 32.3	高	12.6	断面中央は黒色、器表付近はにぶい橙色、器表は黒色。内面は酸化により部分的ににぶい橙色。煙突内面は煤付着。外型成形で外面には型による凹凸文様。外面上下の括れ部に部分的に緑色物質の付着が認められ、銅線による補強が行われていたと考えられる。組合せ式竈の上段が中段であろう。(黒色)	組合せ式竈。
21	第42図 PL.19	在地系土器 組合せ式竈 か	1号井戸掘り直 し部分 1/4	口 底	(32.2) —	高	[12.0]	断面中央から外面側は灰白色、内面側は浅黄橙色で部分的に赤褐色。外型成形で施文も外型。外面にキラ付着。外面口縁部下に補強帯と推定される鉄錆付着。(灰白・浅黄褐色)	22と同一個体か。江戸時代以降。20との組合せか。
22	第42図 PL.19	在地系土器 組合せ式竈 か	1号井戸掘り直 し部分 下半	口 底	— (28.0)	高	[15.6]	内面上半は浅黄褐色。外型成形で外面に型による施文。外面器表にキラ付着。下部の一方に風口を設ける。括れ部内面にサナ受けの突帯。底部外面周縁は高台状に作り、2方を長さ8cmの挟り。底部外面は砂底状。体部下端と括れ部外面に錆びた補強帯残る。(灰～灰褐色)	21と同一個体か。江戸時代以降。20との組合せか。

NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			成形・整形の特徴(色調)	摘要	
				口 底	— —	高			
23	第42図 PL.19	搬入系?土 器 人形	東側調査区攪乱 内 胴体	口 底	— —	高	[5.0]	頸以上と右腕、左手先、右足、左足首より先を欠損。右片肌を脱ぎ、袖を背中側に垂らした座り姿の人形。(灰白色)	
24	第42図 PL.19	在地系土器 羽口	基部	長	[8.3]	径	5.74 ~ 6.10 (基部)	基部内径は34.0mm ~ 34.6mm。割れ口は内外の2層に明瞭に分かれる。相対する2方向に還元され、表面がやや発泡した場所が帯状に延びる。	
25	第42図	在地系土器 羽口	破片	長	[5.6]	径	—	図面下部の器表に還元してやや発泡した箇所が認められ、24と同様な状態と推定される。断面は2層に分かれず、同一個体の可能性は不明。	
26	第42図	在地系土器 羽口	西側調査区 先端部片	長	[5.9]	径	—	先端部外面ガラス状となる。他の羽口に比して胎土がやや緻密。(橙・灰褐色)	近現代か。
27	第42図	在地系土器 羽口	西側調査区 先端部片	長	[5.1]	径	—	先端部外面ガラス状となる。内面器表は皸状亀裂残す。外面器表は厚痕状の窪みを残す。器厚は13mm。(にぶい橙・灰黄褐色)	
28	第42図	在地系土器 羽口	西側調査区 先端部片	長	[6.0]	径	—	先端部外面ガラス状となる。内面器表は皸状亀裂残す。外面器表は厚痕状の窪みを残す。器厚は12mm。(にぶい橙・灰黄褐色)	
29	第42図	在地系土器 羽口	西側調査区 破片	長	[5.9]	径	—	内面器表は横方向の撫で状痕があり、器表は滑らか。外面器表は筋状の凹凸を残す。器厚12.5mm (灰白色)	
NO.	挿図 PL.NO.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm)			製作状況・使用状況	摘要	
30	第42図 PL.19	砥石	東側調査区 1/2	長 厚	5.1 1.6 ~ 1.9	幅			2.9 ~ 3.2
31	第42図 PL.19	砥石	東側調査区 1/2	長 厚	[6.1] 1.3 ~ 1.6	幅	2.9 ~ 3.2	主要砥面は幅広の表裏2面であり、砥面中央が主軸方向に長い楕円形状に浅く窪む。この砥面形状は30に似る。両側面には主軸と直交方向の条線が認められる。	砥沢石か。砥面形状が30と同様。
32	第42図 PL.19	砥石	東側調査区 1/2	長 厚	[5.4] 2.2	幅	2.3 ~ 2.5	一方を欠損。全体に直方体に近く、角がシャープ。残存する小口面に浅く細いシャープな条線が認められる。	石材不明。近現代か。
33	第42図 PL.19	砥石	攪乱内 欠損使用の完形	長 厚	— 0.1 ~ 2.9	幅	3.2 ~ 3.4	欠損部が最も厚く、端部残存部に向かい薄くなる。左右両側面は櫛刃状鑿痕が残る。表面と左側面には角がほぼ直角の砥面が残る。欠損部中央には平滑な窪みが溝状に残る。欠損以前の円穴か。	砥沢石か。
34	第43図 PL.19	砥石	攪乱3内 完形	長 厚	5.1 2.5	幅	2.3 ~ 3.1	横断面が多角形状を呈する小型の砥石か。表面と両側面は砥面状の曲面となる。裏面は鑿工工具による整形痕か。	砂岩か。
35	第43図 PL.19	砥石	鍛冶工房付近 2/3	長 厚	— 1.1 ~ 1.9	幅	2.4 ~ 2.7	一方の小口は欠損。残存する小口面は砥面と同様に平滑。幅広の2面を使用。主要砥面は中央が主軸に沿って浅く溝状に窪む。両側面の砥面中央も浅く溝状に窪む。幅広面を主要砥面とした砥石に共通する砥面形状を有する。	砥沢石か。
36	第43図	五輪塔火輪	表土 1/6欠	長 厚	20.0 12.8	幅	20.5	五輪塔の火輪。上部の穴は深い。底面は平坦で中央部は直径13cmの円形状に煤が付着したように黒変する。	牛伏砂岩か。
37	第43図 PL.19	銅製品 煙管	西側調査区	長 厚	3.5 1.6	幅	1.6	煙管吸い口、肩は太く吸い口はきわめて短い。	7.2 g
38	第43図 PL.19	鉄製品 釘	攪乱1内 ほぼ完形か	長 厚	4.0 0.25	幅	0.4	断面正方形の角釘で頭部は角形、木質の付着は見られない。	1.47 g
39	第43図 PL.19	鉄製品 釘	西側調査区 ほぼ完形か	長 厚	7.5 0.5	幅	0.5	断面四角の角釘で頭部は撥状に広がるが折り曲げ等はなし、先端はやや細くなるが丸みを持ち鋭利にとがらない。木質等の付着は見られない。	9.54 g
40	第43図 PL.19	鉄製品 釘	攪乱1内 ほぼ完形	長 厚	7.5 0.5	幅	1.2	現存長さ7.5断面正方形で先端を欠く角釘。頭部は両測をみみ状に伸ばす、木質の付着は見られない。	6.97 g
41	第43図 PL.19	鉄製品 釘	攪乱1内 完形	長 厚	10 0.6	幅	1.5	長さ10cm断面四角形の角釘で、頭部は横広に叩き広げ強く折り曲げられている。本体中央はくねくねと曲がっているが先端に僅かに木質の痕跡がのこるのみで使用の状況は不明。	10.88 g
42	第43図 PL.19	鉄製品 不詳	攪乱4内 ほぼ完形か	長 厚	6 1	幅	1.7	断面長方形の角棒状鉄製品で長さ6cm両端とも本来形状をとどめると見られるが、他に器種や用途を特定しうる特徴は把握できない。鉄素材または未成品の可能性あり。	35.26 g
43	第43図 PL.19	鉄製品 不詳	攪乱1内 ほぼ完形か	長 厚	6.3 0.5	幅	1.6	断面やや三角形の棒状の鉄製品で長さ6cm程で両端は本来の形状に近いとみられるが器種や用途を特定しうる形状・特徴は把握できない。鉄素材または未成品の可能性あり。	20.41 g
44	第43図 PL.19	鉄製品 不詳	攪乱1内 ほぼ完形か	長 厚	7 0.7	幅	1.6	断面三角形の幅の狭い板状の鉄製品でわずかに弧を描くように曲がっている。両端は本来の形態をとどめるとみられるが、他に器種や用途を特定しうる形状・特徴は把握できない。鉄素材の可能性あり。	27.65 g
45	第43図 PL.19	鉄製品 不詳	攪乱4内 完形か	長 厚	12 0.6	幅	1.3	断面長方形の棒状の鉄製品で長さ12cmで両端とも本来形状をとどめるとみられるが、他に器種や用途を特定しうる形状・特徴は把握できない。鉄素材または未成品の可能性あり。	42.69 g
46	第43図 PL.19	銅製品 銭貨	攪乱内 完形	長 厚	2.44 0.12	幅	2.44	寛永通宝。新寛永。裏面は緑・郭浅く凹凸が少ない。	3.0 g
47	第43図 PL.19	銅製品 銭貨	一括 完形	長 厚	2.37 0.20	幅	2.48	寛永通宝。新寛永。裏面は凹凸が少なく鑄溜り有り。	1.92 g
48	第43図 PL.19	銅製品 銭貨	一括 完形	長 厚	2.32 0.11	幅	2.32	寛永通宝。新寛永。緑の一部が劣化し破損する文字の凹凸が少ない	2.25 g
49	第43図 PL.19	銅製品 銭貨	攪乱 完形	長 厚	2.46 0.12	幅	2.46	寛永通宝。新寛永。表裏とる彫は深く緑・郭とも明瞭。	2.47 g

参考文献

参考文献

1	吉井町教育委員会	『入野遺跡』	1962
2	山崎一	『群馬県古城址の研究 下巻』	1972
3	群馬県教育委員会	群馬県歴史の道調査報告書第十集『下仁田道』	1981
4	吉井町教育委員会	『川内遺跡』	1982
5	吉井町教育委員会	『川福遺跡調査報告書』	1986
6	吉井町教育委員会	『入野遺跡』～『入野遺跡Ⅲ』	1985～1986
7	吉井町教育委員会	『道六神遺跡』	1986
8	吉井町教育委員会	『東沢遺跡 折茂東遺跡』	1987
9	吉井町教育委員会	『椿谷戸遺跡発掘調査報告書』	1989
10	吉井町教育委員会	『柳田遺跡発掘調査報告書』	1989
11	吉井町教育委員会	『富岡遺跡』	1989
12	吉井町教育委員会	『竹腰遺跡』	1990
13	吉井町教育委員会	『椿谷戸遺跡Ⅱ』	1990
14	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『矢田遺跡』～『矢田遺跡Ⅷ』	1990～1997
15	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『黒熊中西遺跡(1)』	1992
16	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『神保下條遺跡』	1992
17	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『多胡蛇黒遺跡』	1993
18	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『神保富士塚遺跡』	1993
19	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『黒熊中西遺跡(2)』	1994
20	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『多比良平野遺跡 白石根遺跡』	1994
21	吉井町教育委員会	『ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書』	1995
22	吉井町教育委員会	『長根遺跡群発掘調査報告書』～『長根遺跡群発掘調査報告書Ⅸ』	1995～2005
23	吉井町教育委員会	『御門遺跡発掘調査報告書』	1995
24	吉井町教育委員会	『入野遺跡・場遺跡発掘調査報告書』	1995
25	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『多比良追部野遺跡』	1997
26	財団法人群馬県埋蔵文化財事業団	『神保植松遺跡』	1997
27	吉井町教育委員会	『天神下遺跡発掘調査報告書』	1998
28	吉井町教育委員会	『多比良観音山遺跡発掘調査報告書』	1999
29	吉井町教育委員会	『多比良天神原遺跡発掘調査報告書』	2000
30	吉井町教育委員会	『矢田遺跡発掘調査報告書』	2002
31	吉井町教育委員会	『川福遺跡第二次発掘調査報告書』	2002
32	吉井町教育委員会	『多比良笠掛遺跡発掘調査報告書』	2003
33	吉井町教育委員会	『川内遺跡』	2004
34	吉井町教育委員会	『矢田遺跡(第3次)発掘調査報告書』	2004
35	吉井町教育委員会	『椿谷戸遺跡第四次発掘調査報告書』	2004
36	吉井町教育委員会	『上河原遺跡発掘調査報告書』	2004
37	吉井町教育委員会	『下条遺跡発掘調査報告書』	2004
38	吉井町教育委員会	『東シメ木・多胡松原遺跡発掘調査報告書』	2005
39	吉井町教育委員会	『中林遺跡』	2006

写真図版



① 遺跡東側全景(南西から)



② 遺跡西側全景(北西から)



① 1号方形周溝遺構全景(南西から)



② 1号方形周溝遺構東側周溝(北西から)



③ 1号方形周溝遺構東側周溝内土坑状施設断面(北西から)



④ 1号方形周溝遺構北側周溝(南西から)



⑤ 1号方形周溝遺構周溝断面(北西から)



① 1号住居全景(西から)



② 1号住居上面遺物出土状態(西から)



③ 1号住居上面土層断面(南西から)



④ 1号住居下面上層断面(南西から)



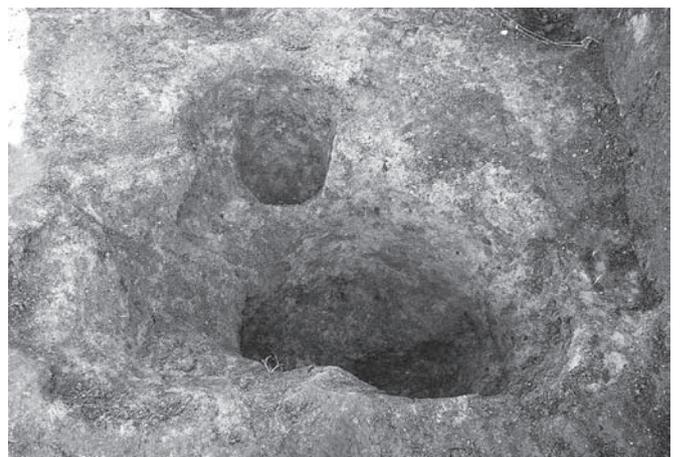
⑤ 1号住居貯蔵穴断面(南から)



⑥ 1号住居貯蔵穴遺物出土状態(西から)



⑦ 1号住居P1土層断面(南から)



⑧ 1号住居P4完掘状態(西から)

PL.4



① 1号住居カマド袖元部(南から)



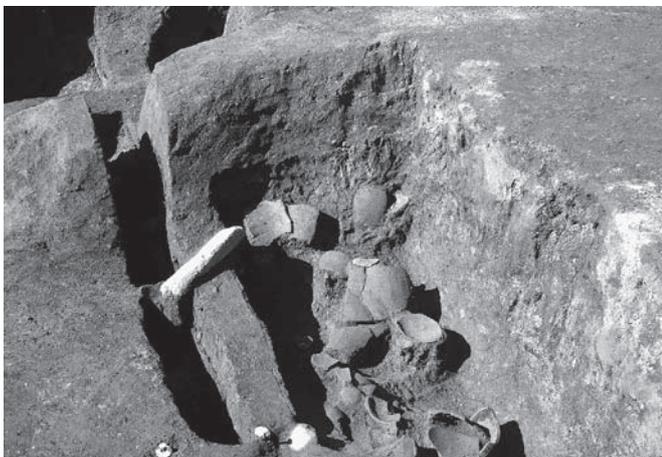
② 1号住居カマド周辺遺物出土状態(東から)



③ 1号住居断面(西から)



④ 1号住居カマド断面(南から)



⑤ 1号住居カマド東脇遺物出土状態(東から)



⑥ 2号住居全景(南から)



⑦ 2号住居断面(南から)



⑧ 2号住居P1断面(北から)



① 3号土坑全景(南東から)



② 4号土坑全景(東から)



③ 5号土坑全景(北西から)



④ 6号(右)・7号(左)土坑全景(北西から)



⑤ 1号道路上面全景(北東から)



⑥ 1号道路下面全景(北東から)



① 1号道路全景(西から)



② 1号道路南側溝断面(北東から)



③ 1号道路南側溝内遺物出土状態(西から)



④ 1号道路南側溝遺物出土状態(西から)



⑤ 1号道路北側溝と柱列(北東から)



⑥ 1号道路北側溝断面(北東から)



⑦ 1号道路北側溝断面(北東から)



① 1号道路東側断面(北東から)



② 1号道路南側断面(北西から)



③ 1号道路下面路面(東から)



④ 1号道路下面路面(東から)



⑤ 1号道路溝脇掘り込み群(北東から)



① 1号井戸全景(北東から)



② 1号井戸断面(北から)



③ 1号井戸遺物出土状態(南東から)



④ 1号井戸底面付近断面(北から)



⑤ 1号井戸遺物出土状態(北西から)



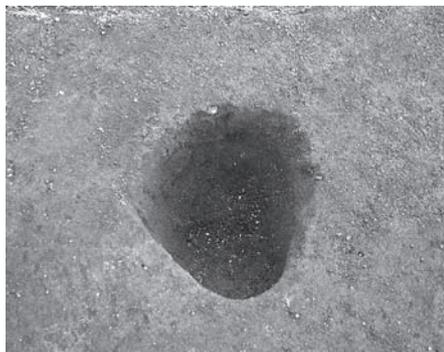
⑥ 1号井戸再建部断面(西から)



⑦ 1号礎石建物全景(東から)



⑧ 3号掘立柱建物全景(東から)



① 1号ピット列P 1全景(北から)



② 1号ピット列P 2全景(北から)



③ 1号ピット列P 4全景(北から)



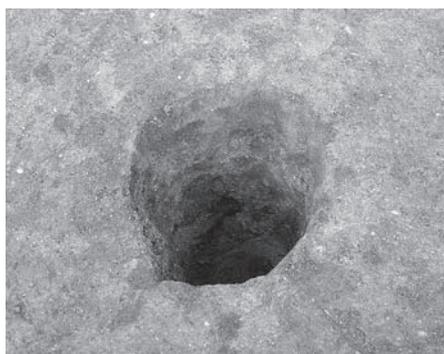
④ 1号ピット列P 7全景(北から)



⑤ 3号掘立柱建物P 8全景(南から)



⑥ 3号掘立柱建物P 9全景(南から)



⑦ 3号掘立柱建物P 10全景(南から)



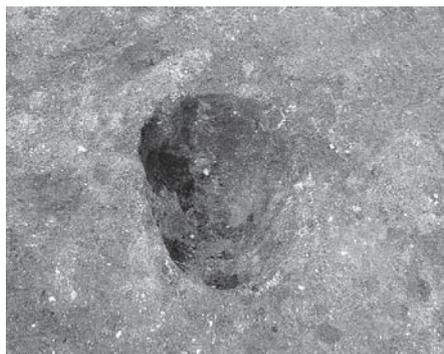
⑧ 3号掘立柱建物P 10断面(東から)



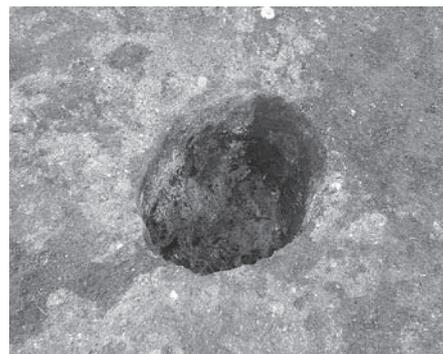
⑨ 3号掘立柱建物P 11全景(南から)



⑩ 3号掘立柱建物P 11断面(南から)



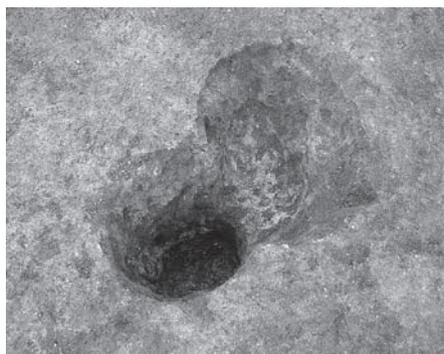
⑪ 3号掘立柱建物P 12全景(南から)



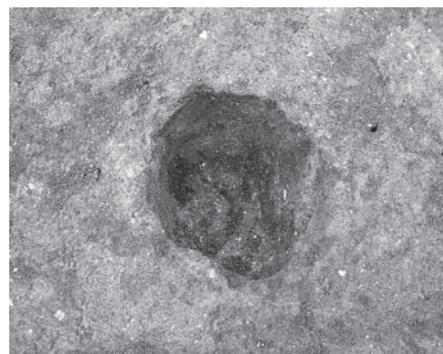
⑫ 3号掘立柱建物P 13全景(南から)



⑬ 2号掘立柱建物P 14全景(南西から)



⑭ 2号掘立柱建物P 15全景(南東から)



⑮ 2号掘立柱建物P 16全景(南から)



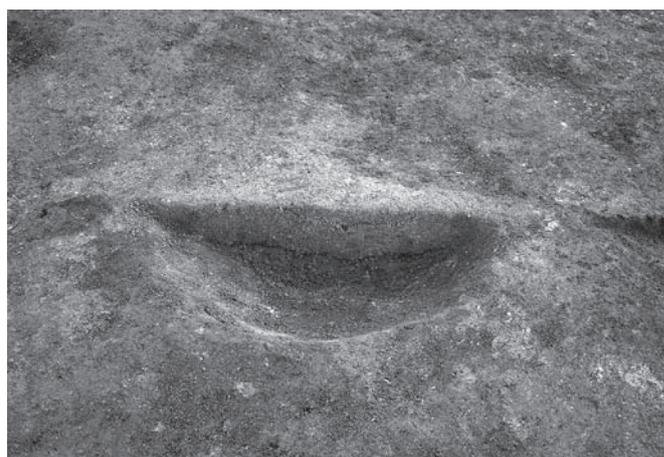
① 鍛冶遺構群全景(東から)



② 1・2号鍛冶確認状態(東から)



③ 1号鍛冶全景(北から)



④ 1号鍛冶焼土断面(西から)



① 1号鍛冶ピット上層断面(西から)



② 1号鍛冶ピット下層断面(西から)



③ 2号鍛冶全景(東から)



④ 2号鍛冶焼土断面(東から)



⑤ 2号鍛冶ピット断面(西から)



⑥ 2号鍛冶ピット全景(北から)



⑦ 3号鍛冶焼土断面(南から)



⑧ 3号鍛冶ピット断面(南から)



① 1号土坑全景(北から)



② 8号土坑全景(東から)



③ 9号土坑全景(西から)



④土坑集中地点A全景(南から)



⑤ 12号土坑全景(西から)



⑥ 25号土坑断面(西から)



⑦土坑集中地点B全景(南から)



⑧土坑集中地点C全景(西から)



⑨ 18号土坑断面(東から)



⑩ 19号土坑断面(南から)



⑪ 20号土坑断面(北から)



⑫ 23号土坑全景(西から)



⑬ 24号土坑断面(南から)



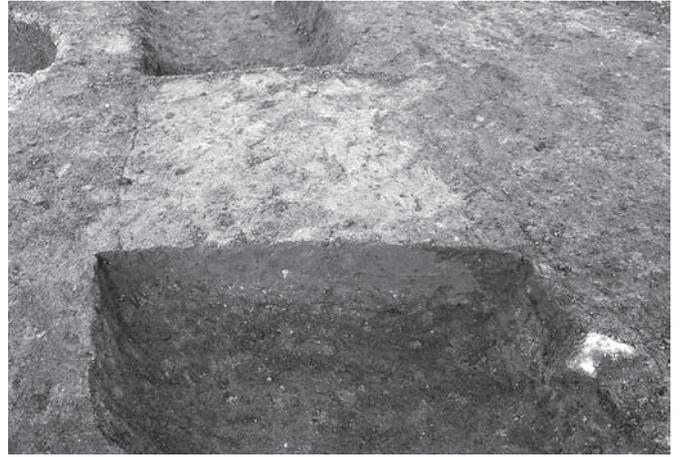
⑭ 31号土坑全景(南東から)



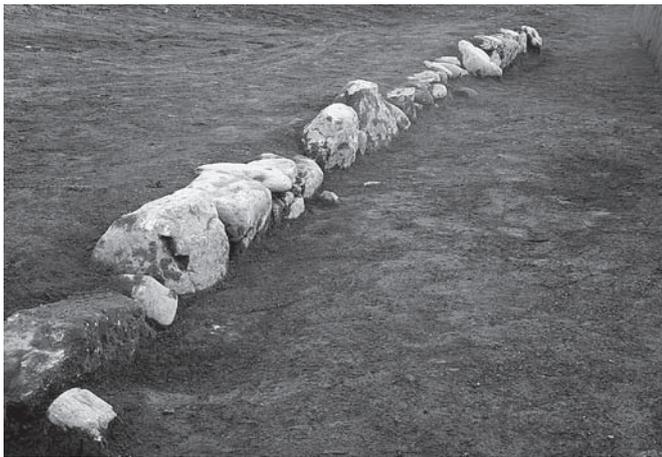
⑮ 33号土坑断面(北から)



① 5号溝全景(北から)



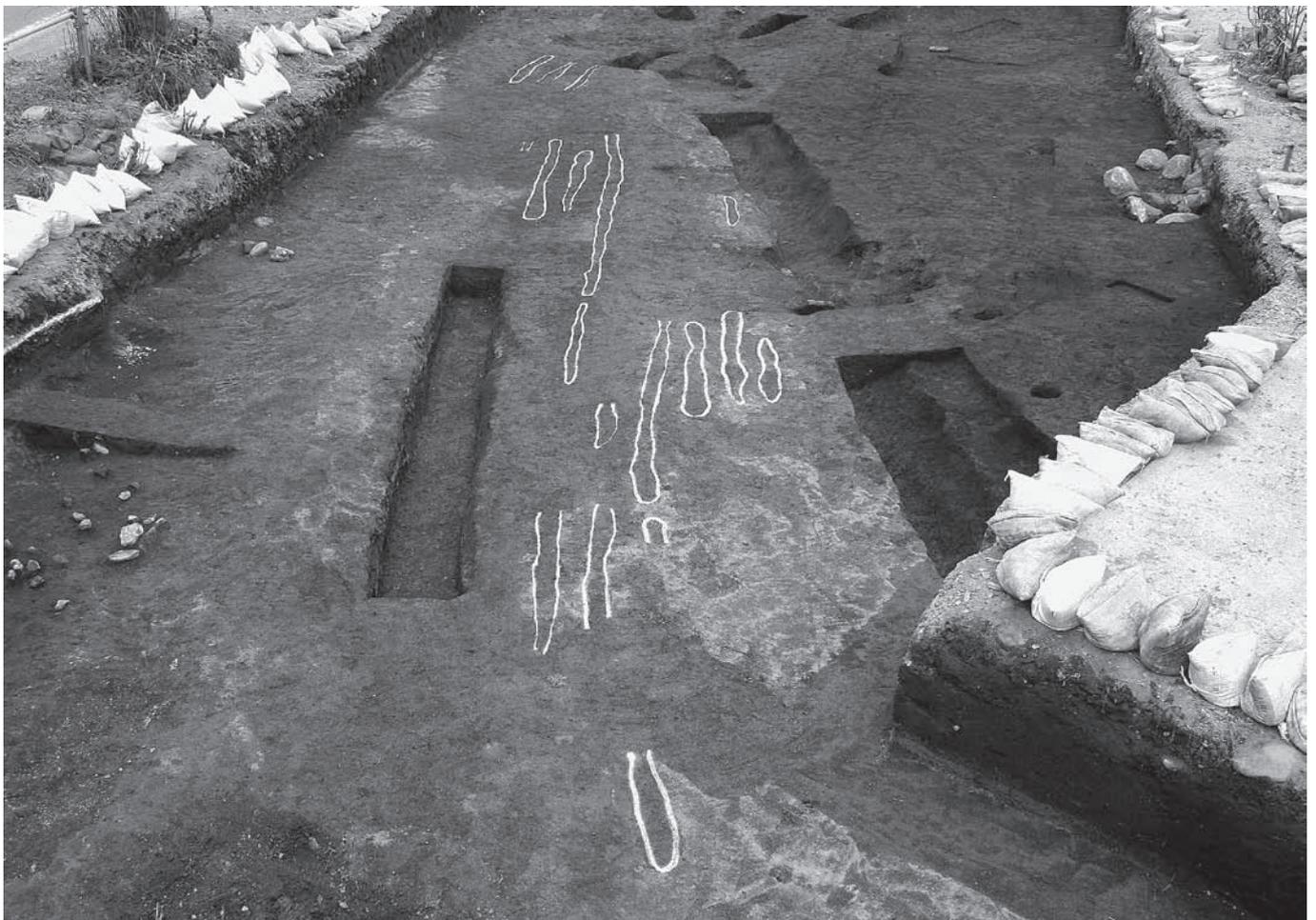
② 5号溝断面(南から)



③ 1号列石全景(北西から)



④ 北西隅土層(南から)



⑤ 畑全景(東から)

PL.14

1号住居



道



側溝



1号井戸

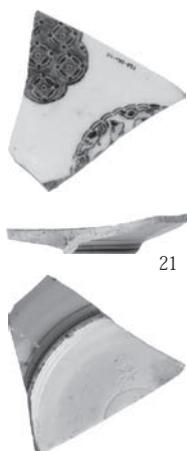


PL.16

1号井戸



20



21



27



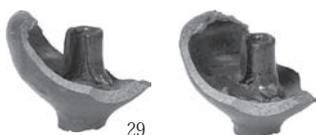
24



25



26



29



30



31



33



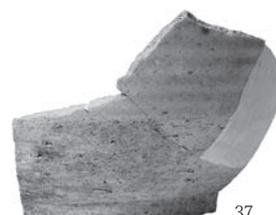
34



35



36



37



38



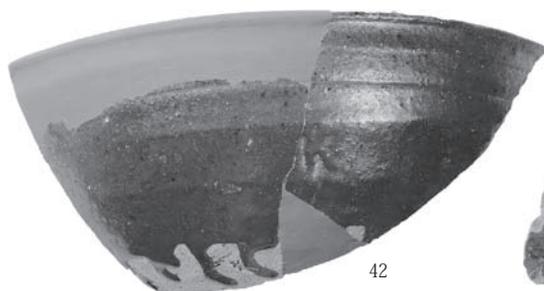
39



40



41



42



44



45



1号井戸



46



47



50



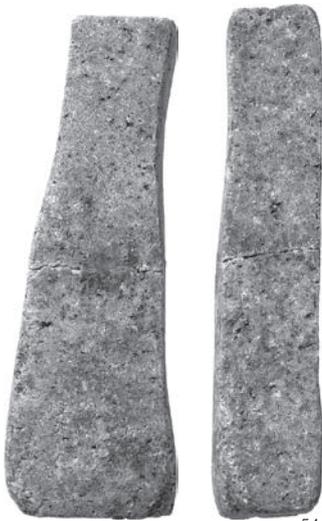
48



51



52



54



55



56



57



59



60



61A



61



61B

鍛冶工房



58



4ピット-1



4ピット-2

土坑



1坑-1



1坑-2



13坑-5



13坑-6



15坑-8



17坑-10



17坑-11



13坑-7

PL.18



12坑-14



12坑-15



13坑-16



13坑-17



13坑-18



5溝-1

石垣



4



7



6



8



9

その他



2



4



7



11



12



8



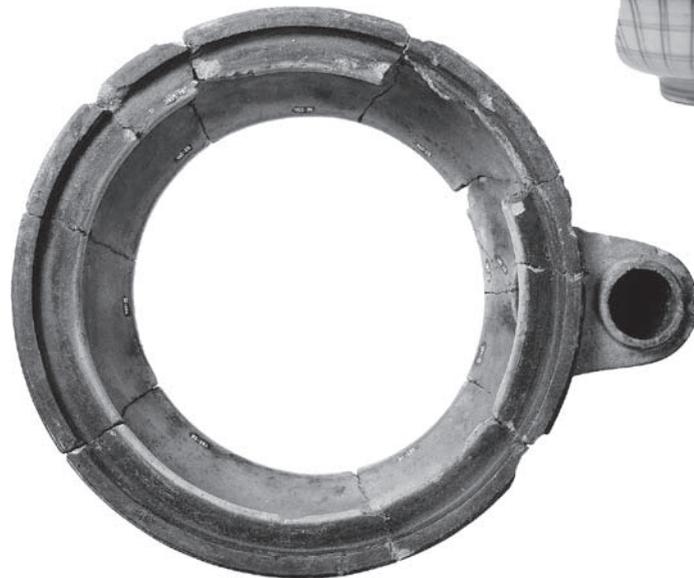
13



14



16



20



15



17



18

その他



21



19



23



22



24



30



31



32



34



33



35



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



①強磁着大型滓



②強磁着大型滓



③中磁着大型滓



④強磁着中型滓



⑤強磁着中型滓



⑥弱磁着中型滓



⑦非磁着中型滓



⑧非磁着中型滓



⑨1号ピット粒状滓



⑩2号ピット粒状滓



⑪3号ピット粒状滓



⑫4号ピット粒状滓



⑬2号ピット鍛造剥片



⑭3号ピット鍛造剥片



⑮4号ピット鍛造剥片



⑯2号ピット下鍛造剥片



⑰井戸出土粘土溶解物

報告書抄録

書名ふりがな	よしいがわしもじゅくーいせきー
書名	吉井川下宿遺跡
副書名	社会資本総合整備(地域自主戦略(公安))事業一般国道254号川内工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	566
編著者名	大西雅広 飯田陽一
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20130312
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	よしいがわしもじゅくいせき
遺跡名	吉井川下宿遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんたかさきしよしいまちよしいがわ
遺跡所在地	群馬県高崎市吉井町吉井川
市町村コード	10204
遺跡番号	3357
北緯(世界測地系)	361511
東経(世界測地系)	1385933
調査期間	20100101-20100131
調査面積	1179m ²
調査原因	道路建設
種別	生産/集落
主な時代	古墳/江戸
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居1-土器+金属製品/江戸-建物3+井戸1+道-陶磁器+金属製品+石製品+羽口/生産-江戸-鍛冶3+土坑4-鍛造剥片
特記事項	江戸時代の中山道脇往還路面と特産品吉井の火打金の鍛冶工房に関連する遺構。
要約	江戸時代の中山道脇往還下仁田道の吉井宿入口付近にあたる。天明3年(1783)に噴火した浅間山の降下軽石を被覆する道跡や軽石廃棄によって埋もれた井戸、江戸時代から近代にかけて操業し特産品の火打金を生産したと思われる鍛冶の痕跡、古墳時代後期の住居跡などを調査した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第566集

吉井川下宿遺跡

社会資本総合整備（地域自主戦略（公安））事業
一般国道254号川内工区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年3月5日 印刷

平成25(2013)年3月12日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社